高齢者の遊び・易占い

高齢者の遊び・易占い

寺前信次 著

「高齢者の遊び・易占い」目次

まえがき …一
易経(周易)とは …四
易の名義 …五
易は自己創造の立命学 …五
易の三義 …七
易の字源と成立 …八
易占いと人生 …一〇
易の組織 …一〇
(易占いはどういうものか)
易伝について …一四
八つの基本(小成八卦)の意味 …一五
陰陽思想の無限の変化 …一六
太極とは何か …一六
太極図の変化 …一七
六十四卦の見方・解釈法 …一七
筮法(占い方) …一九
易を立てる時の注意 …二〇
易はなぜ当るのか …二〇
最も簡単な易占いの方法 …二一
六十四卦の表 …二二
易をたてて未来を知る方法(六十四卦) …二三

乾…二四
坤…二五
屯…二六
蒙…二七
需…二八
訟…二九
師…三〇
比…三一
小畜…三二
履…三三
泰…三四
否…三五
同人…三六
大有…三七
謙…三八
予…三九
随…四〇
蠱…四一
臨…四二
観…四三
噬嗑…四四
賁…四五
剥…四六
復…四七
无…四八
大畜…四九
頤…五〇
大過…五一
習坎…五二
離…五三
咸…五四
恒…五五
遯…五六
大壮…五七
晋…五八
明夷…五九
家人…六〇
睽…六一
蹇…六二
解…六三
損…六四

益…六五
夬…六六
姤…六七
萃…六八
升…六九
困…七〇
井…七一
革…七二
鼎…七三
震…七四
艮…七五
漸…七六
帰妹…七七
豐…七八
旅…七九
巽…八〇
兌…八一
渙…八二
節…八三
孚…八四
小過…八五
既済…八六
未済…八七

繫辞伝について …八八
あとがき …九四

この世に生を享けて物覚えをしてから八十余年が経過した。子供の頃の遠い昔、夜になると大阪の街角に木や竹の枠に紙を貼り、中に油皿やロウソクをいれて火をともした行灯を掲げ、人目につくように客を待っていた占い師の姿が漠然として私の脳裡に浮かんでくる。

私は易占い（易経）や相学（手相、人相、骨相、姓名判断、占星術など）の師の前に立って、運勢判断や運命判断を視てもらったことはなかった。ただ一度だけ兵馬倥偬の間（忙しい戦争の時）に、筮竹を立て算木を置いた正式な易を立てて占ってもらった経験がある。（筮竹の易は後記する）

昭和十五年（一九四〇）から中国戦線に出馬して弾丸雨飛の戦陣に立ち、死生の極限の中で戦っていた小隊長の職を解かれ、軍人として最高の名誉である歩兵聯隊の旗手を拝命し、軍旗を捧じて各種の作戦に従軍した。当時の聯隊本部は前宋（九六〇～一二七九）の都であった河南省都・開封にあり、人口二十万の大都市は殷賑（にぎわっていること）を極め、市の中心に名刹・相国寺が建立されていた。この寺の起源は古く南北朝・北斉時代の五五五年に建国寺として創建され、日本の弘法大師も修行した寺院（千手観音像は国宝）である。

人生は夢のある時間で満たしたいと思っていた青年将校時代のことである。この由緒ある古寺に詣でたのであった。後にも先にもこの時一回だけだが、境内に店を構えていた筮竹の占い師の前に立ったのであった。それは素見し半分、中国語の勉強が半分だったと思っている。筮竹で占った占い師は私を見詰めて『あなたは三十二歳で大将になる』と占った。弱冠（二十歳のこと・年が若いこと）の少尉の私が三十二歳で大将になれるはずが無いと笑いを吹き出し、支那鬚（あごひげ）を生やした老占い師の前を懐かしい想い出を残して立ち去った。このことだけは不思議なことにも老耄になった私の脳細胞は現在でも明瞭に記憶している。

戦後、昭和六十二年（一九八七）の長江山峡下りの旅で、孫子・呉子・諸葛孔明などの兵法家が使用したという「八陣の陣立」（八陣図）を見た。これは易占い（易経）から創案されたもので魚鱗、鶴翼、長蛇、雁行などの種々の陣形である。陣営は八卦の六十四墨の陣地からなり、入ると出口が分からなくなるという。又、平成三年、諸葛孔明が陣没した五丈原を訪れ、孔明の死を司馬仲達が易占いで看破したことを学んだ。

「資治通鑑」（書名）には『死せる孔明、生ける仲達を走らしむ』と書かれている。

外地にあって激しく干戈を交えていた時は当然のこと、日本内地で軍の学校附の教育関係に従事した時も勿論、墨突不黔（忙しくて動きまわること）、易占いに心が走ることは微塵もなかった。

戦後の再起の「食生活」は戦闘状態の延長で「どん底」を余儀なくされ、「不惑」の歳には惑わず通運業に専念していた。しかし、神社仏閣の「おみくじ」（神仏に祈って事の吉凶を占うために引くくじ）等の印刷物を配達し、占いの「おみくじ」の本質を知ったのである。

天命を知ったのは五十五歳であった。私の子女が大学を卒業して職に就くや通運業を知人に譲り、これからが本当の意味の我が人生だと悟った（細部は平成十七年に記した「今生の想い出」の七十一頁参照）。しかしその時は老齢期を迎えていた。その間の約三十年、自助努力（他に依存しない）に生きたことは、軍で涵養（教え養うこと）した堅忍不抜（どんな困難や誘惑にも負けないこと）の精神によるものと信じている。

廃業してから一年間の内に測量士、土地家屋調査士（共に国家試験）と、土地建物取引主任者（国家試験に準じた知事の認可試験・通常、不動産業と称す）の免許を取得し、その御蔭で海外雄飛の費用は賄われ釣り銭が出たほどであった。しかし其の業も十年で廃止し、通運業を営んでいた時に建立したアパートの負債も返済して、老後の生活不安の解消に努めた。しかし易占いに足が向いたことはない。

高齢になって喜寿を迎えた歳に我が家の遺伝である「胃癌」（初期）が発見され、国立山中病院で胃の三分の二を切除する手術を受けたが、経験不足の医師の失敗から腕・脚が痺れる末梢神経障害となり、我が晩年は病魔に悩まされて現在に到っている（詳細は「今生の想い出」の一六七頁以降を参照）。

軍国主義が華やかな時代には軍人志願が圧倒的に多く、戦後の経済万能時代になると医師志願者が増加したのは仕方が無い。しかし両志願者の精神的要素は完全に異質である。軍人は国家・民族の為に生命を犠牲にし、医師志願者は仁徳をもって人を助ける仁術主義であった。しかし戦後の医師志願者の多くは拝金主義であると言えるだろう。私は其の犠牲者の一人である。

現代医学は万能ではないと判断した私は今日まで約六年間、近くの鍼灸師「左近作一男先生」の「灸」

の門を叩き、週二回の「灸」を頼りにして末梢神経障害の治療に挑戦してきた。その交界に拔群とにエ
えないまでも月日の経過とともに痛みは和らぎ、東洋医学の効果と優秀性を身を以って体験した。

一回の灸を据える箇所は頭部・頚椎・肩・脊柱・腰椎・腕・脚の経絡『漢方では「つぼ」（経穴）を云う。経＝動脈、絡＝静脈』に合計五十箇所以上で平均の所要時間は一時間程度であった。治療の間は東洋医学の先生の蘊蓄を傾けた講義の時間でもあった。東洋医学は兵学と共に『周易』（後記）から発展して生み出されたもので、私が『易』に関心を懐いたのは左近作先生の東洋医学の講義であった。特に先生は大正六年生まれで昭和十三年兵として徴収され、陸軍第二十一師団歩兵第八十一聯隊要員として北支那（中国）戦線の徐州（江蘇省）～開封（河南省）間の戦闘に従軍した。その戦線は私が所属した三十五師団と同じく、兄弟師団であった。そして奇しくも先生は左眼を負傷した傷痍軍人であり。私は現役将校として珍しく三回も受傷している。「一樹の蔭一河の流れも他生の縁」（一本の樹の蔭にやどり、同じ河の水を飲むのも、浅からぬ因縁があればこそである）と云う通り、二人は「肝胆相照らす」（意見がすっかり一致すること）関係となった。

傘寿を越し、自分の来し方を振り返ってみると、今日に至った人生観に幾つかの岐路があったことに気付き、自然に「運命」という目に見えない大きな力の働きを感じて来た。そして益々、易に対する関心が深くなっていった。しかし、ともすれば易は、当る当らないといった易占いの面からのみ、捉えがちである。戦後も老齢期に入るまで心の余裕はなかったが、左近作先生を通じて易学に入っていったのである。

易学は『動いてやまない大自然の創造の理法に従って自分の存在、生活、仕事を自覚し、創りあげていく道を明らかにした立命の学問』であると、安岡正篤先生（「易と人生哲学」の著者）は説いている。即ち立命とは、人為によって損なうことなく、天命を全うすることであろう。

易学の経本である「周易」（易経）は極めて難解な学問である。孔子は晩年になって「易経」（周易）を読み、『韋編三絶』（綴じた革紐が幾度も切れたという故事＝史記）したと述べている。最も未熟者の私は難しい易学は読むだけでは理解できず、「書いて理解せよ」と各解説書を紐解きながら、茲に大きな喜びを身に感じながら蛙鳴蝉噪（泣きわめくだけで意味のない騒々しい下手な文書）の拙文を書き始めたのである。

易経（周易）とは

『易経』は易・書・詩・礼・春秋の「五経」の第一にあげられる中国の古典で、周代に大成されたから「周易」ともいう。易はもと卜筮に用いられたものだが、『易経』という典籍（書）になってからは、卜筮のほか、人間処世上の指針教訓として見られるに至った。時代によって解釈にいろいろの変化があるが、宇宙・人生のすべてを陰陽＝爻の変化によって説明し予言する書物として、東洋思想の根幹をなす哲学書でもある。今日の易学は難解な書物のため、私なりの解説をした。「爻」に就いては後記する。

八卦を作った人は「伏羲」であり、それを重ねて六十四卦とした人は「神農」であるといわれている。六十四卦の一つ一つに、その卦の吉凶善悪を判断する辞がある。これを「卦辞」という。また、各爻ごとに同じく吉凶善悪を判断する辞がある。これを「爻辞」という。卦辞は周の文王の作であり、爻辞は周公の作であるという。『易経』ではこの卦辞と爻辞とを『経』と呼んでいる。

『易』とは「易経」の略であり、周易とも云う。また、『卦』は「卦」とも読む。

『伏羲』（「ふくぎ」「ふっぎ」ともいう）、中国・古代の伝説上の帝王。三皇の一。女媧の兄、また夫（漢代以前の古書では二人は関連が無い）。人首蛇身で、八卦・文字・瑟（おおこと）を考案し、婚　姻の礼を定めた。また網を作って漁労を、火を与えて動物の肉を焼くことを人類に教えたと伝える。

『神農』、中国の古伝説上の帝王。三皇の一。炎帝ともいう。牛首人身。鍬などの農具を発明し、五穀をまいて人類に農業を教え、また、百草をなめて薬草を見分け、医薬の道を開いたと伝える。

『女媧』　中国の古代伝説上の女帝。三皇の一。女帝氏、媧皇、女皇ともいう。伏羲の妹、または妻とい、漢代以前の古書では二人は関係がない。人首蛇身。こわれた天を補修し、天を支える柱を立て、芦の灰を積んで洪水を止めたという。　以上は三皇帝の説明である。

『爻』とは易の卦を組み立てた横画で、「⚋」は陰爻で、「⚊」は陽爻である。屋根の棟の千木のように、物を組み合わせた形にかたどり、「交わる」の意味を表す。『卦』は易で吉凶禍福を判断する基となるもので「三爻」（例＝☲）からなる。『卦』は「圭」＋「卜」で、「圭」は系に通じ、「卜」はうらなうことである。

人間には人生行路にいくつかの岐路があったことに気付き、「運命」という眼に見えない大きな力の働きを感じるのではないだろうか。

易はもと卜筮の書であった。古代蒙昧な民族が迷って決することが出来ない時に、神明（神）にはかる手段として用いたものである。それが中国古代の周（前一〇五〇?～前二五六）の初めに大いに発達し、人事百般の事項を宇宙の諸現象との関係だと見て、適切深奥な解釈を施して、卜筮および運用を広めていったようだ。易は当たるも八卦、当たらないのも八卦と云われている。易は「動いてやまない大自然の創造の理法に従って、自分の存在、生活、仕事等を自覚し、創りあげていく道を明らかにする立命の学問である」ことに気付いてくるのではないだろうか。（卜筮＝卜は亀の甲や獣の骨を焼いてする占い、筮は筮竹を用いてする占い）

易は自己創造の立命学

易は東洋に於ける最も古い思想学問であると同時に、常に新しい思想学問である。要するに易とは、宇宙～人間の実体、本質、創造、変化を探究する学問で、二十一世紀でも其の価値が認識されているのは当然である。易が民衆化するにつれて少々は脱線しているが、根本は千古不変の思想学問であると云える。

例えば、大安というのは、何をしても大丈夫という意味ではなく、大いに安かれ、安ぜよ、この日は安らかにいるのが良い。静かにしているのが良いと云うのが本当の意味である。

易の三義

三義とは、一、変わる（易簡）、二、不変（変易）、三、不易である。一の変わる（易簡）ということは、その根本に変わらないものがあって、初めて変わるのである。其の変わるものを「化」（変えるという意味）という。易簡とは、知り易く従い易く簡単明瞭であるところのものを云うのである。簡単は複雑の初めである。八卦六十四卦をもって天地の間無限の事物を説明する根本は、最も簡単な陰陽（⚋ ⚊）の二爻にあるというが如きものである。太陽は東に出て西に没し、昼は明るく夜は暗く、春に花が咲き冬に雪が降る。親は子を愛し子は親を慕う。これほど簡易なことはない。天地の法則を簡単に示すから、これを易と名付けた。

三義の第二の「変易」（不変）とは、宇宙の森羅万象は一瞬といえども変化しないものはないと云うことである。行雲流水、往夏來寒など、流転変化の観点から見れば一切の現象は変化してやまないのである。だから「変易」というのである。しかし無限の変化の中で、変化しない一定の法則を見出すことができる。日月や星座の運行、春夏秋冬の変化のようなものは一つとして常住するものはなく常に変化している。しかし又、運行の法則から見ると、一定不変、万古にわたって違わないものがある。即ち花そのものは異なるが今年も去年と同じく美しい花が咲くのである。ここに第三義の「不易」の意味が生ずるのである。

だから「変易」と「不易」とは、矛盾するようで互いに矛盾しない意義を持っているのである。したがって第一義の「易簡」（変わる）とつじつまが合わないように見えるが、その複雑な変化の中にも簡易な法則があることを見出すことができる。

故に「運命」というのは、動いてやまない自然と人生のことである。それを生まれた時から決まりきっているから、どうにもならないと云う考え方が、即ち運命の中の「宿命観」であろう。しかし、これでは人間として折角、心というものを与えられながら、意識し、思考することに意義がなくなる。そこで更に進んで宿命観に陥らずに自分の生活、仕事というものを創造していく、これを『立命』と云うのである。同じ運命というけれども、大きく分けると「宿命観」と「立命観」があるわけである。

私が軍人時代に熾烈な激戦場で戦った際、多くの部下の中から選びだし、過酷で決死的な命令を下達したことを回想すると、そこには宿命観と立命観が交叉して私自身の身が縮まる思いがする。

このように易の思想は、易の字義に示しているように、矛盾の中に統一があり、複雑の中に調和がある。易を「易」と読むか「易」と読むかは意見の分かれるところだが、「変易」「易」と読むことを主としていると見るのが通常のようである。

易の根本概念は限りなき造化、つまり生命というものを把握して、其の中に含まれている数、複雑微妙な因果関係を明らかにして、どこまでも進歩、向上、発展にもっていくということになる。元来、中国人は抽象的な理論を好まず、常に具体化する象徴を愛する民族性があるようだ。

易の字源は何であるかということに就いては、「日月説」と「蜥蜴説」と「観測説」説とがある。日月説では易は陰陽を云うのだから、易をの字形を分割しても、易の下の字の「勿」は「月」ではない。

それなら「蜥蜴」を以って表すのは何の意味であろうか。蜥蜴はその身の色を日に十二回も変化すると云われているから、これによって「変易」の義をとって書に名付けたと言うのである。「とかげ」や「カメレオン」は日に幾度も色を変えるから、書に名をとったと考えられ、易を蜥蜴と解するのは本義である。

第三の説の「観測説」は、「日」を仰いで「何々をする勿れ」ということから、「日」と「勿」との組み合わせと云う説である。つまり人間が朝、空をあおいで、天気の模様から其の日の行動を判断し、決断すると云うところから生じた文字と言うのである。

この三つの説があるが一般には「蜥蜴説」が有力である。又、「易」という字は、「やすい」とも読まれる。それは人生行路が安らかであるように、危険を避けて暮らしやすいように、という人間の念願を表している。

次に何ゆえに「⚌」を以って陰陽を表現する符号としたかという問題が生じてくる。それは金文（金属器に記された古代文字）等によって上古文字の変遷を考えると、「一」は「〇」から転化して来ているのだから、「一」は円転性や連続性のものを表わす。従って「⚊」は切断性や不連続性のものを表すことになる。これによって太陽や雨を基本として考え出した陰陽性の符号となったものかと、考えられる。そしてこの二つの符号を基本として、実際的に吉凶を判断する場合に、否定と肯定との作用をなすものとして運用されて来たものであろう。なお別に「⚍」を生殖器崇拝の思想に結び付けて解釈する者もある。易の陰陽思想が男女性に適応されるのは云うまでもないが、一切を律するのは府会の説（金関係の事柄を理屈をつけて結ぶ）である。

易の作者は4頁に書いた通り伏義が八卦を作り、文王がこれを引き伸ばして六十四卦となし、文王と周王（父子である）が卦文の辞、すなわち「彖辞」と「爻辞」とを作り、孔子が「十翼」を作ったといわれている。

「彖辞」とは易の一卦ごとにその意味をまとめて述べたものである。「彖伝」は孔子の作といわれ、易の解説書である「十翼」の一つで、彖辞（卦辞）を解釈したものである。

易占いと人生

易が日本に伝来したのは「日本書紀」によると、応神天皇以後で継体～欽明天皇の間、即ち五・六世紀のことである。4頁に伏義が八卦を作ったと記したが、彼等は「蛇身人首にして聖徳あり」と云われる。

伏義は太古における雨神竜（あまごい）を御す「シャーマン」であったことが想像される。北支那のような耕作地においては太陽と水とが生命の源泉であり、水の補給は雨に依存し、降雨がなければ植物は枯死して動物や人間は衰弱して死んでしまう。降雨は人間の生活に最も重大な関係があり、未開社会において雨司（あまごい）が非常に重要な存在であったようだ。降雨の呪術師がその部族のために雨の供給を保証していたことが解る。だから伏義が雨司としてのシャーマンであり、これによって易の創始者としての伏義と、易を蜥蜴と解することとの関係が伺われる。即ち蜥蜴、守宮はみな雨竜神と相通ずる能力を有すもので、蜥蜴を養って雲雨を起こすことが巫祝（神事をつかさどる者）の呪術であり、これによって民衆の崇敬を集めて酋長の地位に上がったものが、三皇と称せられる者の一人なのであろう。原始宗教の呪術者であるシャーマンは現在でも東南アジアに存在しており、私は十年前にビルマとラオスで体験してきた。

古伝説はいたずらにこれを抹殺すべきものではなく、なるべくこれを活用して考えたい。雨神竜を養う伏義は、その特異な知能を以って天を仰ぎ、うつむいて地を観察して天地陰陽の理を考え、八卦を基とする一種の呪術的な占いの方法（占筮）を考え出したと伝えられている。

私は四年間に亘る敵弾下で、生と隣り合わせの生き地獄の生活をした結論は、頼れるものは自分だけであると云うことであった。其の各場面で迷いがなかったかと云えば嘘になる。其の時、若し易占いの方法を知っていれば、自分の責任に於いて孫子や諸葛孔明の兵法家のように占ったと思う。人間を含めて動物には不思議なことに予知本能のようなものがあるようだ。それが虫の知らせのような微妙な感覚で難を逃れている場面があった。その予知本能、即ち運命を読み取ろうとする方法が「易」であり、相学（人相、手相、地相、家相など）である。古代中国の帝王は天災地変、飢餓、戦乱などの災害から、民衆を如何にして守るかと云うことを、最大の政策としていた。易は予知手段、即ち天変地異を予言する術として発達したのである。

今日まで易占いが誤られ、軽蔑されてきた原因にどこにあったのだろうかと、考えてみたい

一つには、いままで易占いする人々が、「論語読みの論語知らず」という例えのように、本当の『易経』（周易）を理解できなかったからである。また、これを実際の占いに用いる場合には、よく街頭で見かけた筮竹を使用するから、人相や手相と違って神秘的で、信憑性をもたないように思われる傾向があったかも知れない。しかし、仏教にも『般若心経』に「色即是空、空即是色」という言葉があります。その意味は、すべて有形の事物は本来は空で事態のないものであり、この世の物に実体がないということである。即ち、それがそのまま一切の存在であり、その本然の姿であるということである。

木々の冬芽を割ってみても、そこには花はない。又、満開の花を見たときには、冬の枯木は想像もできない。これは天体の運行、四季の推移によって自然に起こる流転だが、これを一口に言うのなら、「天の時」と言えるだろう。時に会えば、美しい花も開き、緑の葉も生えてくる。

易占いは、ある意味では「天の時」を予言する技術である。真冬に満開の花を見出し、花の盛りに枯木の侘しさをおしはかる技術と言えるだろう。花を見て枯木を語れば、人は納得できないでしょう。

『平家物語』の巻頭にも、人生の流転の姿をうたっている。源平両氏の勢力は殆んど拮抗していた。それが英雄の平清盛が出現してから源氏は内部から崩壊した。平清盛は厳島で、沈む太陽を扇で招き返したといわれている。誰がこの時、後年の壇ノ浦の悲劇を想像できたでしょうか。また、平治の合戦で捕えられた源頼朝が、危うい命を救われて、伊豆の蛭ケ小島に流された時、誰が鎌倉幕府のことを予想しただろうか。しかし文覚上人は、伊豆の配所で頼朝を見たとき、この人は天下人だと予言したと云う。恐らく頼朝には天下を統一するだけの覇気がみなぎっていたのでしょう。ただ、そのような英雄でも、天の時に会わなければ自分の力を発揮できなかった。これは人間生活に働く天の時の好例である。

このように一国でも、一種族でも、個人でも常に栄枯盛衰は繰り返される。普通の人間には英雄の一生ほどの浮沈はない。ただ波の幅は小さいが、必ずそのような変化は起こっているものである。

このように時々刻々と移り変わる人生の自然の姿を、出現する前に捉えるのが易の本質である。

易の組織（易占いはどういうものか）

易の三義（五頁）で陰陽（☰）の二爻を説明し、易の字源と成立（七頁）でも陰陽を説明した。

『周易』（四～五頁参照）の作られる以前、三千年ほど前のことである。この時代に生まれた中国の人々の意識に、強烈な印象を与えたものは『天』と『地』であった。高く青く澄み切った大空、自分の足で踏みしめている大地、これらは総ての人間にとって、生み育ててくれた二つの大きな力だと思ったであろう。

次に、自分の周囲を見渡したとき、先ず眼に映ったのは『山』であったと思う。その高さに希望を感じ、険しさに困難を感じたことは疑いない。

高い空に雲が浮かび、日も照って『風』も吹き、『雷』も鳴り響く。澄み切った空も時には暗黒と化し、激しい雨を降らせる。その『水』が川に入って『沢』の流れとなり、時には湖沼になって海に流れ込む。

風が激しく吹くと木々の摩擦によって山火事も起こる。時には落雷のために森林が『火』で燃え上がることもある。この山火事のあとで森は灰となり、大地に溶け込んで行き、そこに新しい生命が誕生する。

原始人にとって、これが宇宙の神秘であり、自然の法則だと思われたことは疑いないことであった。

『天・沢・火・雷・風・水・山・地』の八つの要素が、自然と人生を支配すると古代の中国人は考えた。

易を学ぶためには右の八要素は絶対に暗記しなければならない。そしてまた『天』＝『乾』。『沢』＝『兌』。『火』＝『離』。『雷』＝『震』。『風』＝『巽』。『水』＝『坎』。『山』＝『艮』。『地』＝『坤』。の字も読みも絶対に暗記しなければ易はできない。『上』＝『下』の上の字と下の字の意味は同じである。

易の基本概念は陰（⚋）陽（⚊）の二爻である。「爻とは効い交わるの意。天地の現象に効って互に交わり、また他に変じるの意」である。

これを三つ「☰…天＝乾」、「☱…沢＝兌」、「☲…火＝離」、「☳…雷＝震」、

重ねて「☴…風＝巽」、「☵…水＝坎」、「☶…山＝艮」、「☷…地＝坤」、

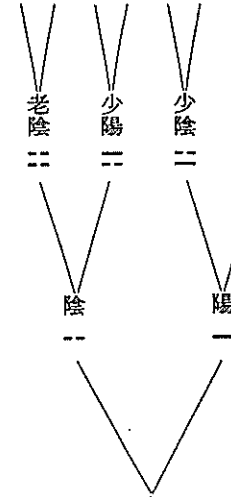
八卦を成すのである。この八つの要素は、それぞれ右図、下図のように

形が決められている。

☰…天＝乾
☱…沢＝兌
☲…火＝離
☳…雷＝震
☴…風＝巽
☵…水＝坎
☶…山＝艮
☷…地＝坤

を生じ、四象は八卦を生ず』といっている。これによると、陰陽両儀の根源として『太極』を予想し、太極より両儀、四象、八卦を生ずとなっている。

その発展形式を図示すると次のようになる。（朱子学の祖・朱子の「本義」による）



八卦は自然現象に配当すると、天・沢・火・雷・風・水・山・地である。

卦は八種類あるから八卦（または「はっけ」）と云う。暗記しなければならないのは、下記の通りの「けんだりしんそん、かんごんこん」である。即ち「乾・兌・離・震・巽・坎・艮・坤」である。

八卦はそれぞれ、どういう記号か、それを覚えなければならない。これは理屈は簡単で直ぐ覚えられる。但し、この理屈はあくまでも易の理解の一つである。

まず、宇宙の始まりは混沌としているということから始まる。それは有も無も越えた状態で、これを太極と名付けた。太極には記号はない。混沌としていて記号化は出来ないからである。

この太極から、陰と陽が生まれる。そこで陽を（⚊）、陰を（⚋）という記号で表す。この二種類を「両儀」と名付けた。（右図参照）

次に、陰陽それぞれが、また陰陽を生じる。しかし分裂したと言っても過去を背負っているから、それも一緒に表すことにした。右図でわかるように過去は下になっている。このように易は、下から上へと変化してゆく。一つの太極から二つの両儀が、続いて四つのものが生まれた。これを「四象」という。

この四象から、またそれぞれ陰陽の二つが分裂する。すると八つのものが生まれる。この八つのものを「八卦」といい、右図の最上段のように並ぶことになる。

この八卦で世界の出来ごとを表すが、世の中の出来事は数多く、細かな事になると八卦だけでは不十分

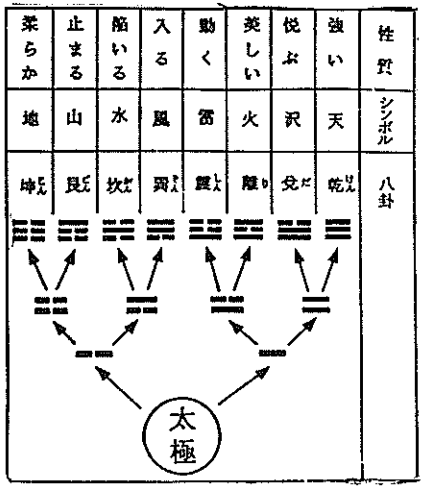
である。そこで八卦それぞれを更に陰陽の二つに分裂させていく。すると、八つの次は十六、十六の次は三十二、三十二の次は六十四の数となる。ここで中止する。それらを六十四卦と言う。

先ず自然はこのように八つに分けられた。これを易学では『小成八卦』という。（左図参照）しかし前記したように人生はもっと複雑だから、この八つの要素の二つを上下に組み合わせて、六十四の卦が作られた。即ち八卦を組み合わせ八×八で六十四の卦を作った。これが『大成の卦』で、八卦は『小成の卦』と云う。

この六十四の卦はそれぞれ『名前』を持っている。例えば上の卦（外卦）が「☶」（山）で、下の卦（内卦）が「☵」（水）なら「䷃」となり、其の卦は「山水蒙」と名付けられた。また、上が「☰」（天）で下も「☰」（天）の場合は「乾為天」と呼ばれた。こうして六十四卦の一つずつに、それぞれの名称が与えられた。これを『大成の卦』という。小成の卦の三爻も、大成の卦の六爻も、ともに天地人の三才を表している。

この六十四の卦には沢山な見方があります。例えば、「䷊」の形を「地天泰」という。この場合、まず、「泰」という意味からも解釈ができる。また上に「地」（☷）、下に「天」（☰）という自然現象から考えることもできる。さらに「坤」（地）には、沢山な意味があり、また「乾」（天）にも沢山な意味がある。だからこの二つの意味の組み合わせから無数の解釈ができるのである。

その一例を左図に示した。



【八卦】

	自然	人間	属性	動物	身体	方角
乾 ☰	天	父	健	馬	首	西北
坤 ☷	地	母	順	牛	腹	西南
震 ☳	雷	長男	動	竜	足	東
巽 ☴	風（木）	長女	入	鶏	股	東南
坎 ☵	水（雨）	中男	陥	豕	耳	北
離 ☲	火（日）	中女	麗	雉	目	南
艮 ☶	山	少男	止	狗	手	東北
兌 ☱	沢	少女	説（よろこ）	羊	口	西

『卦爻の名称・位・徳』

卦に三爻を以って成る小成の卦、すなわち八卦と、六爻を以って成る大成の卦、すなわち六十四卦があることは、さきに述べた通りである。爻とは卦を成す算木をいうのであって、陰爻 ⚋ 、陽爻 ⚊ の別があり、

下の地から上にのびるように)、(例、䷀、䷁)最下の爻が陽ならば、初九、陰ならば初六といい、それより上は順次に、九二・六二、九三・六三、九四・六四、九五・六五といい、最上の爻を上九・上六という。九をもって陽爻を表し、六をも爻って陰爻を表すことに就いては諸解がある。(理解程度爻よい)

即ち、一、三、五の奇数(すなわち陽の数)を合わせて九として陽爻とし、二、四の偶数(すなわち陰の数)を合わせて陰爻としたのである。

◎『初心者(私を含めて)は以上のような事項は理解する必要がある。しかし以下に記述する事項は初心者には高度な要求である、修行してから次第に取り入れて行く事が望ましく、参考までに記すことにした』。

易は、爻の位置および陰陽の関係についても周到な解釈理論を用意している。六つの爻を社会的階級に当てはめ、初爻は「庶民」、第二爻は「役人」、第三爻は「官僚」、第四爻は「大臣」、第五爻は「天子」、上爻は「隠者」とみなしている。乾「䷀」の九五の爻辞「飛龍天に在り」は、龍徳(すぐれた徳)の天子が天下を統べている様を象徴すると考えている。また卦を上下三爻ずつに分けて、それぞれの中間爻つまり第二爻と第五爻を「中」と呼び、他の爻よりも重要な状況の象徴とみなす。

爻の位置は陰陽と関係づけられることにより、より複雑な性格を与えられる。陽は奇数、陰は偶数を表わすが、ここから初・三・五の奇数位は陽の位、二・四・上の偶数位は陰の位であり、陽位に陽爻が、陰位に陰爻が位置した時、それを「正」と呼んで、その爻が象徴する状況を道徳的に価値あるものと解する考えが出てくる。中でも先ほどの「中」位が「正」である場合、即ち六二と九五は「中正」と呼ばれ、論理的に理想の状態の象徴とみなされる。反対に陽位に陰爻が、陰位に陽爻が位置する時は「不正」と呼ばれ、余り芳しくない状況の象徴と解される。

六十四卦の整然とした象徴体系とその解釈学を支えている根本思想は、自然や社会は複雑に変化(変易)するが、その背後に存在する不変(不易)の法則は、卦という簡易な象徴によって提示し、理解することが可能であるという考えである。「易」の名称は、ここ(変易、不易、簡易)に由来している。

易伝について

易占いの本論に入る前に「易伝」に就いて書いておきたい。『易経』は元来占いの書ですが、それを解説して哲学的な意味づけを加えたのが『易伝』である。易は聖人によって天地自然を模範として作られたと言います。「天が神秘的な事（神物）を表わして聖人がそれに法り、天地自然が変化して聖人がそれに習い、天が象徴をたれ吉凶を表わして聖人がそれを真似た。（易経の説明書の繫辞上伝による）

易はそのようにしてできた。だから八卦の基本である陰・陽（乾・坤）は天と地との象徴としてあるのだと言う。そして高らかに乾・坤二元の働きを称揚している。

「大なる乾元、万物はそれに資いて始まる、それは天を統べる」

「大いなるかな坤元、万物はそれに資いて生まれる。それは天を順い受ける」（易経解説書の彖伝より）

乾が父なる天を表わし、坤が母なる大地を象徴するように、八卦の他の六つもそれぞれ雷や風・水・火・山・沢を表わしているとされている。

では、儒家的な倫理思想はどうなっているのか。勿論、大自然の秩序がその根源になるのである。易の全体六十四卦について、それぞれを自然界の象徴に見立てたうえ、君子の実践はそれを模範とすべきだ説くのは、そのはっきりした例である。たとえば、乾の卦は天の象徴であるから「天の行は健かなり。君子は（それを手本にして）自ら強めて息まず」と謂われるようなものである（解説書の大象伝）。それをまとめた言葉は次のように言われている。

「自然界は陰になったり陽になったりして変化しているが、それが『道』である。その道を受け継ぐのが『善』であり、その完成を目指すのが人間本性である。仁者はその道を「仁」といい、知者はそれを「知」というが、凡人はそれに依存しながら、それが何であるか分からないのである」（易経の解説書の繫辞上伝）

人間道徳の完成は、そのまま天地自然の営みを発展させることである、と考えられている。『易伝』では、そのことを「性命の理に従う」（天の命令であると同時に、人にとっては運命である）と言っている。

また『楽天知命』（天命を楽しんで自分の境遇に安んじるの意）という有名な言葉が繫辞上伝にある。

『☰乾』けん(天)
○本来の形　天
○卦の意味　質実剛健、かたい、まるい、白
○人間関係　父親、男子、目上の人、年配の人、老人
○物の形　大川、大平原、神社、高層建築物、金属
○季節　晩秋～初冬
○時刻　午後九時～十一時
○天候　晴れ、高温

『☱兌』だ(沢)
○本来の形　沢
○卦の意味　喜び、笑う、おしゃべり、和、小さい
○人間関係　中途挫折、白、黄金色
少女、若い女、女優、友人
○物の形　谷、入れ物、堅い土、口
○季節　秋
○時刻　午後九時
○天候　くもり

『☲離』り(火)
○本来の形　火
○卦の意味　太陽、熱、激しい、明知、美麗
光、目的、目、赤、紫
女性、美人、中女(長女・末女でない女)
○物の形　文書、手紙、電気コンロ
アクセサリー、かまど
○季節　夏
○時刻　正午
○天候　晴れ

『☳震』しん(雷)
○本来の形　雷
○卦の意味　奮励、決断、成功、飛ぶ、音、音楽
○人間関係　長男、息子、兄、浮気者、神経質
○物の形　木、竹、車、電話、ドラム、コマ、青、緑
○季節　春
○時刻　午前五時
○天候　晴れ

『☴巽』そん(風)
○本来の形　風
○卦の意味　出入、不決断、におい、物語、長い、
ととのう、従う、呼びかける
○人間関係　長女、女性、奥さん、商人
○物の形　草木、種子、家、針、
糸、紙、机、青、緑、白
○季節　晩春～初夏
○時刻　午前七時～九時
○天候　風強く、雨降らず

『☵坎』かん(水)
○本来の形　水
○卦の意味　おちいる、知恵、法律、悩み、困難、
障害、多忙、穴、動き回る、黒
○人間関係　若い男、ずるさ、盗賊、苦労性の人
○物の形　酒、薬、毒、水、血、
飲料、泉、車
○季節　冬
○時刻　午後十二時
○天候　雨、雪

『☶艮』ごん(山)
○本来の形　山
○卦の意味　静止、頑固、まじめ、独立、拒否
○人間関係　少年、青年
○物の形　家、机、門、丘、城、墓、頭、黄色、土色
○季節　早春
○時刻　午前一時～二時
○天候　曇り

『☷坤』こん(地)
○本来の形　地
○卦の意味　従順、やわらかい、静かな、厚い、虚、
謙譲、疑惑、黄色、土色
○人間関係　母親、民衆、身内、妻、目下の人
○物の形　床、布地、田舎、食物
○季節　晩夏～初秋
○時刻　午後一時半～四時半
○天候　曇り、小雨

以上のように八つの基本形には、このような色々な意味がある。これでも、ほんの一部を示したに過ぎない。殆んど「無限」と言っていいほど拡大できるのである。（黄小娥の易入門より）

陰陽思想の無限の変化

（少し深く説明するが理解程度でよい）

易は無限の変化をなすと前記した。其の変化の原理は一つで以下に概要を記しておきたい。

易の思想の中枢観念は、陰と陽とである。陰は⚋を以って陽は⚊を以って表わすが、奇偶を陰陽に象（かたど）り、奇を陽とし偶を陰とするのは、易の発明者が動静剛柔（どうせいごうじゅう）の理を奇偶の数に托したと見るほかはない。要するに男女性に基づいて剛柔動静の原理を考え、これを陰陽の二爻（こう）に托したものと思われる。これを人間の原始的思想の産物と見るのは、差し支えないことである。

陽は剛健的なものであり、陰は柔順的なものである。陽は動であり、陰は静である。自然界ならびに人間界の一切の事物は、その時に応じて、すべてこの陰陽の二つに配される。天、日、父、男、仁、上、前、明、住、昼、尊、貴、福等は「陽」であり、地、月、母、女、義、下、後、暗、來、夜、卑、賤、禍等は「陰」である。このように陰陽は互いに相対立するようだが、しかも陰陽は、陰はいつまでも陰であり、陽は何時までも陽であると言うように固定する二物ではない。

動が極まって静となり、静が極まって動となり、動中に静があり、静中に動がある。あるいは剛が柔となり、剛中に柔があり、柔中に剛がある。男は女に対しては陽であるが、子として親に対すれば、その男子は陰である。女は陰であるが、親として子に対すれば陽である。前は後に対すれば陽であるが、前の前なる者に対すれば陰である。然（しか）らば前でもなく後でもなく、その中間に在る者は何であるかといえば、中は不中なるものと対して陽と陰とに分かれる（前も後も陰となる）。

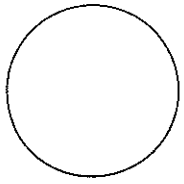
同じ天空でも晴れれば陽であり、曇れば陰である。同じ人であっても大いに活動する場合は陽であり、静かに読書静思する時は陰である。だから陰陽は無限の変化する。この無限の変化を説いたのが、『易の思想』である。

易経（えききょう）の解説書「繫辞上伝」（けいじじょうでん）に「一陰一陽、これを道と謂う」と書かれている。「一陰一陽、これを道と謂う」とは、一つの陰と一つの陽とが相対立し、固定して存在するという意味ではない。天地の間にあるいは陰となり、あるいは陽となって変化して、万古に已（や）まない作用をなすものがある。この原理法則を指して『道』と言ったのである。故にあるいは陰となり陽となって無限の変化をなす原理は一つである。しかもこの無限の変化作用の中に貫通する二元的説明原理を取り出して、これを陰陽と名付け、これによって宇宙の実相を説明しようとするのである。故に「易の思想」にあっては陰陽の二元が説明原理である。

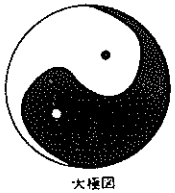
易の意義はすでに五頁の『易の三義』で述べたように、「変易」「不易」「簡易」である。宇宙の実相は、変化であって同時に不易であり、複雑であって、同時に簡単である。この三種の命題は互いに相矛盾するようで、しかも相矛盾しないのである。この実相を説明するのが易の陰陽論で、「易に太極あり、これ両儀を生ず。両儀は四象を生じ、四象は八卦を生ず」と先（十一頁）に述べた通りである。

太極とは何か

太極には種々の論がある。「太極とは天地未（いま）だ分かれざる前、元気混じて一となるを云う」が最も古義を得ていると思われる。そして太極とは「大」（おおきく）であり、「極」は無窮無尽（むきゅうむじん）の意である。即ち太極とは、時間的、空間的無限を意味し、「無極」とは無方向、無形状、無限量である大始（だいし）の混沌（こんとん）とした「元気」を指し、そこで「道を生ず」と言うのである。太極図が無限から太極に至るという考え方は周易（易経）の宇宙生成論の基本的な観点である。周易では、宇宙はもともと無極、すなわち混沌とした元気から形成されるとしている。



無極（混沌）



太極図

上図の上段の太極図は、宇宙が無窮無尽であることを示す。下段の図は、陰陽は孤立せず、分割せず、互いに絡み合って、

陰を背負い陽を抱き、陰の中に陽があり、陽の中に陰がある。陽に至陰、陰に至陽があり、陰が尽きれば陽が生じ、陽が尽きれば陰が長じて、陰陽の対立と統一の関係を最もよく象徴する「太極図（前頁の下の図）が完成する。

太極図は円形である。そこには気一元の原理が示され、宇宙万物は元気より始まり、元気は気化の始めと考える。太極は「無極」であり、「太虚」ともいい、その始まりは円である。

太極図の陰陽の線はなぜ直線を用いず、互いに取り囲む形の曲線を用いるのであろうか。陰陽は半々となっているが、これは絶対的ではなく相対的なものであり、時には陰が多く陽が少なく、時には陰が少なく陽が多くなるという具合に、陰陽は決して平均せず、互いに消長し、制約し合うことを象徴するからである。

黒眼と白眼は至陰と至陽を代表し、「陰尽きれば陽を生じ」「陽尽きれば陰を長ず」という陰陽の相互転化を象徴している。また、白眼と黒眼は、陰中に陽を含み、陽中に陰を含むという意味も表わしている。

太極図の陰陽抱合の曲線は、陰陽間の消長は漸変であり突変ではないことを表わしている。数字でいえば、太極図は0から1、1から2、2から4、4から8、8から16、32、64、そして無極に至るまでを含むのである。

太極図の変化

太極図は円であり、宇宙が混沌（こんとん）とした「元気」より始まることを示し、気一元論を象徴する。太極が陰陽を含むことから、太極図は陰陽消長の自然原理を有し、太極図の曲線は事物の変化発展の原理を示している。つまり、太極図は事物の量的変化、質的変化の原理を表わすのである。太極図にみる陰陽はそれぞれの小から大へ、大から小へという変化は、事物は静止せず発展、転化し続けるものであることを説明している。太極図の至陰・至陽は、事物には必ず反転するという「物極必反」原理を示している。

右記したように、宇宙は混沌とした状態から太極となり、太極から陰陽が抱き合いながら万物が生ず。11頁に記したように太極～両儀～四象～八卦～（六十四卦）となるのである。

（大韓民国々旗は太極図に「天☰」「地☷」「水☵」「火☲」を配し、易経（周易）の影響を享けているようだ）

六十四卦の見方・解釈法

自然は八つの要素（天＝乾・沢＝兌・火＝離・雷＝震・風＝巽・水＝坎・山＝艮・地＝坤）に分けられたと12頁に書き、8×8の六十四卦には沢山な解釈があると述べた。この六十四の人生の姿をどのように解釈し、どのように見て行くか。これが易占いの本質である。そこに占易いの難しさと、面白さがある。

易を占う人には、人生経験、感受性、常識、教養、古代中国及び日本の歴史の研究等が要求されるのはそのためである。勿論、私にはそのようなものは全くなく、これからの問題である。

解釈の仕方には、言葉でするものもあれば、形で判読するものもある。裏返してみたり、中間の部分だけ読み取ることもある。それでは初心者はいったい、どうすれば良いのか。

① 自分は何を占いたいかを良く考える。
② 先ず卦の全体の意味を理解する。
③ あれも、これもと考えず、問題に対して必要な答えだけを取り上げる。

④ 二つの小成八卦（15頁）には沢山な意味が含まれている。これから、その問題の性質に応じて、組み合せの意味を考えてみる。しかし、はじめは余り、これを考えない方がよい。と云うのは、この組み合わせを使うには、極めて高度な技術と経験が必要だからである。

次に例をひいて説明する。

先ず「風雷益」（䷩）が出たとする。この卦の解説（65頁）を読んでください。あなたの仕事運としては良い運です。公益優先、つまり自分だけの利益でなく、人のために尽くして自分も利を得るために積極的になる時です。では小成八卦の上と下を別々に考えてみよう。

下側の「震」（15頁〜☳）は積極的に進む気持ちをしめし、上側の「巽」（15頁〜☴）はこちらを向いて呼びかけている。お互いに意気投合していると見る。しかし、この二つだけを取り出すのは、高度な技術がいります。「震」が決断を表わすのに、「巽」が不決断を表わし、「震」が音を表わし、「巽」が臭いを表わすこともあるからです。（15頁参照）

結婚としても、「益」は勿論よい意味をもった卦です。この場合、「震」には長男、「巽」には長女の意味があるが、いつでも長男と長女が結婚するとは決まっていない。あなたが「結婚してよいかと云う問題」に対して答えを求められたら、この「益」の卦の答えは「幸福になる」と云うことです。（益には「ふやす、加える、ためになる、役に立つ、の意がある）

次に「火風鼎」の卦を事業運として考えてみよう（䷱73頁）。卦の持つ全体の意味は、三者鼎立、トリオ、自分の位が定まる。よい協力者を得るとき、また、皆で力を合わせて幸運を得る時です。これを小成八卦のもつ意味で考えると、上側の「離」の「火」が勢いよく燃え上がるには、内側の「巽」の「風」と草木が必要である。これはお互いに持ちつ持たれつ運を良くしていると見るのです。しかし、この見方はとても難しい。また、この場合、「離」が中女で「巽」が長女であっても、事業運の吉凶には何の必要もないのだから、考えなくともよいのである。「鼎」は「巽下離上」＝物を改める形である。

このように小成八卦の組み合わせを解釈するには、一方が「春」、一方が「夏」だったりして難しい。結婚を占って、上が少年、下が老人だったら、滑稽なことになる。だからこの冊子では、六十四卦の持っている意味を、うんと収縮して、なるべく簡単に説明した。それぞれの卦の根本の意味は網羅した積りだ。

筮法(占い方)

「筮」とは著をかぞえ卦を求めて神明に祈り、将来の事の吉凶得失を予知する道であり、易の始源的意義が主としてこの「占筮」にあった、と易経の説明書である「説卦伝」の冒頭に書いてある。

「著」は占いに用いる竹製の細い棒で、本来は「めどきはぎ」の茎で作った。そして後世、竹で作るようになった=「筮竹」。その数は五十本で長さ九寸(周時代で一寸は約二・二五㎝)、上を円くして天にかたどり、下を四角にして地にかたどった。

易はもと占筮の書であったが、孔子になってから義理を以って解釈するようになった。この占筮と義理の両義は、易経を読むについては偏ってはならないものだという。誠意が本でなければならないのである。誠意がなければ神明に通ずることはできない。不正なことは占っても益がないのである。また初めから事理の明白なことは占う必要はない。

占筮法に十八変の法があり複雑で手間が掛かるから、後世では簡略にした中筮法や略筮法が行われている。その中でも「略筮」が一番多く利用されているから、「略筮法」について述べたい。

筮竹は五十本の竹で、長さは二十四センチ位から四十五センチ位である。先ず五十本の筮竹の中から一本を抜き出して机の上に置き、残りの四十九本を顔の前に扇形に開き、息を凝らして二つに割ります。

それから、左手に残った筮竹に右手から一本加える。次に一本加わった左手の筮竹を、八つずつ捨てていきます。残ったものは、一から八までの数です。その数が、それぞれ八つの形に対応します。

残った数が天(一)、沢(二)、火(三)、雷(四)、風(五)、水(六)、山(七)、地(八)というふうになる。例えば、三つ残ったとすれば「☲」(火)です。この形を「算木」を使って机の上に置きます。

「算木」とは六本の木片です。一本の木片は四つの面をもっている。二つの面は「▬」、二つの面は「⚋」となっている。「▬」は陽、「⚋」は陰を表わすものです。

そうして、もう一度筮竹を使って、同じ事を繰り返して、今度は、すでに置かれた算木の上に、二度目の結果を算木を使って置きます。四つ残れば「☳」(雷)です。そしてこの卦は「䷶」雷火豊となります。

易を立てる時の注意

易は後世、唐の『正義』（「易の標準的注解」や、宋の朱熹がこれに想像的解釈を加えて定めた方法を標準的筮法とみなしてきた。しかし、この方法は非常に煩鎖（こまごましてわずらわしい）であり、またこれとて原初の筮法を伝えているわけではない。そこで民間では、三枚の銭を用いて行う「擲銭法」（銭を擲げる）などの俗法が流行した。そこで、是非とも易占いを行いたいと思う人に承知してほしいのは、易の真髄は、偶然が作用する技術的な筮法の方法などにあるのではないと云うことである。むしろ、出た卦に対する読みの深さ、人間的洞察力が要求されている。蒙 ䷃ の卦辞は、こう述べている。「初筮は告ぐ。再三すれば穢れる。穢れれば告げず」（誠意をこめた最初の問いには答えてやろう。だが二度三度と占いを繰り返すことは、易に対する冒涜であるから、何も告げてはやらない）と。トランプ占いの気安さで易を立てようとする者への、易からの厳しい戒告と理解すべきである。

易はなぜ中るのか

拙書を読んで、易の精緻な理論や複雑な歴史に十分な知識を与えられたとは思わない。まだ一向に答えてもらえない疑問が多いと感じられることだろう。即ち易はなぜ中るのかという至極もっともな疑問である。

考えて見れば、易に対する信頼は偏にこの問いに対する解答如何にかかっていると言えなくはない。しかし、この問いそのものが、われわれ現代人の科学的合理主義や懐疑的精神の所産であって、古代中国の文化的伝統の中では、聖人が作った易に対する全幅の信頼が、この種の問いを不要のものにしていたという事情を理解しておくべきであろう。

「幾」（前兆）による説明とはいえ、易の中にも、易占いの有効性の説明がないわけではない。一番合理的な説明は「幾」（前兆・きざし）という考えであろう。孔子の言葉として「幾を知るは其れ神か。・・・・幾とは動の微、吉凶の先ず見るるものなり。君子は幾を見て作す。日を終うるを俟たず」とある。「幾」とは現象が完全に発動しきる前の微妙な段階である。しかし吉凶の兆しはすでに現れている。君子は「幾」の段階で物事の吉凶可否を判断して行動するので、手遅れになることはない。しかし、それは神業という

坤卦☷の初六（第一爻）「霜を履んで、堅冰至る」（堅い氷が張る真冬の到来は、まず霜が下りることから予知できる）は、「幾」の適用が最も有効な例である。しかし「幾」による説明では、兆しさえ生じない遠い将来のことにも、易占いが有効であることの証明は不可能である。

天人相関説による説明より包括的な説明は、先に見た天人相関説が与えてくれる。自然界と人間社会との間には密接な相応関係が存在することを前提にした上で、自然の動きを観察することによって、それに対応する人間社会の事象の変化を予測しようとする考えは、「繫辞伝」（易経の説明書）の中に顕著に説かれている。そして実際、古代中国人の生活が単純素朴で、日月の運行、季節の推移に即して営まれていたこと（彼等は農耕民族）を考えれば、天人相関という漠然とした理論にも一応の現実的根拠があったと云える。

万事に懐疑的なわれわれ現代人との違いは、中国人一般（その中には朱熹のような超一級の知識人をも含めて）は、この程度の合理性だけで易占いの有効性を信頼するには十分であったようだ。

最も簡単な易占いの方法

略筮法の五十本の筮竹や六本の算木さえ準備できない我々は、お金を六枚用意すれば易占いは簡単にできます。百円でも五十円でも十円でもよろしい。占おうとする問題だけを考えながら、六枚のお金を手の中で何度か振ってください。そして、目を閉じて息をこらします。

そして一枚ずつ、コインを掌の中から抜き出して、必ず下から上に順番に六枚を並べる。

コインの表を陽⚊、裏を陰⚋と考える。年号が書いてある面が裏です。例えば、表・裏・裏・表・表・裏という順序ならば、「䷲」となります。このようにして六十四卦の一つの形が表わされてきます。そして、次頁の表を見て、その卦の出ている頁を捜し、解説を見てください。そこに書いてある解説が、いま占った問題に対する解答です。

もしも、六枚のコインを持ち合わせていない時には、一枚のコインを振って、表か裏か、陽か陰かを六回くり返して下さい。この時も、下から積み上げることをお忘れなく。

六十四卦

上卦＼下卦	坤☷	艮☶	坎☵	巽☴	震☳	離☲	兌☱	乾☰
乾☰	泰 坤乾上下	大畜 艮乾上下	需 坎乾上下	小畜 巽乾上下	大壯 震乾上下	大有 離乾上下	夬 兌乾上下	乾 乾乾上下
兌☱	臨 坤兌上下	損 艮兌上下	節 坎兌上下	中孚 巽兌上下	歸妹 震兌上下	睽 離兌上下	兌 兌兌上下	履 乾兌上下
離☲	明夷 坤離上下	賁 艮離上下	既済 坎離上下	家人 巽離上下	豐 震離上下	離 離離上下	革 兌離上下	同人 乾離上下
震☳	復 坤震上下	頤 艮震上下	屯 坎震上下	益 巽震上下	震 震震上下	噬嗑 離震上下	隨 兌震上下	无妄 乾震上下
巽☴	升 坤巽上下	蠱 艮巽上下	井 坎巽上下	巽 巽巽上下	恒 震巽上下	鼎 離巽上下	大過 兌巽上下	姤 乾巽上下
坎☵	師 坤坎上下	蒙 艮坎上下	坎 坎坎上下	渙 巽坎上下	解 震坎上下	未済 離坎上下	困 兌坎上下	訟 乾坎上下
艮☶	謙 坤艮上下	艮 艮艮上下	蹇 坎艮上下	漸 巽艮上下	小過 震艮上下	旅 離艮上下	咸 兌艮上下	遯 乾艮上下
坤☷	坤 坤坤上下	剝 艮坤上下	比 坎坤上下	観 巽坤上下	豫 震坤上下	晋 離坤上下	萃 兌坤上下	否 乾坤上下

下の卦＼上の卦	天 ☰	沢 ☱	火 ☲	雷 ☳	風 ☴	水 ☵	山 ☶	地 ☷
天 ☰	乾為天（けんいてん） 24ページ	沢天夬（たくてんかい） 66ページ	火天大有（かてんたいゆう） 37ページ	雷天大壯（らいてんたいそう） 57ページ	風天小畜（ふうてんしょうちく） 32ページ	水天需（すいてんじゅ） 28ページ	山天大畜（さんてんたいちく） 49ページ	地天泰（ちてんたい） 34ページ
沢 ☱	天沢履（てんたくり） 33ページ	兌為沢（だいたく） 81ページ	火沢睽（かたくけい） 61ページ	雷沢帰妹（らいたくきまい） 77ページ	風沢中孚（ふうたくちゅうふ） 84ページ	水沢節（すいたくせつ） 83ページ	山沢損（さんたくそん） 64ページ	地沢臨（ちたくりん） 42ページ
火 ☲	天火同人（てんかどうじん） 36ページ	沢火革（たくかかく） 72ページ	離為火（りいか） 53ページ	雷火豊（らいかほう） 78ページ	風火家人（ふうかかじん） 60ページ	水火既済（すいかきさい） 86ページ	山火賁（さんかひ） 45ページ	地火明夷（ちかみんい） 59ページ
雷 ☳	天雷无妄（てんらいぶもう） 48ページ	沢雷随（たくらいずい） 40ページ	火雷噬嗑（からいぜいこう） 44ページ	震為雷（しんいらい） 74ページ	風雷益（ふうらいえき） 65ページ	水雷屯（すいらいちゅん） 26ページ	山雷頤（さんらいい） 50ページ	地雷復（ちらいふく） 47ページ
風 ☴	天風姤（てんぷうこう） 67ページ	沢風大過（たくふうたいか） 51ページ	火風鼎（かふうてい） 73ページ	雷風恒（らいふうこう） 55ページ	巽為風（そんいふう） 80ページ	水風井（すいふうせい） 71ページ	山風蠱（さんぷうこ） 41ページ	地風升（ちふうしょう） 69ページ
水 ☵	天水訟（てんすいしょう） 29ページ	沢水困（たくすいこん） 70ページ	火水未済（かすいびさい） 87ページ	雷水解（らいすいかい） 63ページ	風水渙（ふうすいかん） 82ページ	水為水（かいすい） 52ページ	山水蒙（さんすいもう） 27ページ	地水師（ちすいし） 30ページ
山 ☶	天山遯（てんざんとん） 56ページ	沢山咸（たくざんかん） 54ページ	火山旅（かざんりょ） 79ページ	雷山小過（らいざんしょうか） 85ページ	風山漸（ふうざんぜん） 76ページ	水山蹇（すいざんけん） 62ページ	艮為山（ごんいさん） 75ページ	地山謙（ちざんけん） 38ページ
地 ☷	天地否（てんちひ） 35ページ	沢地萃（たくちすい） 68ページ	火地晋（かちしん） 58ページ	雷地予（らいちよ） 39ページ	風地観（ふうちかん） 43ページ	水地比（すいちひ） 31ページ	山地剝（さんちはく） 46ページ	坤為地（こんいち） 25ページ

易を知る前に先ず知るべき六十四卦

これまで易についての概要を述べました。これらは、これから記載した六十四卦を読み取るための必須の要件です。初心者である我々は直ぐ理解することは困難ですが、しかし、この書を読みながら各卦を解釈していくためには、これまで書いたことを理解しなければ解決はできません。

次に記した二つの小成八卦からなる六十四卦の各卦を読解していくためには、これまでのことを反復して理解し、先に進んでいかなければなりません。それは暗記しなければ進まないのではなく、あせらず、各卦に書いてある解釈を読み返しながら進んでいくと、自然に理解できると思っています。

次頁からの各卦の説明・解釈は、まず易経(周易)の各卦の名称を【　】の中に書きました。ついで、易で言うところの「小成八卦」の上の卦と下の卦の二つを上下に組み合わせた卦を「　」の中に書き、その下の(　)の中に其の卦の特徴が書いてあります。さらに、その下の「　」の中に下の卦と上の卦の小成八卦を入れ、更にその下の(　)の中に其の特徴を記入しました(15 頁参照)。

例えば【乾(けん)】☰「乾為天(けんいてん)」(登りすぎた竜)「乾下乾上(けんかけんじょう)」(陽・男・天・君主・父・夫など)

【坤(こん)】☷「坤為地(こんいち)」(おとなしい牝馬)「坤下坤上(こんかこんじょう)」(女・妻・母・皇后・臣・柔順など)

各卦の説明では先ず易経に出ている最初の漢文を書きました(極く一部の易経の最初の句)。ついで漢文の解釈から現代語訳を記しました。しかし易の六十四卦の解釈は極く一部の解釈に過ぎません。八つの基本(15 頁)に書いてあるように、解釈は多くの要素があるから複雑で数え切れません。また、各爻にも同じような吉凶善悪を判断する辞があり、其の位置によっても変化しますから、難問ですので初歩の我々には此の書では除外しました。

易の陰陽説と五行説(木・火・土・金・水)が結びついて陰陽五行説が発展成立してから、解釈は更に複雑多岐になりました。この書にはそれを取り上げて解釈する知識も能力もなく、削除しました。

理解しやすいように、各卦の最後に「易学小筌(しょうせん)」の総体的な運勢を現代日本語で書いたあと、希望・恋愛・金銭・健康の四項目についてのみを設定しました。

占い方は最も簡易な易占いとして 21 頁に書いたように、コインを使用した方法が最も手軽で簡単ではないでしょうか。コインを使用した易占いから始めることが賢明だと思います。そして必ず下から上に順番に並べてください。

【乾】䷀「乾為天」（登りすぎた竜）「乾下乾上」（陽・男・天・君主・父・夫など剛健なかたち）

乾、元亨利貞・・・乾は、元いに亨る、貞しきに利ろし（易経）

積極的な徳を行い、しかも操みさお正しくあるならば、万事うまくいく。「乾」とは天であり、男であり健であり、積極的な徳である。その徳をもっていれば、どこにいっても万事がうまくいく。すなわち「元(おお)いに亨(とお)るのである。ただし、それには「貞」、すなわち正しい操を守ることが必要だ。それが「貞しきに利ろし」である。

なお、この「元亨利貞」(げんこうりてい)を「乾」の四徳として、「元」は万物の始め、「亨」は万物の成長、「利」は万物のできばえ、「貞」は万物のでき上がりと説くものもある。

易経の中でよく知られている言葉の一つが「亢竜、悔あり」（亢竜有悔）である。即ち一番上の陽爻は上九である。最高の地位、権力に達した場合、人はしばしば敗亡の悔いに遭遇する。それは、退くことを忘れ、慎み恐れることを忘れるからである。「亢竜」とは、天高く昇りつめた竜のことである。

「乾」は六十四卦の最初で、万物の源である天地のうち天を表わす。また、その働きは健(すこやか)である。ただし、正しさを保つことが必要であり、そうした態度を守っておれば宜しい。

「小筌」（笠は漁具の一つで転じて、手引き、案内等の意＝これは以下の各頁に通用）

この卦は高貴な身分の人には吉であるが、そうでない人には凶である(卦がよすぎて位負けしてしまうから)。

- 希望・・・やや成り難い。万事進むに凶。退くに吉。
- 恋愛・・・半吉。時として仲介者の妨げがある。
- 金銭・・・苦労がある。
- 健康・・・身を慎むべし。病気にかかると治りにくい。

「昇りつめた竜は下るしかない」のだから、万事にあせってはならない。時の来るのをじっくりと待つことである。この卦は男性の壮年期、つまり登りつめた年齢の意味がある。だから社会的な立場から言っても責任が重い。外で毎日が、かなり緊張の連続であるうえに、くつろぐべき家庭に帰っても、家族の生活の責任を考えねばならないのは、中年の男性の辛さでしょう。また、緊張だけで実収入を伴わないところが、この卦の欠点である。

亢竜の「亢」と云う字の意味には、戦闘を専門にしていた我々軍人の最も難しいことであった。それは最後の「退」と云うことだからであった。「進むを知って退くを知らず、得るを知って喪うを知らず」と云うのが前記した「亢竜」である。即ち「上九」のことである。(十三頁の最初を参考とすること)

易は一言で言っている。曰く、『盈(み)つれば久しかるべからざるなり』と。

「潜竜、用うる勿れ」（潜龍勿用）

他日の大成をはかる人は、しばし心身の養をはかるべきで、その場合には未だ力を外に用いてはならない。「潜竜」は潜んでいる竜。まだ世の中に現れない人の才能にたとえる。

これは十三頁の「初九」の意味である。

【坤】「坤為地」（おとなしい牝馬）「坤下坤上」（女・妻・母・皇后・臣・従順などの形）

坤、元亨。利牝馬之貞・・・坤は元いに亨る。牝馬の貞に利ろし（易経）

従順（じゅうじゅん）な徳をもってし、しかも牝馬（めすうま）のように至順であれば、すべてがうまくいく。「坤」は「乾」に対することば、即ち「地」であり、従順の徳である。この徳をもとにしていけば、なにごとをやってもうまく通じていく。それが「元（おお）いに亨（とお）る」である。

『坤』は、乾に次いで六十四卦の二番目。万物の根源である天地のうちの地を表わし、宇宙を構成する陰陽二気（いんようにき）のうちの陰を表わす。希望は元（おお）いに通る。牝馬のような貞節さがあればよろしい。君子たる者、行動を起こすのに、先頭に立って先走れば迷うが、人の後ろにいるようにしていれば利を得る。西南の方角には友を得、東北に行けば友を失う。概（がい）して正しさを保っていれば、吉。

形を見ると、全部が陰になっており、陰は女性の象徴である。だから万事は控えめに、先を争わない方がよい。この卦は、前の卦が男性の壮年期を表わすのと反対に、典型的に女性の従順さを表わす。

女性は、その外見はともあれ、心底では自分が従順につかえる男性を求めているのです。慈悲深い心豊かな父親を愛し、信頼できる夫を求め、力強い息子に希望を託している。この卦は女性の従順になりたいという無意識の欲求を表わしている。

だからすべて、年長者の意見に従い、その教えを守ることが大事です。人に使われたり、命令を受けて行動する方がよいのである。結婚は、お互いに見通しがつかず、気迷いが多いときです。どちらもなよなよとして積極性を欠いているからです。まず年長者の意見を聞くとよいでしょう。

あなたが男性ならば、まじめですが、内向的で、少し頼りにならないところがあります。女性ホルモンが多すぎるのです。あなたが女性ならば、やさしい世話女房で、子供に良い母親になれる人です。

「小筌（しょうせん）」　この卦は、万事を生養する地の徳を表している。従って人事につき何かと世話苦労がある。

・　希望・・・やや遅れ、また他人の妨害にあうこともあるが、根気よく進めば成就する。
・　恋愛・・・次第次第に良くなって行く。急に進めば支障が多い。
・　金銭・・・世話ごとで出費が多い。
・　健康・・・病気にかかると、回復するが、長引く。

「霜を履（ふ）みて堅氷（けんぴょう）至る」（坤の初六）　この意味は二十一頁に記載した。

「章（しょう）を含んで貞（てい）にすべし」（坤の六三）　「含章可貞」

力量才能があっても、それを決して表面に出さない方が良い。もし、有事の際、その力を発揮しても、その功は上司のものとすることが部下の道であり、身のためだ。

「章を含む」は、明らかな徳をあらわに表わさないこと。

「括嚢（かつのう）すれば咎（とが）も無く誉（ほま）れも無し」（坤六四）　「括嚢、無咎無誉」

袋の口をくくったように、才知をかたくしまっていれば、すべて無事である。

「黄裳（こうしょう）、元吉（げんきつ）なり」（坤の六五）　「黄裳元吉」

中正従順の徳を守る人は大吉である。黄は中道を表わす色、裳は下着で従順を表わす。

【屯】䷂「水雷屯」（雪の中の若芽）「震下坎上」（険しくて行きなやむかたち）

屯、元亨利貞。勿用有攸往。利建侯・・・屯は、元いに亨る。貞しきに利し。用て往く攸有る勿かれ。侯を建つるに利し。

屯は、草の芽(ψ)が地面(二)に萌もえ出ようとしている象かたち。物の初めて生ずる意。この卦を得ればれば大いに通とおる。正しくしていればよろしいが、軽々しく進んではならない。草創(そうそう)の時期であるから諸侯を立てて安定を保つよう心がけるのがよろしい。

君子以経綸・・・君子以って経綸す。

君子は天下を治めることを最後の目標とする。「経綸」(けいりん)の語はこれから起こる。

以貴下賤、大得民也・・・貴を以って賤に下れば大いに民を得。

貴い位置にいても、その位をたのまず、むしろいやしい人にまで下がってその教えを求め、その要求を入れてやる。そういうやり方をすれば、大いに民心を得るものだ。

上に雲(坎)があり、下に雷(震)のあるのが「屯」である。雷が鳴り動いて雲雨を起さんとする象である。この草創屯難の象にかんがみて、君子は国家経綸の志を立てたのである。

「屯」は「たむろする」と読みます。また物が伸び悩んでいる形です。

六十四卦の中には『四大難卦』というのがあります。これはその中の一つです。はっきり言って、あまり良い卦ではありません。

しかし、この卦は、悩みの中にあっても希望を持って時を待つ、という意味があります。雪の中で、草木の芽が雪解けを待っているようなものです。だから、こういうときに、あわてて先を急ぐと、せっかくの芽が晩霜(ばんそう)とか、残雪とかにあって、一巻の終わりとなります。今すぐ進むべき時ではないという教えなのです。

この卦の時には、大きな目的や希望があっても、周囲の状況がすべて不利なときなので、思うようには進めませんが、決して希望を捨ててはいけません。あなたの計画そのものは決して間違っていないのです。ただ、こういうときに、一人でことを起すと、四方八方から攻撃を受け、袋叩きになりますから、後輩や友人の協力を求め、自我を出してはいけないと云うことです。

とにかく多事多難のときですが、目先、半年間だけ忍耐努力すれば、この悩みは解けて、必ず好転のチャンスをつかめましょう。

「小筌」　この卦は、草が初めて生じ、まだ伸びないような状態で、万事につき兆しはあってもすぐには成就し難い。

・希望・・・　天運がまだ盛んでないので、急速に進むと良くないが、徐々に物が集まり、最後に吉を得る。

・恋愛・・・　吉兆であるが、時として支障がある。たいていは遅く留まる。

・金銭・・・　悩みがある。

・健康・・・　病気にかかると危ない。

「屯」は自分の方に進む意思があっても、先方が身動き取れない困却の中にあるのですから、暖かくなって、お互いの心がはっきりと割り切れるまで、待つより仕方がない時です。「今年は精神面の試練の年であり、多事多難の時ですから、忍耐努力して好転のチャンスを待つ歳です。

蒙、亨。匪我求童蒙。童蒙求我。初筮告。再三瀆。瀆則不告。利貞。

・・・蒙は亨る。我より童蒙に求むに匪ず。童蒙我に求む。初筮は告ぐ。再三すれば瀆る。瀆るれば告げず。貞しきに利し。

蒙は幼く蒙くらいものの象。教育によって啓蒙(けいもう)すれば通る。教育は、自分から童蒙(どうもう)に教えようとするものではなく、童蒙の方から進んで師に教えを求めるものである。

占う場合にも誠意をこめた初めての占筮(せんぜい)の求めには吉凶(きっきょう)を教えるが、二度三度の求めには、占筮の神聖(しんせい)さを瀆(けが)すので教えるべきでない。啓蒙の要(よう)は、正しさを保つことである。

初筮は告ぐ。再三すれば瀆る

占いは、心身を潔(きよ)め統一し謹んで行なうものであるから、そうした最初の占いにこそ神は吉凶を告げてくれる。しかし二度も三度もやるということは、すでに疑いを抱いてのことで、占いを汚すことである。瀆(けが)れをもってしては「筮」(ぜい)は真実とを告げてくれない。「筮」(ぜい)は占いをする場合に用いる筮竹(ぜいちく)。

《瀆るれば則ち告げず》

「蒙」は若すぎるとか、見定めがたい、ぼんやりしたという意味である。また「蒙」の字は草冠(くさかんむり)に家である。縄文時代にあった、地に穴を掘り、柱を立て、茅(かや)などで屋根を地面まで垂れた昔の家の形である。薄暗い中で、両親が小さな子供を育てているところです。

だから、この卦には、見定めがたいとか、若い、児童、これから伸びる人、という意味があります。なお「啓蒙」という言葉は、教育でその無知を開くという意味ですが、元は『易経』から出ているのです。

「蒙」は児童、幼稚蒙昧(ようちもうまい)の象であるから、教育によってその蒙が開かれれば通る。教育の理想は、我すなわち師たる者から求めて童蒙に教えるのではなく、子弟・童蒙の方から進んで師に教えを求めることにある。

「蒙」の卦は、上は山、下は水。山の下に泉がわくのは青年のたとえで、青年の愚かさは成就するのである。

「蒙」は山(艮)の下に険阻(坎)があり、険阻を目前に控えて踏みとどまり(艮)、まだ行くべき方向が定まらない象である。「蒙は亨る」とは、通るべき道をもって行動することである。

「山」(艮)の下に湧き出る泉(坎)があるのが「蒙」である。障害を突き破って流れて休息しない水の姿と、静止して動揺することのない山の姿にのっとって、君子は果敢に行動し、道徳を涵養するのである。

「小筌(しょうせん)」　この卦は童蒙(どうもう)の意。今のところ事物の正しい判断は難しい。しかし、童(わらべ)にも段々と知恵がつくように、やがて良い方向に向かう。

・希望・・・人に従って物事を念入りに行なえばよろしい。苦労もあるが、最後は成就する。
・恋愛・・・ひそかな思いを打ち明けられない。たとえ言い出しても直ぐには成り難い。
・金銭・・・他人の世話で出費がある。
・健康・・・病気は長引き、回復は遅い。

【需】䷄ 「水天需」（渡し舟を待つ人）　「乾下坎上」（時を待って行えば成功するかたち）

需、有孚。光亨。貞吉。利涉大川。

需は、孚有り、光いに亨る。貞しくして吉なり。大川を涉るに利ろし。

需は、急には進めず、時を待つという意味。軽率な行動は良くないが、ゆったりと時を待ち、心に誠があれば大いに通る。さらに正しさを保てば吉であり、大川を渡るような大事の決行もよろしい。　誠心誠意をもって、時を待てば、事は大いに成って吉であり、不可能と思われる難事もやり通すことができる。「大川を涉る」とは、非常な困難を乗り切ること。「需」は待つことであり、「孚」（まこと）は誠心誠意のこと。

「需」は「待つ」ということです。生活を続けながら、ゆったりとした気持ちで「時」を待つことです。実力はあるのですから、その力を発揮できるチャンスを待つことです。

この卦は、ただ待つのとは少し意味が違います。上の卦に水があります。大きな川の向こう岸に、あなたの望む希望や目的があることです。どうしてもあなたはそれを手に入れたいと思っています。それには、川の水が凍結する時期を待つか、浅瀬を探すか、または水量の少ない時期を選ぶか、渡し舟の来るのを待つかしなければ渡ることはできません。どんな事があっても、決して急流に飛び込むような、危険な行動に出てはいけません。「需」とは、このような状態を言うのです。

「果報は寝て待て」という諺があるが、この卦はただ昼寝をして、遊び暮らしていれば良いという意味ではなく、ゆっくり休養をとって心身の鋭気を養い、元気一杯に次の仕事にかかれば、成功も大きいと言う意味です。

だから、急いでいる願い事は、すぐ思い通りには行きません。交渉も、これまで長く時間を掛けたものならば、まとまる時期が近づいていると云えるでしょう。結婚もあまり良いとは云えません。相手の気持ちがうやむやだったり、目的が二つあったり、生活とか、また他の候補者とか、そういう他の対象に心が動いている時ですから、男女ともに、自分から余り積極的に動かないで、次の機会を待つ方が良いでしょう。

〔象伝〕　雲坎が天(乾)にのぼり、雨ふらんとする時を待つと云うのが「需」である、と書いてある。

君子はこの象にのっとって、いたずらに焦るようなことはなく、飲食宴楽して到来を待つべきである。

「小筌」・・・　密雲厚い雨雲がありながら、まだ雨の降らないような状態。この卦は万事急すると成就し難く、其の上かえって難儀にあうこともある。ゆっくりと物事をなすときは吉。
吉事でありながら時節が到来していない。時の至るのを待て。

- 希望・・・すぐには成就しない。ゆっくりと時の至るのを待てば吉。
- 恋愛・・・成立せず
- 金銭・・・旅行の際の盜難に注意。財を求める行為は十に二・三の功あり。
- 健康・・・病気は長引く。

訟、有孚窒。惕中吉、終凶。利見大人。不利渉大川

訟は孚ありて窒がる。惕れて中すれば吉。終われば凶なり。大人を見るに利ろし。大川を渉るに利ろしからず。

訴訟ごとは、誠意があっても八方塞がりで窮す。中道を守れば吉。争いを押し通せば凶。立派な人の助力を得ればよいが、大川を渡るような決断はよくない。

「訟」とは訴える、争う、裁判という意味です。こういう時には、どんなに自分に理があると思っても、あくまで自我自説を通そうとしては、かえって相手を怒らせ、不利な結果を招くことになります。また、相手を攻めすぎてもいけないし、争っても益はありません。天命、時運がまだ来ていませんから、相手を窮地に追い込むような行動は思いとどまるべきです。

まえの「需」は待機していることでしたが、この「訟」では、お互いに意見が完全に異なって、おのおのの意見に共通点がないために、和を求められない時です。

また、あなたが正しい理由で相手を訴えても、この訴訟にすぐ勝てるとは云えません。なぜなら、立場的に恵まれず、決め手となる大切な証拠が不十分なのです。

それでは、この卦が出た場合には、どうすれば良いのでしょうか。

こんな時には、自分の気持ちをがらりと変えてしまうのです。思いやりと、暖かい気持ちで、人と強調する態度が、あなたを成功に導くことになります。これが、この卦を得た時の処世法です。この心掛けを忘れると、あなたは泥沼にはまり込んで、抜きさしならないことになるでしょう。

心すべきは、あなたの運気が、いま衰えているという事実を正視することです。

君子以って事を作なすには始めを謀はかる　「君子以作事謀始」

仕事をなす場合には、君子は最初によく思いを練って研究する。事を始めてからの行き違いを避けるため。

旧徳を食はみて貞なれば、厲あやうけれども終ついには吉なり　（訟六三）

今までどおり、己の守るべき道をしっかり守っていけば、たとえ危うい場合が生じても、ついには幸せを得るものだ。

象曰、天與水違行訟。君子以作事謀始

象に曰く、天と水と違い行くは訟なり。君子もって事を作なすに始めを謀はかる。

訟は争訟・訴訟の意。上の者が強剛ごうで下の者が陰険けんであれば、争訟は避けられない。訟うったえは中心に孚誠まことがありながら、相手のために妨げ塞がれることによって止むを得ず起すものであるから、よく自ら恐懼きょうくして中道にかなった行動をとれば吉、強引に訟を遂げようとすれば凶である。

「小筌しょうせん」・・・この卦は、別れ別れになって相交わらず、互いに背き争う象。万事成り難い。論争を慎むべし。争いごとを避け、特に目上の人に従う心を持って、道理を忘れてはならない。

・希望・・・苦労ばかり多く、功が少ない。
・恋愛・・・調ととのいがたい。婚姻は凶。
・金銭・・・財を求めても苦労ばかり多く、功が少ない。資難に注意。
・健康・・・心身が不安定で、憂いごと悲しみごとが多い。病気は長引くが、治る。

【師】䷆ 「地水師」（指導者の苦しみ）　「坎下坤上」（多くの人の集まるかたち）

師、貞。丈人吉無咎。

師、貞。丈人なれば吉にして咎無し。師は兵衆・軍隊の意。およそ軽々に用うべきものではないから、貞正を失わぬことが大事である。これを統率する人が老成した丈人(長老)であれば、吉であって咎はない。

師は軍隊、戦争を意味する。戦いは天道にかなっていること、すなわち悪を討つ戦いであることが必要。したがって戦いを起す場合には正しさを保っていることが条件となる。また、小人に率いられた戦いは混乱するばかりであるが、丈人(りっぱな統率者・長老)を将とする戦いは吉であり、咎を免れる。

これは戦争の卦です。戦争はどの戦線においても、いつも勝てるものではありません。結局は大局的に見て、勝利をつかめば良いのです。その上、戦争に取り掛かる前に、作戦をまず十分に練る必要がある。それは、初めの作戦の誤差が、あとまで大きく響くからです。

昔、周の時代の兵制では、五百人を旅団、二千五百人を師団、一万二千五百人を軍団と称した。二千五百人の兵を動かす師団長の苦労は、並大抵ではなかったでしょう。このように、人を導く立場の困難と苦労を、「師」という文字であらわしたのです

師出ずるに律を以ってす。否ざれば臧きも凶なり　「師出以律。否臧凶」（師初六）

戦争行動を起こすに当たっては、軍規軍律を正すことが大事である。規律のない軍隊は、戦闘に勝つことがあっても、その結果はついに凶となる。

ところで、戦いには優れた知力のある参謀が必要です。自分の腹心の部下を養成することが開運の基です。あなたが男性ならば、この卦を得た場合、仕事では大変なワンマンです。力強い協力者を作ってください。女性関係では浮気の相手が多く、本当に自分の愛する人に巡り会っていない時です。

あなたが女性ならば、事業家タイプや、女社長、大家庭を切り回していくような人、また多角経営的に自分の才能を生かしていける人が多い。また情事方面では男出入りがなかなか激しい。

兎に角、男女ともに日常のことでは、自分の仕事が忙しく責任のある立場に立たされます。その上、他人から寄りかかられる負担の多いときです。よほど気を張っていなければいけません。しかし他人の頼みを積極的に引き受けてあげなければいけないし、自分は、常に新しい気持ちを持って、次の仕事をして行かなくてはなりません。

象伝に「地(坤)の中に水(坎)があるのが師である。地中に水が蓄えられるというこの卦の象にのっとって、君子は人民を包容し兵衆を蓄積する」とある。

「小筌」・・・この卦は、大人の徳を身につけ、君に対しては忠、親に対しては孝である人には吉。そうでない人には余り良くない。

- 希望・・・人に悩まされ、また人を害することがある。論争を慎むべし。
- 恋愛・・・妨げがある。婚姻は凶。
- 金銭・・・盗難に注意。
- 健康・・・心身に辛苦がある。旅行などは慎むべし。

比、吉。原筮、元永貞、無咎、不寧方来、後夫凶。

比は、吉。原ね筮いて、元永貞なれば、咎無し。寧からざるものも方に来らん。後るる夫は凶なり。

人に比しみ輔けられて吉。比しむ相手を原ね筮い、大いに永く正しい者を求めれば、咎はない。それまでしたしむことのなかった者も、むこうからやってくる。こうした時に一人ぐずぐず後れる者は凶である。

象に曰く、地上に水あるは比なり。先王もって万国を建て諸侯を親しむ。

比とは親比・親輔、人々たがいに比しみあい輔けあうの意。この卦の一陽が陽剛中正で衆陰これに比輔順従する象にのっとる。人と比輔するのはもとより吉であるが、その相手を失してはならぬ。それ故に比輔すべき相手を推し原ね、筮い定めて、しかも大いに永く貞正なる者を選び得てこそ、咎なきを得る。このようにすれば、それまで不安を抱いて比しむことのなかった者もやがて慕いよるであろうし、そうなってもぐずぐずして後れるような人は凶である。

「象伝」　地(坤)の上に水(坎)があるのが比である。地と水と密着して隙間のないこの卦象にのっとって、先王は万国を建て諸侯と親密にすることを心がける。

孚(まこと)ありて之れに比すれば、咎(とが)無し　「有孚比之、無咎」（初六）

人との交際には、まこと、すなわち誠信をもととして親しみさえすれば、あやまちはない。

「比す」とは、親しむこと。親和、親善、という意味です。また、この卦は、水が地上にあらわれた形ですから、豊かな水田が想像されます。これは、長い間の戦争がすんだ後の落ち着いた田園風景です。平和状態を取り戻した時には、人々は和気藹々として集まり、にぎわうものです。そして今後の生活に向上発展を求めるのです。

しかし、この「比」は比べるという意味もあります。つまり自分と人の力を比べるのです。比肩、比較、比和の言葉があるように、やはり平和の中にも生存競争は、なかなか厳しいものです。だから同じ目標に向かって多くの人々が集まることを意味しております。

同じ目標に向かって人が集まるということは、あなたが欲しているものを、ほかの人も望んでいる時です。人に親しめということは、仲良くなれと云うのではなく、人に遅れをとるなという意味もあります。

「小筌」・・・この卦は、親しみがあり、互いに和楽する。また、知己・朋友・一族などから力を添えられる。

- 希望・・・多少遅れることがあるが、たいていは成就する。油断なく迅速に行えば吉。引き伸ばせば却(かえ)って成就しない。
- 恋愛・・・成立。婚姻も成るが、遅くなると調ととのい難い。
- 金銭・・・財を望む心に誠があれば、他人の助けを得る。
- 健康・・・病気にかかると長引く。

【小畜】䷈「風天小畜」（垂れ込めた雨雲）　「乾下巽上」（少し蓄えるかたち）

小畜、亨。密雲不雨、自我西郊。

小畜は、亨る。密雲あれど雨ふらず、我が西郊自りす。

彖に曰く、小畜は柔、位を得て上下これに応ずるを、小畜と曰う。健にして巽い、剛中にして志行なわる。すなわち亨るなり。密雲あれど雨ふらずとは、往くを尚ぶなり。わが西郊よりすとは、施しいまだ行われざるなり。〔彖とは、易の一卦ごとに意味を総論した言葉〕

象に曰く、風天上を行くは小畜なり。君子もって文徳を懿くす。（懿はイと読み、優れているの意）

小畜の小は陰、畜は畜むの意。一陰が五陽を引き畜める卦象に取る。また一陰が五陽を引き畜めるのであるから、その拘束力は弱く、従って少しく畜める＝小畜という意味にもなる。陽剛・君子の道はたとえ小しく畜められても、やがては亨る。密雲は陰気の凝集、いまだ陽気と相和して雨ふらすに至らず、陰の方角たる西郊より湧きつつある。やがては雨ふって亨る機会も来るだろう。（易の卦辞は周の文王の作という）

「象伝」　風（巽）が天（乾）の上を行くのが小畜である。風の恩沢がまだ人には及ばぬこの卦象にのっとって、君子はおのれの文章道徳を蓄積涵養し、やがてその施しのあまねからんことを期すべきである。

畜は蓄えることで、小さな蓄積であると同時に、小さな停止でもある。この卦を得れば、やがて通る。わが西の郊外より雨雲が湧き起こりつつあるが、まだ雨降らないような状態である。

この卦は、うっとうしい降雨の前の、むしむしとした曇り空を見上げているような状態です。さっと一雨くれば、すっきりとするのですが、降りそうで降らない空模様を眺めながら、いらいらしている状態です。

この卦を得たときには、「畜」に貯蓄という意味があるので、物質面にも豊かであり、運気も強いのです。しかし、まだ現在の計画や実行しかけたことは、思い通りに進まない。人に止められたり、障害があったりして、挫折しやすい傾向があります。雨の前の鬱陶しさです。夫婦の状態としては倦怠期でしょう。

「小筌」・・・この卦は、物事がふさがり止るという意味を示す。万事すぐには成り難い。

- 希望・・・時いまだ至らずと心得て、軽率な行動を慎み、気長に待てば吉。もし大人の徳を保つ人なら、現在は凶でも遂には吉に転じる。小人ならば、不運にして苦労から逃れられない。
- 恋愛・・・男女間に揉もめ事ひがある。婚姻は凶。
- 金銭・・・財を望む行為は他人の妨げにあう。
- 健康・・・心中にいろいろ思うことがあり、気が憂鬱となる。

履虎尾不咥人。亨。

虎の尾を履むも、人を咥わず。亨る。

象に曰く、上、天にして下、沢なるは履なり。君子もって上下を弁ち、民の志を定む。

履は人の常に履むべき道、礼にあたる。剛強の人に対しても礼にかなった柔順和悦の態度で接すれば、危険はない。あたかも虎の尾を履みつけても虎から噛み付かれる心配がないのと同じで、願い事は亨る。

「象伝」に曰く。「上に天(乾)があり下に沢(兌)があり、上下卑高の秩序がはっきりしているのが履である。君子はこれにのっとって上下貴賤の階級を分かち民心を安定させることにつとめる」と。

履は履行の意。また音通で礼の意味にもなる。虎の尾を踏みつけても、噛まれずにすむように、剛強の人にも礼をもって接すれば、願いは通る。

履は、踏むという意味でもある。この卦は、虎の尾を踏むような危険の中にある時です。しかし、従順に年長者、目上の意見に従って行けば、その危地を脱することができます。先人の成功したこと、失敗したことをよく見定め、行動することです。

だから、他人に先立ってことを起せば、必ずといってよいほど失敗します。他人の後を受け継いですることは、初めは非常に困難に見えても、成功します。苦労の多いほど、成果も大きいのです。そのために、初めのうちは礼節を尽くし、正しい道を踏み行うことが大切です。

だから、初め曖昧な態度とか、いい加減な気持ちではじめたことに対しては、あとで大きな不安が出てくるのが、この卦の欠点です。

虎の尾を履む。人を咥わず。亨る　履虎尾不咥人。亨。

虎の尾を踏むような危険な地位にいても、正しいことを胸に抱いていれば、虎に食われることはない。つまり、地位を保つことができ、立派にやっていける。

眇能く視、跛能く履む　眇能視、跛能履。（履六三）

眇の人間がものをよく見ようとし、跛の者がよく踏みこたえようとする。それはとうてい出来ないことであり、結果は虎の尾を履む危険に陥るだけだ。

「小筌」・・・この卦は礼儀を表す。また、履み進むことを意味する。初めは驚くことがあるものの、あとには喜びとなる。

・希望・・・身分を越えた大きな望みごとが生ずる。まず小さなところから始めるとよろしい。礼を実践し、闘争を慎むべし。

・恋愛・・・人を恋い慕う兆しあり。憂えもだえるであろう。婚姻は成立する。

・金銭・・・財を求める行為は他人の妨げにあうが、成功する。

・健康・・・病気は重いが、これから快方に向かう。

【泰】☷☰「地天泰」（順風にはらむ帆）　「乾下坤上」（安泰のかたち）

泰、小往大来。吉亨

泰は小往き大来る。吉にして亨る。

象に曰く、泰は小往き大来る。吉にして亨るとは、すなわちこれ天地交わりて万物通ずるなり。上下交わりてその志同じきなり。内陽にして外そと陰なり、内健にして外順なり、内君子にして外小人なり。君子は道長じ、小人は道消しょうするなり。

象に曰く、天地交わるは泰なり。后きみもって天地の道を財成さいせいし、天地の宜を輔相ほしょうし、もって民を左右す。

泰は安泰・通泰の意。小(陰・坤)が外卦に往き、大(陽・乾)が内卦に来ていれば、やがては陰気下降・陽気上昇して陰陽相和する時期に達する。故に吉であり亨るのである。人事をもって言えば、君臣上下の意思疎通し国家安泰ならんとする時である。

「象伝」　泰は小往き大来り、吉にして亨るというのは、つまり天(乾)と地(坤)が交わり和して、万事の生命が通ずることであり、上下が交わり和してその志を同じくすることである。内が陽で外が陰、内が健で外が順、内が君子で外が小人である。君子の道が日々に成長し、小人の道が日々に消衰する時である。

「象伝」　天(乾)と地(坤)の相交和した象が泰である。君子はこれにのっとって天地の道を財成(栽成に同じ、布を裁たって衣服を作り成すように、素材を有用に物に仕上げること)し、天地の宜を輔をたすけて、民衆の生活を助成する。

「泰は、小往き大来る。吉にして亨る」の解釈は、
小(陰・坤)が外卦(上)に往き、大(陽・乾)が内卦の下に来ている状態。やがて陽が上昇し、陰が下降して、陰陽の気が通じるので安泰となる。吉であり通る。

「泰」は、安らかということで、全てのことが整って安泰な状態です。泰運、安泰、泰然、これらは全て落ち着いた安らかな状態を意味する。上が地で下が天である。天は上へ地は下へ動こうとして和合している。
この卦はよく易者の看板に出ているから。一般に知られている。これは易学上、一つの理想を表している。現在は申し分なく安定した生活です。夫婦、男女の間もぴったりしてして、愛情もこまやかなときです。一家も平和で男性は自分の仕事に誇りをもって、しっかり家庭を支え、女性は働き者の夫に支えられ、ゆったりした生活の幸福にひたりながら、家計をよく切り回している卦です。
若い人の縁談としては見れば、親戚、知人関係から来た話が多いですが、これ以上ないほどの良縁ですし、まとまります。

「小荃」・・・この卦は貴い人には吉であるが、一般の人には凶である。(この卦は吉であるが、月が満月を過ぎると、やがて欠けて行くように、楽しみが極まって哀しみが生じてくるから)

- 希望・・・急にはかなわないが、年月を経て漸くかなう。
- 恋愛・・・悩み多し。
- 金銭・・・新規に事を企てると良くない。最後には破産する兆しがある。
- 健康・・・心中に悩みが多く、外見をつくろっていても遂には悪くなる。

【否】䷋「天地否」（閉じられた出口）　「坤下乾上」（閉じふさがって通じないなかた）

否之匪人。不利君子貞。大往小来。

否は之人に匪ず。君子の貞に利ろしからず。大往き小来る。

彖に曰く、否はこれ人にあらず、君子の貞に利ろしからず、大往き小来るとは、すなわちこれ天地が交わらずして万物通ぜざるなり。上下交わらずして天下に邦なきなり。内陰にして外陽なり、内柔にして外剛なり、内小人にして外君子なり。小人は道長じ、君子は道消するなり。

象に曰く、天地交わらざるは否なり。君子もって徳を倹にし難を辟く。栄するに禄をもってすべからず。

否は否塞、ふさがって通ぜぬこと。陰陽相和せず、上下の意思の疎通を欠く状態。故に否は人道の正常な状態ではないし、君子がいかに貞正を守ってもよろしいところがない。大(陽・乾)が上にのぼって去り、小(陰・坤)が下にさがってしまい、陰陽相和す機会が見出せぬ。

象伝に、天(乾)と地(坤)の相交和せぬのが否であるとある、とある。このような否塞の時期にあれば、君子はおのれの才徳を秘めて控え目に行動し、外からの禍難を避けることを心がける。そのような君子は禄位などで飾りたてようとしても心を動かされぬものである。

否は否がり通じない状態。人道にそむく。君子が正しさを守ってもよろしくない。なぜなら、大(陽・乾)が外卦(上)に往き、小(陰・坤)が内卦(下)に来て、陰陽が通じない状態であるから。

「否」は、いなむ、ふさぐと読む。口にふたをして、開くことができない意味を持っている。否運とは、悲運、不運、運命がふさがって開けないことです。否定とか否認は、あるものを認めないことです。この卦は、前の卦とは反対で、天はあくまで高く、地はあくまで低く、それぞれ両者が分離して、溶け合わない状態を言うのです。

だから、こんな時には、人も立場を得ていない時です。

たとえば、民衆の意見が政治に反映せず、政治家の意図が民衆に理解されないような状態です。ふさがって通じないのですから、経済的にも金繰りがうまくいかず、思うように進めない状態です。日常生活でも、精神面でも、面白くないことの連続ですが、それも時間の問題で、たとえ目先がふさがっていても、隠忍自重していれば、自然に時が解決してくれる。

「小筌」・・・この卦は、貴い人には吉であるが、一般の人には凶である(この卦は吉であるが、月が満月を過ぎると、やがて欠けていくように、楽しみが極まって哀しみが生じてくるから)

- 希望・・・初めは苦しみ後には栄える。初めは人と合わず苦労するが、後には志を遂げる。
- 恋愛・・・口争いあり。婚姻は成立するが遅れる。
- 金銭・・・初め凶。後には七・八割がた成功。
- 健康・・・病難に慎むべし。

【同人】 ䷌ 「天下同人」（秘密を打ちあけた友） 「離下乾上」（公平無私で万人が共同すれば、どんな困難でも乗り切れるかたち）

同人于野。亨。利涉大川。利君子貞。

人に同じうするに野に于てす。亨る。大川を涉るに利し。君子の貞に利し。

人と仲良く和同するのに、曠野においてするごとく広く公正にする。そうであれば、望みは通り、大川を渡るような決断もよろしい。君子の正しさを守ってこそよろしい。

唯君子為能通天下之志

唯だ君子のみ能く天下の志を通ずるを為す。

大人、君子というものは、天下の人々のすべての志によく通じて、上下に隔たりのないようにする。上下の情を通ずるのが政治家の本務である。

象に曰く。同人は、柔、位を得、中を得て、乾に応ずるを、同人と曰う。同人に曰く、人に同じうするに野においてす、亨る、大川を涉るに利ろしとは、乾の行なり。文明にしてもって健、中正にして応ず、君子の正なり。ただ君子のみ能く天下の志を通ずることを為す。

象に曰く。天と火とは同人なり。君子もって族を類し物を弁ず。

同人は人と同ずる。そうであれば亨るし、大川を涉るような大事を決行してもよろしい。君子が貞正をとり保つによろしい。

象伝に曰く。天(乾)と火(離)があるのが同人である。天と火と共に上昇の性あって和同するこの卦にのっとって、君子は同族を類集し異物を弁別する。

お互いに何の秘密もなく、心から協力し合えば、たいていの物事は成功すること間違いないという卦です。「同人」は、われ人とともにする、また、人と同じくする、という意味です。同意、同一、同業、同行などの言葉は、すべて単独で行動する意味ではありません。また、同人雑誌というのは、この「同人」の同じ志の人、友人、仲間という意味から出たものです。しかし、「君子は和して同ぜず」と、『易経』にあります。これは、よいことで意見が一致することには良いが、つまらないことに共鳴する「付和雷同」ではいけないすということです。

「小筌」・・・この卦は、人心が和同して親しみ深い様子を表す。万事万端ととのい、立身出世する。ただし正直者にのみ吉であり、邪悪な心の持ち主が、この卦を得た時には、かえって大凶と成る。

- 希望・・・出世・発達の卦であり、万事かなう。かりに他人の妨げに合っても災いには至らない。
- 恋愛・・・相手に不貞の心がある。婚姻はよく考えた後に。
- 金銭・・・きちんと計画を立てれば吉。
- 健康・・・短期を起さないように身を慎むこと。

【大有】䷍「火天大有」（真昼の太陽）「草下離上」（盛大なかたち）

大有、元亨。

大有は、元いに亨る。

彖に曰く、大有は、柔尊位を得、大中にして上下これに応ずるを、大有と曰う。その徳剛健にして文明、天に応じて時に行う。ここをもって元いに亨るなり。

遏悪揚善、順天休命

悪を遏めて善を揚げ、天の休命に順う。

象に曰く、火の天上に在るは大有なり。君子もって悪を遏め善を揚げて、天の休命に順う。

悪を抑止し、善を賞揚して、天の命に従う。　「休命」は立派な天の命。

大有とは大いに所有するの意。この卦の火(離)が天(乾)の上にあり、太陽があまねく四方を照らす象。また六五従順の君主が衆陽を率い、一君が万民を所有する象にのっとる。故に大いに亨通を得るという占辞である。

めいめいが身分相応に、時と所を得て満足している状態を「大有」というのです。「大有」はおおいに保つと云うことです。つまり、あなた自身が、自分の幸運を長く保つようにしなさいということです。

この卦は形を見ると、陽のあいだに一つの陰しかありません。つまり、忠誠な騎士に守られている女王のようなものです。また女王は支配力と包容力を持たなければ、女王としての資格はないのです。一国にとって女王は太陽のような存在です。だから、この卦は、また真昼の太陽のように、明るさと強さを持っています。

この卦が出たときは、あなたは非常に盛運のときです。ふところぐあいも豊かで、殆んど思い道りに動く時です。満ちれば欠ける世の習いですから、この盛運を維持することは大変です。

実力も運勢も相伴って気力も充実していますから、積極的に行動して間違いありません。時期も早いほど有利です。事業面では、今までやってきたことの枝葉末節を切り捨て、本筋に集中するように、頭の切り替えが大切です。

「小筌」・・・この卦は、太陽が天上にあって照りわたるように、人も時を得ていることを表す。しかし、卦がよすぎて位負けし、親類・友人などすべての人事について苦労する。また、外見は美しいが内実は醜いことを示す。

- 希望・・・現在、時を得ているが、月が満ちて欠けるように、やがて衰運に向かう。
- 恋愛・・・問題を起し、結婚は遅くなる。
- 金銭・・・損失の兆しあり、小利に迷って苦労を重ねないように。
- 健康・・・心中に苦悩を抱いて不安定となる。

【謙】䷎ 「地山謙」（実った稲穂）　「艮下坤上」（貴い位にあっても低い者に譲るかたち）

謙、亨。君子有終。

謙は、亨る。君子は終わり有り。

謙遜であれば希望は通り、有終の美を飾ることができる。

彖に曰く、謙は亨る。そもそも天道はその陽気を下すことによって万物を救済して光り輝き、地道は卑きに居ながらその陰気を上行させて、陰陽の調和をはかる。天の道は盈ちたものを虧いて謙(足らざるもの)を益し、地の道は盈ちたものを変じて謙に敷きおよぼし、鬼神は盈ちたものに禍害を加え謙に慶福を与え、人の道は盈ちることを憎んで謙を好む。なればこそ謙遜の徳ある人は、貴い位についてますますその徳の光りを加え、卑い位に在ってもその徳の故にこれを侮り踰えることはできない。君子にして終わりを全うする所以である。

象伝に曰く、地(坤)の中に山(艮)があるのが謙である。卑い態度の中に高い徳を蔵するこの卦の象にのっとって、君子は多いものを減らし少ないものを増し、そのほどほどをはかり考えて施しを公平にすることを心がける。

「謙」とは、へりくだると云うことです。「謙遜」「謙虚」ということです。謙譲の美徳という言葉があるように、この卦ときは、道徳、礼節を尊ぶことが、すべてのことの根本です。この卦の原文には「山高きをもって地の低きにくだる」という言葉があります。これは身分の高い人がへりくだることは、徳の元であり、礼の初めだという意味にとられている。

しかし「謙」の持つ本当の意味は、自分のあり余っている物を人に分け与えるということです。たとえば、高い山の土を運んできて、低い土地を埋め立てするようなものである。実際面では言えば、自分に才能があっても、余計なことに手出しをしてはならない時です。自分だけ欲張ってはならない。

この卦には大きな欠点がある。形を見ると、一つの陽を五つの陰が囲み、一人の男性が、多くの女性に取り囲まれている。男性は女性に要注意である。

「小筌」・・・この卦は、先に屈して後に伸びることを表す。初めは何事もうまく行かず苦労が多い。しかし、後には利(よろ)しきことが必ずおこる。謙とは、謙遜、へりくだること。へつらうことではない。

- 希望・・・苦労を堪え忍んで正しさを守れば必ずかなう。万事ひかえ目にするのがよく、強引であれば凶。
- 恋愛・・・成立。
- 金銭・・・財を求める行為は、やや遅くなるが、人の助けを得て成功する。
- 健康・・・病気になると回復が遅れる。

【豫】䷏ 「雷地豫」（優れてきた者）　「地下雷」（人の心がやわらぎ楽しむ）

豫、利建侯行師。

豫は、侯を建て師を行るに利ろし。

豫は、豫び楽しむ。民が悦び服しているから、諸侯を封建し、軍隊を進めるのによろしい。

彖に曰く　豫は豫楽、よろこび楽しむの意。九四の独陽に衆陰が和順し豫楽する象。故に侯を建てれば万民悦服し、師(軍隊)を動かせば士卒が悦楽してよろしきを得る。

豫は剛(九四)が衆陰に応じられてその志が遂げられる象、また道理に順って(坤)動く(震)のが豫である。豫は道理に順って動く、天地の運行もまたその通りであるから、まして侯を建て師を動かすにもこの道をもってすべきは云うまでもない。天地は順をもって動くから、日月は誤りもなく運行し、四季もたがうことなく循環する。聖人が道理に順って動けば、刑罰は正しく行われ万民がこれに悦服する。豫の卦の時の意義はまことに偉大なことである。時にかなって宜しきを得るようにせねばならぬ。

象伝に、雷(震)が地(坤)の上に出て、あたりを振いうごかすのが豫である。古代の聖王はこの雷声にのっとって音楽を作り道徳を発揚し、また盛んに音楽を奏して上帝におすすめし、あわせて父祖の霊をも祭り慰めたのである。

春機発動のときです。これは、春雷が鳴り響いていて、地の上に雷がある形である。初雷が鳴り渡ると、冬眠していたものが総て春の訪れを知って動き始め、木々も新しい芽を吹き出します。このように人間も新しい出発の時です。「豫」は、あらかじめと云うことです。あなたは、この新出発のための準備がすべて整っているいます。

先に立つ指導者が、しっかり予定を立ててくれれば、民衆は不安なく就いていくものです。

予感、予期、予言、予知、予告(予は豫の略字)などの言葉は、すべて、まえもって知る、知らせる、ということである。何事も心を引き締め、足元に注意してスタートしてください。必ずあなたは成功のチャンスをつかむでしょう。この卦は下積みの苦労した人が、ようやく世に認められたりする感じがするが、「豫」という言葉には油断という意味がある。人間も調子にのると自分の力を過信しやすいものです。

「小筌」・・・この卦は、悦よろこびを表す。立身出世の悦びがある。勝負ごとに吉。古代の中国で諸葛孔明(三国時代の英雄。蜀の劉備玄徳りゅうびげんとくの軍師として活躍)が南蛮征伐行くとき、占ってこの卦を得、大勝利をおさめた。新規に物事に取り組む兆しがある。

・希望・・・吉兆。慶びごとがある。
・恋愛・・・結婚は吉。ただし女性側に問題が起こる。
・金銭・・・久しく年月を経へたのち財をなす。あるいは再三にわたって損失したのち財をなす。
・健康・・・病気にかかると長引く。

【随】䷐ 「沢雷随」（季節を過ぎた雷）　「震下兌上」（物と自分とが相従うかたち）

隨、元亨利貞。無咎。

随は、元いに亨りて貞しきに利ろし。咎なし。

彖に曰く、随は、剛来りて柔に下る。動きて説ぶは随なり。大いに亨り貞し（きに利ろしくして）、咎なく、天下これに随う。随の時義、大いなるかな。

象に曰く、沢中に雷あるは随なり。君子もって晦に嚮えば入りて宴息す。

随は随意の意味。互いに随ううようにすれば大いに通る。

兌（沢）上の少女をもって震（雷）下の長男に従う卦象にとる（十五頁の小成八卦を参照）。事を行うに当って人の悦服随従を得れば、大いに亨ることはもちろんながら、またかならず貞正なるをもって利ろしとする。かくしてこそ咎はない。

「彖伝」随は剛（震）が内卦におりて来て柔（兌）に下った象であり、また動いて（震）説ぶ（兌）のが随である。大いに亨り貞しきに利ろしく、咎もなく　しかも天下の人がこれに随う。随卦の時の意義はまことに偉大なことではある。

「象伝」沢（兌）の中に雷（震）があるのが随である。雷が沢中に伏蔵して時に随うこの卦の象にのっとって、君子も昼は働き夕暮れ時になれば家内に入って宴楽休憩する。

この卦は、夏の間に大いに力を奮っていた雷も、秋になれば自然と鳴り止むといった感じである。「随」はしたがうということです。時にしたがい、人にしたがい、立場に従うことです。正しくすべてを見きわめて万事に従えば、間違いない。追随とか、随行員とか、随筆などの言葉は、自分に主体性のないものを言う。これを人に見ますと、一応のことをなし終えて、また次のチャンスが来るまで、機運、人などに従うべきときです。自分に実力があっても、一応は他に従ったほうが、良い結果が得られる。

この卦は弱い運ではありますが、決して悪い運ではありません。この卦が出たときは、身辺が少しずつ強さから弱さに変化しかかってきている時です。時の変化に従って、休むときは休みましょう。

「小筌」・・・自分が動くと相手が悦ぶので随という。互いに従い通じるという意味。万事に変化があれば吉。住所を移し、故郷を去るなど、現状を変えれば吉。隠者のように引きこもる兆しあり。

- 希望・・・かなう。ただし、欲に従い不義に動いてはならない。
- 恋愛・・・女難を慎み防ぐべし。婚姻は成立。
- 金銭・・・財を求めて成功する。
- 健康・・・感情が高ぶり、心中が不安定となる。病気にかかると重い。

【蠱】䷑「山風蠱」（皿の上のウジ）「巽下艮上」（乱がきわまって、その後に新しいものがおこるかたち）

蠱、元亨。利渉大川。先甲三日。後甲三日。

蠱は、元いに亨る。大川を渉るに利ろし。甲に先だつこと三日、甲に後るること三日。

蠱はその字面よりすれば蟲・皿の二字より成る。食物の皿に虫(蟲の略字)が湧くのは、事の壊乱腐敗すること、もしくは壊乱腐敗に至った事を意味する。卦象をもって言えば、風(巽)が山(艮)下に吹き荒れ、物みな壊乱するかたちであり、また長女(巽)をもって少男(艮)に下り、その情を蠱惑するかたちでもある。さて、事は壊乱すれば、またこれを収拾して治めねばならぬから、大いに亨るべき道理であり、大川を渉るような大事も決行するによろしい。甲は十干(甲乙丙丁戊己庚辛壬癸)のはじめ、事の発端であり、甲に先だつこと三日は「辛」、後るること三日は「丁」、辛は「新」に通じ、丁は「丁寧」の意、つまり壊乱した事を治めるはじめに当っては、心を新たにし丁寧にすることが肝要なのである。

「彖伝」蠱は剛(艮)が上り柔(兌)が下がって、陰陽まじわらず事が壊乱する象であり、また下に在る者が盲目的に巽い(巽)上に在る者が無反省に止まり(艮)、国政壊敗に異たる象が蠱である。しかし蠱は、やがてまた大いに亨り天下治まるに至るのである。大川を渉るに利ろしとは、前進して事に当ることである。甲に先だつこと三日、甲に後るること三日、すなわち心を新たにし事を丁寧にすべしとは、物事はすべて終われば始まる、天の運行にも似た道理なのである。

「象伝」山(艮)の下に風(巽)があるのが蠱である。君子はこの風の徳にのっとって民を風化振作し、山の徳にのっとって己の徳を育成向上させる。

「蠱」は皿の上に三匹の蟲がいることで、皿の上の食物が腐ってウジがわいた状態であるから、この卦が出た時は、周囲の状況が複雑混乱を極めていると考えてください。平穏無事のな状態がいつまでも続くと思って油断しすぎたために生じた破れですから、その破れをつくろったり、平常に整えたりするのは、なみたいていではありません。現在、破れたものを復元するためには、大変な努力が必要です。内部の弱点を早く発見することが大切です。愛情問題も複雑で悩みの多い時です。

「小筌」・・・万事につき難儀・迷惑することがある。争いごとを避け、身を慎むべし。有徳・明智の人でなければ吉兆を得られない。

- 希望・・・かない難い。
- 恋愛・・・親しかった人が遠ざかる。婚姻は凶。
- 金銭・・・盗難・破産の兆しがある。災難は遠くではなく近くにおこる。
- 健康・・・病難がある。

【臨】䷒ 「地沢臨」（移りゆく四季）　「兌下坤上」（進み迫るかたち）

臨、元亨利貞、至于八月有凶

臨は、元いに亨りて貞しきに利ろし。八月に至れば凶あらん。

彖に曰く、臨は、剛侵くにして長じ、説びて順い、剛中にして応ず。大いに亨りてもって正しきは、天の道なり。八月に至れば凶あらんとは、消すること久しからざればなり。

象に曰く、沢上に地あるは臨なり。君子もって教思すること窮まりなく、民を容れ保んずること疆りなし。

臨は進み迫るさま。大いに通るが正しさを守ってこそよろしい。臨は一年で十二月に当り、陽気が初めて生じる十一月（䷗復）から八カ月目の六月（䷠遯）に至って、はっきり陰気が伸びる形勢を示すので凶となる。

臨は人に臨む道、地（坤）が沢（兌）上にあり、河岸が水沢に臨む卦象に取る。人に臨むに道をもってすれば大いに亨るが、貞正をとり、たもつがよろしい。卦を月に配して言えば、臨は陽気ようやく長ずる十二月の卦であり、次卦の観（䷓）は陰気長じて陽気窮迫に向かう八月の卦であるから、現在は陽気長じて吉ではあるが、八月になれば凶となる。

「彖伝」　臨は剛（初・二）がようやく長じ、説んで（兌）順い（坤）、剛（九二）が中位に居て応（六五）を持つ。大いに亨り貞正を得るのは、天道の自然である。八月に至れば凶あらんというのは、陽気を消すことが久しからずして至るからである。

「象伝」　沢（兌）の上に地（坤）のあるのが臨である。君子はこの卦にのっとって民に臨む道を考え、民を教え導くことときわまりなく、民を包容し保護すること限りないように心がける。

「臨機応変」というこの卦は、時の動きに従って、自分自身をうまく適応させていくことです。頭の切り替えが大切な時です。これは強い卦なのですが、春考えたことでも、秋には次の考えに移るような、あなたの機敏性が必要なのです。たとえば、そのときのムードに支配されて、それがいつまでも続くように思って、次に来る流行を忘れてはいけません。

恋愛、結婚には、あなたの移り気をいましめなくてはなりません。

「小筌」・・・この卦は、物事が互いに交わり親しむことを表す。大いに進むべし。万事に柔和な態度で臨めば吉であるが、剛強な態度は凶。横あいから難儀なことを言いかれられて苦労することになる。

- 希望・・・吉。
- 恋愛・・・人に迷わされて進む。女難あり。慎むべし。婚姻は吉。
- 金銭・・・財を求める行いは成功するが、一石二鳥とは行かない。
- 健康・・・病気に注意。

たち）

観、盥而不薦。有孚顒若。

観は盥いて薦めず。孚ありて顒若たり。（顒若は、つつしみ深いさま、仰ぎ見るさま）

彖に曰く、大観上に在り、順にして巽、中正もって天下に観すなり。観は盥いて薦めず、孚ありて顒若たりとは、下観て化するなり。天の神道を観るに四時忒わず。聖人神道をもって教を設けて、天下服す。

象に曰く、風の地上を行くは観なり。先王もって方を省み、民を観て教えを設く。

観は示す、また仰ぎ観るの意。古は祭政一致で君主の尊位に在る者が、神を祭るに際して手を洗い浄め、これより供物を薦めようとする時のように、厳粛敬虔の心持を失わずに誠信が内に充ちておれば、すべてが整然として厳粛に行われ、人びとは顒若（恭敬のさま）としてこれを仰ぎ観て、誠信が上下に感孚する。「観」は人を見、また人に仰ぎ見られるさま。神を祭る時に、手を洗い清め（盥）、供物を軽々しく薦めないように、誠意を尽くして事にあたれば、人々から顒若（恭しいさま）として仰ぎ見られるであろう。

「象伝」

風（巽）が地（坤）の上に行くのが観である。風が地上を周行し、その恵みが万物に及ぶこの卦の象にのっとって、古代の聖王はあまねく四方を巡行し、民の風俗を観察し政教を設けたのである。

この卦は風が地上を吹き抜けていく感じの時ですから、物みな凡てむなしいという意味がある。気持ちの上でも落ち着きがなく動揺しやすい時期です。あなたは、とどまって動かないほうが良いのです。武田信玄の旗印の「風林火山」の中の「動かざること山のごとく」の教えがぴったり当てはまる時です。

また「観」という字は、ただ見るだけではなく、思索し反省するすると言うことです。この卦は物質面よりも精神面に重点を置く、学問、研究、信仰などに大変よい卦です。精神面での進歩発展は大いにありますが、物質面では余り期待できません。あなたが男性ならば、この卦の場合は理想家で観念的に行動する人です。あなたが女性ならば精神面や信仰面に心が心を引かれやすい。

「観」というのは、見ることですから、自己反省が大切です。

「小筌」・・・この卦はおおむね吉であるが、晴天に雲が湧き起こるように、思いがけないことが起こ苦労することがある。しかし、人に仰ぎ尊ばれる卦であるから、他人の援助を受けることができる。

- 希望・・・吉事はあるが急に叶い難い。相談事は成立する。
- 恋愛・・・左右から一人を争う。婚姻は成立し難い。
- 金銭・・・盗難に注意。誘惑に心が迷い、損失あり。

【噬嗑】䷔ 「火雷噬嗑」（噛みくだく食物）　「震下離上」（あごの中に物あるかたち）、（かみ合うみ意）

噬嗑、亨。利用獄。

噬嗑は、亨る。獄を用うるに利ろし。

彖に曰く、頤中に物あるを噬嗑と曰う。噬み嗑わせて亨るなり。剛柔分かれ、動きて明らかに、雷電合して章らかなり。柔、中を得て上行す、位に当らずといえども、獄を用うるに利ろしきなり。

象に曰く、雷電あるは噬嗑なり。先王もって罰を明らかにし法を勅う。

噬嗑は噬み嗑うこと。物事が噛みあい、通る。また、邪魔者を噛みくだくことでもあり、刑罰を用いて悪人を裁くのによい。

噬嗑は口中にある物のある象だから、上下の顎を噬み嗑わせて物を噛み砕くことを意味し、人事をもって言えば、良民の障害である奸悪の人を法に照らして処刑除去し、善人の和合亨通を得させる謂でもある。故に噬嗑は亨る、獄を用いて悪人を裁くによろしい。

校を履きて趾を滅す。（初九）

罪を得て「あしかせ」を足に加えられても足の甲の見えなくなるようにする。過ちも早く懲りて慎めば、転じて福を得ることもある。（咎なし）

「噬嗑」とは、噛み合わせて通ることで、この卦が出た場合には、噛みくだくという意味ですから、生活力にあふれ、意欲旺盛の強い運です。これはあなたが、目的に対してすごい勢いで進んでいる時なのです。その中間に邪魔があるのですが、噛みくだけば目的が達せられるというわけです。だから現在は難局に直面していても、凡てのことに積極性を失わず、中途で挫折せずに行動することです。とにかく熱意と努力を忘れてはなりません。たとえ競争が激しくとも、あなたの力の入れ方一つで、思った以上の成績、利益があげられる時です。

「小筌」・・・万事につき人の妨害をうけ、支障をきたす。しかし、この卦は噛み合って用る意をあらわすので、初めは不調でも、後には順調に物事が進む。また、淵にひそむ竜のような勢いを示す卦でもあるから、短気を慎み温和にすべきである。そうなければ、口論・争いごと・訴訟などの支障をきたす。

- 希望・・・後にかなう。
- 恋愛・・・婚姻は成立する。
- 金銭・・・私欲のために禍(わざわい)を受けることがある。
- 健康・・・食物に障(さわ)りがある。慎まなければ成らない。

賁、亨。小利有攸往。

賁は、亨る。少しく往く攸有るに利ろし。

彖に曰く、賁は亨るとは、柔来りて剛と文る、故に亨るなり。剛を分ち上りて柔を交る、故に小しく往くところあるに利ろしきなり。(剛柔交錯するに)天文なり。文明にして止まるは人文なり。天分を観てもって時変を察し、人文を観てもって天下を化成す。

賁は文飾、かざるの意。装飾である。火が山下にあり草木を明照文飾する卦象に取る。賁飾その道を得ていわゆる文質彬彬たるを得れば、かならず亨通すべきであるが、文飾は度をすごせば不可であるから、小しく往くところあるに利ろしいのである。控え目に行動するとよろしい。

「象伝」

山(艮)の下に火(離)のあるのが賁である。君子はこの火徳の明照にのっとって庶政を明察し、山徳の静止にのっとって、あえて軽々しくは治獄の決定をくださない。

観乎天文、以察時變

天文を観て以て時の変を察す。(変は變の略字)

天文の変化を見て、時勢の変化を洞察する。人間界の移りかわりは天変地異に現れると考えられていた。

化成天下

天下を化成す。

人間関係の道、および時代の風俗、習慣など(人文)を基準として、天下を感化、教育する。科学が万物を化成するも同じ。

「賁」は装飾という意味です。自然現象では「秋の夕日に照る山紅葉」という感じである。山に沈もうとしている太陽は、そのあたりの風物を瞬間的に、色鮮やかに美しく照らし出します。これは天地自然の美観ですが、人間や社会現象にたとえますと、この「賁」(ひ)は末期の美しさを意味します。

「小筌」・・・この卦は、虎が林を出て遊ぶ象。美麗でしかも威厳があるという意味。身を修め家を斉(との)え学問をすることも、衣類・器物などを飾ることもすべて賁(ひ、装飾)であるが、それらの虚と実とをよくわきまえて行動すること。そうすれば、立身出世し、移転・旅行なども吉。

・希望・・・身をわきまえない大きな望みを持てば、かえって損出がある。控え目な小さな希望を持てば吉。

・恋愛・・・婚姻は成立するが仲たがいの兆しがある。

・金銭・・・財を求めて成功するが、自分の短気によって失敗することもある。

・健康・・・病気に注意。

【剥】䷖ 「山地剥」（崩れゆく山） 「坤下艮上」（小人の勢いが盛んで君子の悩むかたち）

剥、不利有攸往。

剥は、往く攸有るに利しからず。

彖に曰く、剥は剥ぐなり。柔、剛を変ずるなり。往くところあるに利ろしからずとは、小人長ずればなり。

象に曰く、山の地に附くは剥なり。上はもって下を厚くし宅に安んず。

剥は剥落、剥ぎ取るの意。卦の五陰成長して陽を剥ぎ落し、わずかに一陽を残すだけの象に取る。人事をもって言えば、小人の勢いが盛んとなり、君子を剥害する時にあたるから、君子たる者は進んで事を為すによろしくない。

「彖伝」剥とは剥ぐの意味である。柔(陰)が進んで剛(陽)をかえてしまう象。往くところあるに利ろしからずというのは、小人の勢いが成長している時だからである。順(坤)にしてこれに止まる(艮)のは、卦の象を観察しての行動である。君子たる者が常に消息盈虚の道理を大切に考えるのは、それが天道の運行だからである。

「象伝」高い山(艮)が崩れて地(坤)に付着した象が剥である。地が堅固ならば山もまた安泰である道理にかんがみて、君主は下民に厚く恵みを施し、自分の居る地位をも安泰にすることを心がける。

剥は、陰(小人)が盛んとなり、陽(君子)が剥ぎ落され衰えるさま。君子は積極的に行動を起こしてはならない。

今のあなたは、衰運の極といってもいいのです。形を見てください。下から見ると、陽がどんどん削られている時ですから、どのような実力、野心があっても、進んではいけません。

この卦の感じを四季の移り変わりから見れば、冬。一日でいえば夕暮れです。人間の力ではどうしても、退勢を取り返すことができない時ですから、勢いに逆らって自分の身に危害を招くことを避けてください。

また「剥」には、大きな木の実が地に落ちて、また芽を吹くという意味もありますから、最悪の事態で、この卦が出れば、すべてを脱皮して新生への第一歩を踏み出すと見られるでしょう。

あなたが男ならば、浮気の相手が多すぎます。それも、あんまり感心した浮気ではありません。また女がタフで、男がたじたじしている感じです。あなたが女性ならば、自分の本来結婚すべき相手でもないのに、おぼれきって、血道を上げているときです。

「山地剥」は「内部がからっぽ」という意味で、形から見ても、「一陽五陰で力なし」です。

「小筌」・・・この卦は枯れ木に花が咲くように、新規に物事を始めるのによろしい。しかし一方で、物が高いところから落ちることも表しているので、身の安堵は得られない。後には安定する。末吉。

- 希望・・・万事すみやかに行うと思い違いなどがあり、よくない。よくよく慎むこと。
- 恋愛・・・女難に注意。婚姻は凶。
- 金銭・・・財を求めれば十に七・八の功がある。が、他人のために覆される。盗難に注意。
- 健康・・・病気に注意。

【復】䷗ 「地雷復」（春立ち返る）　「震下坤上」（機運の循環するかたち）

復、亨。出入無疾、朋来無咎。反復其道、七日来復。利有攸往。

復は、亨る。出入疾なく、朋来りて咎なし。その道を反復し、七日にして来復す。往くところあるに利ろし。

彖に曰く、復は亨るとは、剛反るなり。動きて順をもって行く。ここをもって出入疾なく、朋来りてな咎なきなり。その道に反復し、七日にして来復するは、天行なり。往くところに利ろしとは、剛長ずればなり。復はそれ天地の心を見るか。

象に曰く、雷の地中に在るは復なり。先王もって至日に関を閉じ、商旅行かず、后は方省みず。

復は、これから陽気が回復する象。願いは通る。出入りともに支障はなく、友人の来訪を得て咎はない。一陰が初めて生じる ䷫（姤・五月）から、䷠（遯・六月）、䷋（否・七月）、䷓（観・八下月）、䷖（剥・九月）、䷁（坤・十月）という道を経て、この ䷗（復・十一月）で七変七日）して一陽来復した。積極的な行動をするのに利しい。

復其見天地之心乎。

復は其れ天地の心を見るか。

反復循環ということが自然の常で、そこに天地の心を見ることができる。冬が過ぎると春が来る。人生の消長、国家の盛衰もまた同様である。

「復」は、返る、元に戻るということです。すべての陰が徐々に陽に変わっていく形です。易の形というものは、何時も下から上へと見ていくものです。地中に暖かみが返ってきて、また春を迎える機運になってきている状態だと言えます。「往復」は行ったものが返る。「復元」「復原」はともに戻るということです。「復」はすべてのものを、もとに返すという意味があります。そして、元に戻ったものが、また第一歩からやり直すことです。

「易占い」のうえでは、「復」ということを冬至から新年と考えるのです。この冬至は、いわゆる一陽来復で春が返ってきた日なのです。昔の中国の王は冬至の日には交通を止め、あらゆる政治を休んで、一年の計を立てたと謂われています。

「小筌」・・・この卦は物が尽きてまた始まる卦であるから、一度は悪くともまた吉事に向かう時節であることを示す。万事に就き、思う所が成就する。

- 希望・・・天から宝を賜るように成就する。
- 恋愛・・・成立する。婚姻は二度目の縁か、または二度の相談によって整う。
- 金銭・・・支障をきたしても大きな妨げとならず、財をなすことができる。
- 健康・・・病気は治る。

【无】䷘ 「天雷无妄」（天の運行）　「震下乾上」（真実でいつわりのないかたち）

无妄、元亨利貞。其匪正有眚。不利有攸往。

无妄は、元いに亨り貞しきに利ろし。其れ正に匪ざれば眚有り。往く攸有るに利しからず。

无妄は、いつわりのないこと。また、それゆえに齎される望外の福。願いは大いに通る。正しさを守るに利しい。もし心が正しくなければ、かえってわざわいを招くから、積極的な行動はよろしくない。

彖に曰く、无妄は、剛外より来りて内に主となる。動きて健なり。剛中にして応ず。大いにもって亨りてもって正しきは、天の命なればなり。それ正にあらざるときは眚いあり、往くところあるに利ろしからずとは、无妄の往くは、いずくにか之かん。天命祐けず、行かんや。

象に曰く、天の下に雷行き、物事に无妄を与う。先王もって茂んに時に対し万物を育う。

无妄は、虚妄なきこと、自然のままにして真実なこと。虚妄とは、虚偽、うそ、でたらめ、いつわり。

「象伝」に、天(乾)の下に雷(震)が動けば、万物はそれぞれに生育を遂げ、无妄すなわち自然のままに性命の宜しきを与えられる。古代の聖王はこの卦象にのっとって、大いに天時に対応しこれに則って万物を育成することに心掛ける、と書いてある。(性命とは、万物の本来の性質、生まれつき、本性のこと)

欲望も作意もない自然のままの働きを「无妄」という。天のなすまま、人為的な技巧をもてあそぶことなく、自分のありのままの姿でいることが自然の理法にかなうということです。「妄す无し」ということは、天が人をいじめてやろうと作意するわけでもなければ、また、人を助けてやろうと努めるわけでもなく、晴曇風雨も自然の姿で、天の意思ではないということである。天意でもない状態を「无妄」という言葉で説明しているのです。

この卦が出た場合には、たとえ最悪の事態にあっても、心に余裕をもって、その時期の過ぎ去るまで静かに見守っていることです。それには何か自分の心にかなったもの、たとえば学問、研究をするなり、楽しみを求めたりして、不幸を不幸と思わない心境まで達することです。

「小筌」・・・この卦は、天の理に順って動くことを表す。誠意を保てば凶となることはないが、この卦を得た者が不誠実であれば、かえって災いを受ける。

- 希望・・・この卦は物を覆おい包む象があるので、万事すぐにはかなわない。何事も強引に行えば、かえって災いを受ける。
- 恋愛・・・すべて遅れ気味ではあるが成立。
- 金銭・・・信義に基すく行いには収入がある。
- 健康・・・初めは危ないが、後には安泰となる。

大畜　利貞。不家食吉。利涉大川。

大畜は、貞しきに利し。家食せずして吉なり。大川を涉るに利し。

象に曰く、大畜は、剛健篤実にして輝光あり、日にその徳を新たにす。剛上りて賢を尚ぶ。能く健を止むるは、大正なり。家食せずして吉なりとは、賢を養えばなり。大川を涉るに利ろしとは、天に応ずればなり。

象に曰く、天の山中に在るは大畜なり。君子もって前言往行を識し、もって徳を畜う。

大畜の大は陽、畜は畜むの意。内卦の乾・外卦の艮ともに陽卦、艮によって乾を引き畜めるのだから大畜であり、また陽によって陽を引き畜めればその拘束力も大、従って大きく畜める=大畜という意味になる。同時にそれは貞正なることをよろしとする。つまり才学がいかに大であっても、不正であってはならぬ。かくて貞正の得を大畜すれば、いたずらに家居徒食することなく、朝廷に出て禄をはんでも吉であるし、大川を涉るような大事を決行するにもよろしい。

「彖伝」に、大畜は剛健(乾)篤実(艮)の徳あって光り輝き、その徳は日に日に新たとなる象である。剛(上九)が上位に上っているのは、六五の君主が賢徳の人を尊尚する象であ。

「象伝」に、天(乾)が引き畜められて山(艮)の中に在るのが大畜である。この卦象にのっとって、君子は過去の聖賢の言行を多く認識し、その徳を畜陽することに勤める。

大蓄とは、大いに蓄えることである。充実感にあふれた意味を持っています。そして、その充実した力をいつでも発揮できる時期を待っている時なのです。また「大畜」とは、おおいにとどめる、止まる、時期を稼ぐという意味です。大事業をなそうとする為には、自分の力を大いに養い蓄えなければなりません。知識、人徳を高め、物質的にも十分な準備をして、その上で行動を開始しろという意味です。

「家畜」「畜養」「畜力」などはすべて、養いとどめていることです。日常生活でも、体力、精神力を養い、とどめておけば、いつでもスタートが切れます。

この形を見ていると、どんな困難に出会ってね、努力することが苦にならず、じっくり腰をすえて、豊かな気持ちで目標を見つめていられます。運勢としては、すべてのことに良い意味の判断ができます。いままで、自分のやってきた経験、実験などを十分に生かして活動できる時です。

「小筌」・・・この卦は、竜が山の中に潜んでいながら、じっとしていられず、奮い立とうとしているような状況を表している。そこで人も落ち着くことができず、住居のことなどについて苦労がある。仕えて働くのには吉。

- 希望・・・大人君子にとっては吉であるが、そうでない人にはやや安定さを欠く。
- 恋愛・・・よろしくない。
- 金銭・・・物が大いに集まり増す兆しがある。しかし、その反面、妨げもある。
- 健康・・・常に怒りや恨みを抱いて心中が穏かでない。争いを慎め。

【頤】䷚「山雷頤」（上あごと下あご）　「震下艮上」（物をかんで人を養うかたち）

頤、貞吉。観頤自求口実。

頤は、貞しければ吉。頤を観て自ら口実を求む。

彖に曰く、頤は貞しければ吉なりとは、正を養えば吉なるなり。頤を観るとは、その養うところを観るなり。みずから口実を求むとは、そのみずから養うところを観るなり。天地は万物を養い、聖人は賢を養いてもって万民に及ぼす。頤の時大いなる哉。

象に曰く、山下に雷あるは頤なり。君子もって言語を慎み、飲食を節す。

頤は、おとがい・下顎の意。卦の形は二陽が上下にあって四陰をはさみ、人が口をあけた形に似ており、上下の卦の形を見ても、上は止まり(艮)、下は動く(震)のが、物を食う時の上下の顎の働きに似ている。また頤口は飲食して人の身を養うところから、頤には養うの意味もある。

〔君子以〕慎言語、節飲食　君子は、言葉を慎み、飲食を節する。

それは、禍いを招きがちな言葉を慎んで、心を養い、暴飲暴食を避けて身を養うことであり、すなわち君子の道である。

頤は口の意となり、養うの意味もある。貞しければ吉である。自分は何を養うのが目的かを見定めて、自らその目的を遂げるための口実(口を実たす養分、すなわち方法)を追求すべきである。(そういう態度であれば吉)

この卦が出た時は、歯とか胃腸とか、消化器を中心にして、健康に注意すべき時期です。また、しゃべりすぎて失敗したり、発言すべきときに、言い足りなかったりして、誤解を招きやすい時期です。「口は禍の元」というように、自分のはく言葉に注意することです。

非常に気のあった同士なら、がっちりと組んで成果を挙げることもできます。

結婚の場合は、食べていくだけなら何とかなるでしょう。

老人ならば、入れ歯で物が噛めない状態で、生活に窮している形です。

「小筌」・・・この卦は物を養う意味を示す。物事は成就するが、時期尚早でもあり、軽率な行動はよくない。またこの卦は、上下の二つの陽(―)が四つの陰(‐‐)を包んでおり、すべて物を包む意味がある。そこで人も思いを包んで忍ぶことになる。

・希望・・・かなう。性急な行動は良くない。特に仕事の上での口論に慎むこと。
・恋愛・・・気持ちはなかなか通じ合わない。
・金銭・・・間違いがあってやや遅くなるが、後にはととのう。
・健康・・・病気の兆しがある。

【大過】䷛ 一沢風大過」（書負った重荷　一巽下兌上」（風が過ぎたあと）

大過、棟撓。利有攸往。亨。

大過は、棟撓む。往く攸有に利ろし。亨る。

彖に曰く、大過は、大なる者の過ぎるなり。棟撓むとは、本末弱きなり。剛過ぎたれども中、巽いて説び行く。往くところあるに利ろしく、すなわち亨る。大過の時大なるかな。

大過は両端の陰が、間の四つの陽に耐えられず、中だるみしているさま、である。

象に曰く、沢の木を滅すは大過なり。君子もって独立して懼れず、世を遯れて悶うることなし。

大過の大は陽、この卦の四陽が中央にあって勢い盛んなので大過という。従って上下の二陰はその重さに堪えかねる有様なので、これをたとえれば棟が撓む象である。とはいえ四陽のうち二と五は陽剛中正であり、卦徳をもって言えば巽順で説び行く徳行を有するから、進んで事を行うによろしく亨ること、通過成功を期待し得る。

「枯楊生稊、（老夫得其女妻、無不利）。」　枯楊稊を生ず。

枯老の陽柳に春が帰って来て、また新しい稊（孫生え）ができた。つまり、老年の男がまた新妻を迎えて子孫をつくった。（老夫、其の女妻を得たり、利ろしからずということ無し）

大いに過ぎる（大過）ということは、責任過重という意味となる。この卦があなたの運勢に出たなら、現在、あなたは非常な危険に直面している。しかし、危険だからといって、すべての行動を中止するわけには行きません。強い意志力をもって、其の苦難を征服した後の喜びはまた大きいものです。

この卦の形から見ると、頭が二つで胴体が一つにからみあった蛇の状態です。「大過」のときは、すべて悪いときが過ぎ去っていくまで待ちましょう。

「枯楊華を生ず、老婦其の士夫を得たり。咎も無く、誉も無し」　（大過九五）

老木の楊柳に花が咲いた。つまり、老女がまた新しい夫を迎えた。別に悪くもないし、褒めたこともない。そのために子孫が生まれ、家が栄えることもないのだから。

「小筌」・・・　過とは、物の限度を超えること。過ぎたるは猶お及ばざるがごとしで、万事ととのい難い何事も落ち着かず、思慮も定まらない。総じて物事は不順。また、初めは苦労があり、後に栄える。

- 希望・・・常に満たされない思いをするが、小さな願い事はかなう。
- 恋愛・・・よろしくない。
- 金銭・・・入るようで入らない。自分の思いを強く押し通し、後に大いに難渋する。
- 健康・・・婦人病に注意。

【習坎】☵☵ 「坎為水」（不吉な黒い流れ） 「坎下坎上」（重なる危険の中。四大難卦）

習坎、有孚。維心亨。行有尚。

習坎は、孚あり。維れ心亨る。行けば尚ばるることあり。

彖に曰く、習坎は、重険なり。水は流れて盈たず、険を行きてその信を失わざるなり。維れ心亨るとは、すなわち剛中なるをもってなり。行けば尚ばるることありとは、往きて功あるなり。天険は升るべからざるなり。地険は山川丘陵なり。王公は険を設けて、もってその国を守る。険の時用大なる哉。

象に曰く、水洊りに至るは習坎なり。君子もって徳行を常にし、教事を習う。

習坎の習は重、坎は険・陥落とし穴の意、重なる険難の中に陥る象。九二・九五の二陽がともに陰中に陥っている象でもあるが、そのような境遇にあっても心に誠信を失わなければ、やがてその心は亨通することを得る。思い切って行き事に当れば成功して人に尚ばれることがあるであろう。

「象伝」水坎がしきりに流れ来る象が「習坎」である。君子はその連続不休なのにのっとって、徳行を常にし、教養の事をくりかえして習熟するようにつとめる。そうすれば、やがて心は通い、その行動は人にほめられるであろう。

習は重、坎はおとし穴・険難。重なる険難の中にあって、なお誠意を失わない。そうであれば、やがて心は通い、其の行動は人にほめられるであろう。

黒々とした水が渦を巻いて流れている。この卦は上も水、下も水です。そこの知れないような無気味さをたたえながら流れているときです。人生では、転落、流転のときです。これは、そのような意味をもった卦です。悪い卦です。悩みの卦です。これも「易経」の中の四大難卦の一つです。

この卦が出た時は、あなたは四苦八苦の状態に置かれている時なのです。水が二つも重なっているのですから、激流に押し流されたり、渦に巻き込まれたりするときです。だから、こんな時にはよほど不動の信念をもって、その激流を泳ぎ渡る覚悟をしなければなりません。若し溺れたときは不運とあきらめ下さい。こんな時のあなたは、何者にも恐れない強い信念をもって、ただ一筋の真実の中に生きる以外にないのです。もし、何事もない平穏無事な人にこの卦が出た時は、詐欺さき盗難を警戒してください。怪我のおそれもりますし、愛情面でも一生回復ができないような傷を負うことが多いのです。

この卦を得てよいのは、学問、研究、宗教など、精神面に関することだけです。

「小筌」・・・この卦は難儀・困窮の卦。遠く住所を離れて吉。物事が常に転変する。また、次第に進むことを示す。

- 希望・・・かない難い。下くだるによろしく上がるによくない。物事は繰り返し隔へだてられるが、人に順い広く親しめばよろしい。
- 恋愛・・・老夫と老婦の婚姻は吉。そのほかの婚礼は見合いにて可。
- 金銭・・・盗難に注意。
- 健康・・・常に憂いをいだいて、心中おだやかでない。病難に注意。

【離】䷝ 「離為火」（降りそそく太陽）　「離下離上」（順を尽くして物事にみな成功する。かたち）

離、利貞。亨。畜牝牛吉。

離は、貞しきに利ろし。亨る。牝牛を畜えば吉なり。

彖に曰く、離は麗なり。日月は天に麗き、百穀草木は土に麗く。重明もって正に麗けば、すなわち天下を化成す。柔、中正に麗く、故に亨る。ここをもって牝牛を畜えば吉なるなり。

象に曰く、明両たび作るは離なり。大人もって明を継ぎ、四方を照らす。

離は附く（麗）の意。一陰が二陽の間に附麗する卦象に取る。人が人に附き事に就くにあたっては、貞正なのがよろしく、貞正であれば通達を得る。牝牛のような従順の徳を養い守れば吉である。

「彖伝」離とは麗くことである。日月は天に麗き、百穀草木は地に麗く。これが正しい道理である。明（離）を重ねて正道に麗く。君臣上下が共に明らかで正しきにつけば、天下ことごとく感化育成されるであろう。柔（六二）が中正の位に麗く、だから亨るのである。従って牝牛のように従順の徳を養い守れば吉である。

「象伝」明（離）がふたたびおこる、上下卦ともに明であるのが離である。明につぐに明をもってするこの卦象にのっとり、大人は代々明徳を継承し、その明徳をもって四方の国々に君臨する。

人に附き交わり、事に就き従うには、正しさがあれば宜しく、通る。おとなしい牝牛を養うように、自ら従順の徳を養えば吉。

この卦には明るいとか、太陽とかいう意味があります。また、この卦は二つの太陽を意味します。すなわち「火」が二つ並んでいます。それは一つの太陽が沈んだとき、すぐ、次の太陽が現れると考えればよい。

この卦が出た時は、どうすれば良いでしょうか。

太陽は天に輝いてこそ価値がある。同様にあなたも、あなた自身が従属しているところ、依存している立場によって、自分の能力を十分に発揮することができるのである。そういう意味で、この卦は素晴らしい卦です。そして火を取り扱うような慎重さが必要です。気持ちの点では、火が燃え広がるように移り変わりの激しい時です。一日に何度も気分が変わり、目的がつかみにくく、落ち着かない時です。

また火と火を重ねると「炎」という字になります。恋愛、結婚では、おたがい熱烈に燃え上がっている形ですが、同じ性質のために、足踏みしている状態です。

「小筌」・・・この卦は、離別の卦。親子・兄弟・親友などに別れ遠ざかる。学者や宗教家などには吉。大いに人に用いられ名をあげる。ただ、一般の人には大抵よろしくない。住所を変えるほどの辛苦がある。離にはまた、附（つくの意味もある。初め附いていたものが、やがて離別する。外面は盛んでも内面は衰える。

- 希望・・・初めは凶、後には吉。
- 恋愛・・・成立しない。成立しても、後に問題が生じる。
- 金銭・・・損失がある。
- 健康・・・病気に注意。心中に憂いがある。

【咸】䷞ 「沢山咸」（新婚の喜び）　「艮下兌上」（陰陽が互いに感じ合うかたち）

咸、亨。利貞。取女吉。

咸は、亨る。貞しきに利ろし。女を取るは吉なり。

彖に曰く、咸は感なり。柔上りて剛下り、二気感心してもって相い与するなり。止まりて説び、男は女に下る。ここをもって亨り、貞しきに利ろしく、女を取るは吉なるなり。天地感じて万物化成し、聖人人心を感ぜしめて、天下和平なり。その感ずるところを観て、天地万物の情見るべし。

象に曰く、山上に沢あるは咸なり。君子もって虚にして人に受く。

咸は感、少男(艮=山)が少女(兌=沢)に下り相感ずる卦象に取る。感応すればおのずから亨通するが、たがいに貞正であることがよろしい。このようであれば妻をめとるにも吉である。

「彖伝」咸とは感である。柔(兌)が上り剛(艮)が下って、陰陽の気が感応し相い和合するのである。止まって(艮)説び(兌)、男(艮)が女(兌)に下る。なればこそ、亨り、貞しきに利ろしく、女を取るに吉なのである。

「象伝」山(艮)の上に沢(兌)があるのが咸である。山の高きをもって沢の卑(ひくきにくだるこの卦象にのっとって、君子はおのれを空しくし人を受け容れることにつとめる。

〔君子以〕虚受人　虚にして人を受く。

虚心坦懐に人のことば、人の行動を受け止める。私心があれば、決して人の教えも戒めも、すなおに耳に入るものではない。

〔貞吉悔亡〕憧憧往来、朋従爾思　憧憧として往来すれば、朋のみ爾の思いに従う。（咸九四）

私心だけを基(もと)として他人に接していれば、きみの朋友だけが君の考えに従うことになる。つまり、公平で正しく広い交際はできない。「憧憧」は私心にみち落ち着きなく、人と行き来する姿。「朋」は朋党。（貞しき時は吉なり、悔い亡ぶ）

「咸」とは物事を敏感に感ずることである。「咸」の字の下に「心」を添えると「感」になる。感情、感覚、感謝、感傷、感涙、感泣などには、人の心の動きが敏感に表現されている。

運勢面では、感受性を何より尊ぶべき時である。理屈や相談に時間を掛けるときではなく、直感的、感情的に行動すべき時です。そうすれば事も打てば響くようになります。

咸とは、感応することで、万物は感応しうるから、この卦を得たら、願い事は亨(とお)る。ただ動機が貞(ただ)しければである。結婚には吉、

「小筌」・・・この卦は感応するということを意味するのであるから、この卦を得たら、物事がすみやかに整うのである。思いもかけない良いことがある。

- 希望・・・他人から親切に世話され、願い事がかなう。
- 恋愛・・・結婚・縁談は大吉。ただし、色事の悩みがある。
- 金銭・・・儲けごとは成功する。他人をあいだに立てれば、より早く成る。
- 健康・・・病人には凶である。病気にかかると危ない。

【恒】䷟ 「雷風恒」 ☳☴

恒、亨。无咎。利貞。利有攸往。

恒は、亨る。咎なし。貞しきに利ろし。往くところあるによろし。

彖に曰く、恒は久なり、剛上って柔下る。雷風相い与し、巽いて動き、剛柔みな応ずるは恒なり。恒は亨る、咎なし、貞しきに利ろしとは、その道に久しければなり。天地の道は、恒久にして已まざるなり。往くところあるに利ろしとは、終われば始めあるなり。日月は天を得て能く久しく照らし、四時は変化して能く久しく成し、聖人はその道に久しくして天下化成す。その恒とするところを観て天地万物の情見るべし。

象に曰く、雷風は恒なり。君子もって立ちて方を易えず。

恒は恒久不変、常あるの意。長男(震)が長女(巽)の上に居り、男尊女卑(男が外=外卦にあって働き、女が内=内卦にあって家を治める意を含む)が夫婦の常道なることに取る。およそこの恒久不変の道を失わなければ、亨通して咎なく貞正をとりまもるのがよいことであり、進んで事をなすのがよろしい。

「象伝」雷(震)と風(巽)のあるのが恒である。疾風迅雷は天地の大変であるが、しかも常理を失わない。君子もこれにのっとって、いかなる大変に際し千苦万難に遭遇しても、独立してその常とする方正の道を変じない。

〔彖曰〕。天地之道、恒久而不已也。

彖に曰く、天地の道は、恒久にして已まず。

天地の道というものは、永遠に続いてやまないものである。春が過ぎれば夏、夏が過ぎれば秋、しかもそれは昔から今日まで少しも変わっていない。為政者の道もまた、この天地の道のように恒久の道理に従うべきである。

〔君子以〕立不易方

立って方を易えず。

世の中に立って、どんな事変に遭遇しても決して普段の節義、方向をかえない。それが君子の節操である。

「恒」とは、久しいこと、かわらないこと。この恒(つね)を守っていけば、願いは通る。咎(災難など)はない(害とはいかぬがわるくない)。正しくしていればよい。そうすれば進んでいっても良い。

「恒」は「いつものとおり」「あたりまえ」と言うことである。「恒」は、つねを保つということです。これは、コマが激しく回転しているために、中心がしっかりして、立っていることが出切るな姿です。だから「恒」は動中静ありといった運である。

「小筌」・・・この卦には、物ごとが生育するという意味がある。また、物がなくなってしまうの意味もある。だから、集まると思えば散り、散ると思えば集まるという、行方が定まらないことになる。

- 希望・・・願い事はかなわない。新しくものごとを始めるのもよくない。
- 恋愛・・・親しい人との別れがある。待ち人きたる。結婚するには吉。
- 金銭・・・出費の兆しがある。儲もうけごとはうまくゆかない。
- 健康・・・病気にかかると危険な状態になる。

【遯】䷠「天山遯」（さびれゆく町）　「艮下乾上」（君子は身を退けて名望を得、小人は正を守って利益を得るかたち）

遯、亨。小利貞。

遯は、亨る。小は貞なるに利ろし。

彖に曰く、遯は亨るとは、遯れて亨るなり。剛、位に当たて応じ、時とともに行うなり。小は貞なるに利ろしとは、侵くにして長ずればなり。遯の時義、大いなる哉。

象に曰く、天の下に山あるは遯なり。君子もって小人を遠ざけ、悪まずして厳しくす。

遯は退避、のがれ退くの意。二陰ようやく長じ、陽が退避に向かわんとする卦象に取る。月に当てれば旧暦六月の卦、人事をもって言えば、小人ようやく長じて君子の韜晦（とうかい）すべき時。韜晦してその志操を全うし得ればやがて亨通する。もとより大いに事を為すべき時ではないが、小事に貞正を持して天下のために努力をつくすべき時である。

〔韜晦＝才知・学問などを包み隠して、外にあらわさないこと。韜＝剣をいれる袋〕

「彖伝」遯は亨るとは、世を遯れることによって、やがて亨通を得ることである。剛（九五）が中正の位に当り、しかも六二と応じているから、その時々に従って正しく行動し得るのである。小は貞なるによろしいというのは、二陰（小人）の勢いがようやく伸長しつつある時だからである。

「象伝」天（乾）の下に山（艮）があるのが遯である。天は高く上に在って、山はいくら高くてもこれに及び得ない。君子はこの卦にのっとって、みずから清高の態度を持すことにより小人を遠ざけ、いたずらにこれを憎悪はしないけれど、己を守り厳しくこれに接する。

「遯」は、のがれるという意味である。運が衰えているとき、または立場に恵まれていないときには、どんな正論を説いても通らない。「遯竄」（とんざん）という言葉があります。逃げ隠れるということです。この卦の時には、三十六計逃げるにしかずで、一時退いて次の機会を待つべきです。

一つの事業や家庭でも、衰退の気運が現れているときです。すべてのことが、自分から逃げ去ろうとするのも時の勢いですから、どうにも仕方のない時です。見栄や外聞を気にしている場合ではありません。

「遯は退避すれば通る。小さな正しいことにはよい。（別解では、この卦をえた人が君子ならば、逃れると良い。小人であれば、正しい行いであれば良い、となる。）

「遯」は逃れることで道が開けると解釈したい。

「小筌」・・・この遯の字は、退くと読む。すまいに苦労が多い。思慮分別が定まらず、いろいろと、間違いが起こる、という卦である。

- 希望・・・頼みごとは邪魔するものが出てきてかなわない。物ごとはうまく行きそうに見えながら、すべて失敗するか、難儀することが起こる。
- 恋愛・・・うまくゆかない。たとえ、うまくいっても、それは凶となる。
- 金銭・・・妨げがある。
- 健康・・・病気は、一時は快方に向かうが、再び悪化する。

【大壯】 ═══ 「雷天大壯」（いさみたる人）　「乾下震上」（雷が天上にあって陽が盛んであるかたち）

大壯、利貞。

大壯は、貞しきに利ろし。

象に曰く、大壯は、大なる者壯んなるなり。剛にしてもって動く。故に壯んなり。大壯は貞しきに利ろしとは、大なる者正しきなり。正大にして天地の情見るべし。

象に曰く、雷の天上に在るは大壯なり。君子もって礼にあらざれば履まず。

大壯は大なる者が壯んの意。大陽が長じてなかばをすぎ壯んなる卦象に取る。月に当てれば二月の卦。壯んな時はつい調子にのりすぎる嫌いがあるから、貞正にするのがよろしい。

「彖伝」大壯とは、大なる者陽が壯んなことである。剛(乾)で動く(震)のであるから、壯んである。大壯は貞しきに利ろしというのは、大なる者は正しくあれということである。人が正大であれば天地の正大な実情をも見ることを得るであろう。

「象伝」雷(震)が天(乾)の上に在るのが大壯である。雷が天上に鳴るのは陽気いまや壯んの象であり、壯んな時にはかえって傲慢(ごうまん)に陥りやすいから、君子はこれを警戒してかならず礼にはずれた行いをしないように心がける。

〔雷在天上、大壯。君子以〕非礼弗履。

礼を外れたことは行わない。勢い盛んなとき、人は暴に陥りやすい。自戒すること。

羝羊触藩、羸(くるしむ)其角。

牡の羊が藩に角をつっこむと、その角のために進むことも退くこともできないで苦しむ。つまらない人物は、勢いをえると前後を忘れ、進を知って退くを知らない行動をする。

「羝羊」は牡の羊。「小人は壯を用い、君子は罔(あみ)を用う。貞しけれども厲うし」

「大壯」とは、大きく盛んという意味。このようにすべてのものが、時の勢いにつれて盛んになると、急ブレーキがかけにくくなる。強い運のときほど、とかく進みすぎる傾向がありますから、ほどよく手綱を引き締める必要があるときです。「壯麗」「壯挙」「壯図」はすべて大掛かりな意味を持っています。勢いの強い陽が進んできて、すべての陰が消されていく形ですから、血気にはやり、才人は才におぼれ、金持ちは金におぼれるから要注意です。　晴れた日のから雷のようです。

「小筌」・・・この卦は、陽が盛んに長ずることを意味する。大吉のように見えながら、実はそうではない。だから、万事に就き過ちが起こり、苦労する。もしくは、住所を離れ、心配事がある。

- 希望・・・万事に就き、初めはうまく行かないが、後には自然とうまくゆく。好い事がありそうに見えても、なかなかうまく行かない。
- 恋愛・・・仲たがいの兆しあり。
- 金銭・・・悩み事が絶えない。また、出費の兆しあり。
- 健康・・・病気にかかりやすい。

【晋】䷢「火地晋」（希望に燃える明るい朝）　「坤下離上」（地上に明るさの出るかたち）

晋、康侯用錫馬蕃庶、晝日三接。

晋は、康侯もって馬を錫わること蕃庶にして、昼日に三たび接せられる。

象に曰く、晋は、進なり。明地上に出で、順にして大明に麗き、柔進みて上行す。ここをもって康侯馬を錫わること蕃庶にして、昼日に三たび接せらるるなり。

象に曰く、明地上に出づるは晋なり。君子もってみずから明徳を昭かにす。

晋は上進・進むの意、火の地上に進む卦象に取る。人事にたとえれば、康侯(自分の領国を康んじた諸侯)が進んで天子に謁し、その功績をめでられて蕃庶(繁殖すること)して数多くの馬を賜り、一日のうちに三回も接見を許されるほどの寵遇を得るような出世ぶりである。

〔彖伝〕晋は進むということである。明(離)が地(坤)の上に出て、順(坤)にして大明に麗き(離)、柔(六五)が進んで上位に行く象である。さればこそ康侯が数多くの馬を錫わり、一日のうちに三たびも接見を許される。

〔象伝〕明(離)が地(坤)の上に進み出るのが晋である。明(太陽)が地上に出れば、あたりをくまなく照らす。君子はこの卦象にのっとって、みずからの明徳を明らかにして人に仰ぎ見られるようにつとめる。

晋とは進むの意味で。康侯とは、自分の国をうまく治めている侯(殿様)。蕃庶とは、多いさま。この卦を得たならば、上位のものから寵愛を受け、出世できる。

この卦は下に地があり、上に火があるから希望に燃える明るい朝を迎えることになります。地平線上に太陽が出ているのですから、商売、事業の面でも成績がこれから上がるときになっています。凡て良い方に向かって変化しつつあるのですから、積極的に進むべきです。勿論、結婚にも良い卦です。

ただ、この卦の中に含まれている悪い面を見ますと、会社や団体内での嫉妬(しっと)も激しいと思う。

如鼫鼠、貞厲。

鼫鼠の如きは、貞なれども厲うし。(晋九四)

ムササビのような進退をしていると、たとえその行いが正しくとも、危険にさらされることが多い。欲深く地位に満足せず、しかも人を恐れるような人は、行いが正しくとも、いるべき地位が間違っていては、安全でありえない。「鼫鼠」はムササビで、欲深く臆病な動物である。「貞」は正。

「小筌」・・・この卦は、朝日の昇る形があり、だんだんと立身出世する意味である。人から親しまれ、上位の人から目をかけられる。

- 希望・・・苦しみから解放され、万事につき好転する。
- 恋愛・・・ラブレターの返事あり。恋人あらわれる。
- 金銭・・・もうけごとは、うまくゆく。
- 健康・・・病人は危険である。

【明夷】三三「地火明夷」（地下に沈んだ太陽）

る意で、賢者が志を遂げることができず、人の讒言（ざんげん）やそしりを憂い恐れるかたち。

明夷、利艱貞。

明夷は、艱しみて貞なるに利ろし。

彖に曰く、明の地中に入るは明夷なり。内文明にして外従順、もって大難を蒙る。文王（周）これをもってせり。艱しみて貞なるに利ろしとは、その明を晦ますなり。内難にして能くその志を正しくす。箕子これをもってせり。

象に曰く、明の地中に入るは明夷なり。君子もって衆に莅み、晦を用いてしかも明なり。

明夷は明るいものが夷れ傷つくの意。日が地下に入り地上昏冥なる卦象に取る。人事をもって言えば、暗愚の君に蔽われて賢者の明徳が夷れ傷つく象。故に君子たる者はかかる時期に際会したならば、艱難を耐え忍んで貞正をとり保つがよろしい。

「象伝」明（離）が地（坤）の中に入るのが明夷である。内は文明（離）で外は従順（坤）、そのことのためにかえって大難を蒙る。

「象伝」明（離）が地（坤）の中に入るのが明夷である。明徳を晦蔵（隠すこと）するこの卦象にのっとって、君子は民衆に臨み、その智を晦ましながらも心の明は失わない。

明夷利艱貞。

明夷は艱貞に利なり。

暗い無道の時世に処するには、いかなる困難にあっても、正しさを失わない心掛けが必要である。

「明夷」は、「明、夷る」と読み、暗黒の世の中。「艱貞」は、困難な間に処してなお正しきを行うこと。

「明夷」とは、明るさを破ることです。地下に太陽が没して、月もないくらい夜です。足元が見定めがたい時に、行動するのは危険ですから、どんなに急ぐことがあっても、夜の明けるまで待つ気持ちのゆとりが大切です。勿論、運は弱い時です。太陽の当らないところでは、あなたの正しい姿を相手にわからせるのは無理なのです。

才能があっても、それを発揮すれば、人にねたまれることになります。あなたの持っている才能、実力、物質に対する周囲の嫉妬が激しい時なのです。

「小筌」・・・この卦は、太陽が地下に入ってしまい、はっきりしない、という意味である。従って災難がふりかかってくる。万事に就き慎むべきである。しかし、初めは苦しむが、最後には立身出世する、という卦である。

- 希望・・・努力してもうまく行かない。時を待つべきである。
- 恋愛・・・女難がある。
- 金銭・・・邪魔が入り、うまく行かない。
- 健康・・・病気にかかると危ない。

【家人】䷤「風火家人」（火を守る女　「離下巽上」（一家の内外で中正を得ているさま）

家人、利女貞。

家人は、女の貞しきに利ろし。

女正位乎内、男正位乎外。　正家而天下定矣。

女は位を内に正しくし、男は位を外に正しくす。　家を正しくして天下定まる。

彖に曰く、家人は、女、位を内に正し、男、位を外に正す。男女正しきは、天地の大義なり。家人に厳君ありとは、父母の謂いなり。父は父たり、子は子たり、兄は兄たり、弟は弟たり、夫は夫たり、婦は婦たり、而して家道正し。家を正しくして天下定まる。

象に曰く、風の火より出づるは家人なり。君子もって言には物あり、行いには恒あり。

家人とは一家の人の意。六二の女と九五の男とが、それぞれ正位に居て家のよく治まる象に取る。殊に家内に在っては、女の貞正なのをよろしとする。

「彖伝」家人は、女(六二)が位を内(内卦、下卦)に正しくし、男(九五)が位を外(外卦、上卦)に正しくする象である。男女それぞれ正しい位に在るのは、天地陰陽の大義にのっとるものである。また家人に厳君ありということばは、家内における父母を言ったものである。父は父らしく、子は子らしく、兄は兄らしく、弟は弟らしく、夫(おっと)は夫らしく、婦(つま)は婦らしくあってこそ、家道は正しいと言えるのであり、家を正しくしてこそ、天下もきちんと治まるのである。

「象伝」風(巽)が火(離)から出るのが家人である。火が燃えて風が起こるように、すべての物事は内に本づいて外に及ぶ。故に君子はこの道理にのっとって、言葉を出すには言うべき事実をふんまえ、おこないには一定のきまりがあるように心がける。

「家人」とは家の人々ということです。外で働いたり、戦ったりしてきた男性を、家庭で暖かく迎えるのは女性の役です。火が暖かく明るいように、女性は男性をなぐさめ、憩いの場を与えるときです。昔の生活では、一番大切だった火種を絶やさずに守っている女の姿です。そういうわけで、これは、非常に女性的で家庭的な卦です。

人間の性格から見ると、女性は女らしくしてよいのですが、男性が女らしくしては、これはちょっと困りものです。若し、あなたが男性ならば女性的気質が過剰の男性でしょう。だから急速な事業の発展は望めないときです。女性には、女らしい良い卦です。

女の貞(ただ)しきに利(よろ)しとは、一家を内から正しくしようとすること。内が正しければ、外も正しくないということはない。この卦を得たならば、一家の主婦に正しい道を守らせれば、良いことがある。

「小筌」・・・この卦は、家内安全を示す。万事にわたって、女性を表に立ててゆけば、吉となる。

- 希望・・・内助の功がある。出世・名声への望みが出てくる。しかし、願い事は、なかなかかなわない。
- 恋愛・・・若い人には悩み事が出てくる。恋愛中の人には、吉である。恋人あらわれず。
- 金銭・・・よくない。出費の兆しがある。
- 健康・・・病気が重くなれば危ない。

【睽】䷥ 二火沢睽（相そむくとだけ） 二女「離」（物事がうまく行かない）

睽、小事吉。

睽は、小事に吉なり。

彖に曰く、睽は火動きて上り、沢動きて下る。二女同居して、その志は行いを同じくせず。説びて明に麗き、柔進みて上行し、中を得て剛に応ず。ここをもって小事に吉なるなり。天地は睽けどもその事同じきなり。男女は睽けどもその志通ずるなり。万事は睽けどもその事類するなり。睽の時用、大いなる哉。

象に曰く、上に火あり下に沢あるは睽なり。君子もって同じくして異なる。睽はそむき違うの意。離火は炎上し兌沢は潤下して、上下そむきあう卦象に取る。また離の中女兌の少女と、二女同居して、少女は寵愛せられて内に居り、中女が疎んじられて外に居り、その意志感情が離れて反目する。家人の卦の反対。しかし小さい事ならばうまくゆく。

「彖伝」睽は火(離)が動いてのぼり、沢(兌)が動いてくだる象。

「象伝」上に火(離)があり下に沢(兌)のあるのが睽である。火沢の睽きあうこの卦象にのっとって、君子はその志す目的は同じでも、それぞれの行動はかならずしも同じではないのである。

睽は、異なる、相そむくということである。この卦は火と沢の組み合わせでできている。火は燃え上がり、沢の水は下で落ち着いています。しかし、火も水も相異なり、相そむく性質のものでありながら、われわれの日常生活に欠くべからざるものです。これを人間で見ますと、火のようなはでな性質と、水のような静かさを持っている性質とで出来た卦です。〔睽は、左右の眼がそむくように一致しないことを言う〕

『中国に伝わる「兵法の三十六計」にも伝わっている【上火下沢】は「睽卦」ことである。』

焔は上に伸び、沢の水は下にそそぐ。志は違っても、しばらくは連合できるという意味である。

この易の睽卦の言葉。「象に曰く、上火下沢は、睽なり。君子は同じくして而も異なるを以う」

「睽は、乖く(離れる)なり。火は上ならんと欲し、沢は下ならんと欲す。なお人の同に居りて而も志をことにするがごとし」

「小筌」・・・この卦は、人の心というものが互いにそむきあい、うまくことが運ばないことを意味する。嫉妬されたりして心に悩みが絶えない。詐欺にあう可能性がある。女性が占ってこの卦を得たら大凶である。先生。学生などには、時として大吉となることがある。

- 希望・・・小事には吉。小さな悦びごとあり。
- 恋愛・・・女難がある。
- 金銭・・・思わぬ出費がある。
- 健康・・・病気は良くなる。

【蹇】䷦「水山蹇」（寒さにこごえる足）　「艮下坎上」（険しさに行き悩むかたち）

蹇、利西南。不利東北。利見大人。貞吉。

蹇は、西南に利ろし。東北に利ろしからず。大人を見るに利ろし。貞しければ吉なり。

蹇とは、険阻の義である。そこから、困難の意味になる。この卦を得たならば、西南の方向がよいが、寒い東北の方角は良くない。困難な時にあたれば、必ず賢者があらわれ、その困難を助けてくれる。また、つねに身を正しくしていれば、吉を得る。

象に曰く、山上に水あるは蹇なり。君子もって身を反りて徳を修む。

蹇は行き悩んで進まぬことの意。坎険を見て止まる卦徳に取る。行き悩む蹇難を切り抜けるには、有徳の大人に出会ってその助けを得るがよろしく、その上で貞正を固守すれば吉なり。

「彖伝」蹇とは難のことである。つまり険(坎)が前にあるので悩むのである。険(坎)を見て止まる(艮)ということは、知恵の優れた行いではないか。

「象伝」山(艮)の上に水(坎)のあるのが蹇である。高い山は険しく深い水は渡り難いこの卦象にのっとり、君子は蹇難に遭えば、ひたすらにわが身を反省し道徳を修め養ってこれに対処することを心掛ける。　四大難卦の一つで動きのとれない悪い卦です。「蹇」は、「足なやむ」（あしなえということです。寒さのために足がかじかんで、十分に歩くことができない状態です。こんな時には険しい道を避けて、平坦な歩きやすい道を選び、力強い人の助けがほしいときです。

〔蹇、難也。険在前也〕。見険而能止、知矣哉。

前に危険があると見たら、行くことを思いとどまる。険を見て能く止まるは、知なるかな。その態度が人間の知というべきものである。

〔象曰、山上有水蹇。君子以〕反身修徳。

身を反りて徳を修む。

困難に出会ったら、まず第一に我が身にその素因があるかないかということを反省して、更に自分の道徳を修めていく。それが事を処する道であり、ふりかかる困難を避ける道である。

王臣蹇蹇、匪躬之故

王臣蹇蹇たり。躬の故に匪ず。　（蹇六二）

臣たるものは、艱難にたゆむことなく、身命をかえりみず、一生懸命に主君に仕え、努力して事を処していく。それは、決して自分一人の身のためにするのではない。

「小筌」・・・この卦は、竜の珠をなくしてしまうという意味。財産をなくし、貧しくなり、苦労し、悩みははなはだしいという卦です。

- 希望・・・かないがたい。しかし、後によくなる。
- 恋愛・・・うまくゆかない。恋人も見つからない。
- 金銭・・・ついていない。
- 健康・・・病気は重くなる。腰から下の病気に注意。

解、利西南。无所往、其来復吉。有攸往、夙吉。

解は、西南に利ろし。往く所なければ、それ来り復って吉なり。往くところり、夙くするときは吉なり。

彖に曰く、解は、険にしてもって動く。動きて険より免るるは解なり。解は西南に利ろしとは、往きて衆を得るなり。それ復って吉なりとは、すなわち中を得ればなり。

往くところあり、夙くするときは吉なりとは、往きて功あるなり。天地解けて雷雨作り、雷雨作って百果草木みな甲(坼)す。解の時、大なる哉。

象に曰く、雷雨作るは解なり。君子もって過を赦し罪を宥む。

解とは、解散すること。患難を解く。夙とは、早い。この卦を得たならば、西南の方角がよい。西南の方角に行く必要がなければ、もとの場所にもどってくれば吉である。行く必要があれば、早くすれば吉である。

「象伝」雷(震)雨(坎)の起こるのが解である。天地の気が解散して雷雨の起こるこの卦象にのっとって、君子は罪過あるものを赦し宥めて、万民の患難を解くことにつとめる。

〔雷雨作解。君子以〕赦過、宥罪。

過ちを赦し、罪を宥す。

過失は赦してやる。過失でなくみずから招いた罪の者でもなるべく寛大に扱う。それが人民の難を解き、世を平らかにする一つの方法だ。「宥」は寛大にする意。

負且乗、致寇至。貞吝。

負いて且つ乗れば、寇の至るを致す。貞しけれども吝なり。（解六三）

身分の低い者が多くの荷物をしょって、不相応に車などに乗っていくと、必ずこれを襲う賊をまねくものだ。正しいことをしても、非難を受ける。車に乗るべき身分でないものが、貴い位置を与えられるとか、あるいは身分以上の位を盗んでいると、必ず人から憎まれ、そねまれ、災いがいたる。

冬の厳しい寒さから開放されて暖かい春が来た時です。今まで堅く凍っていた水面も徐々に解け始めました。船のとも綱を解いて、希望と目的のために積極的に活動を始めるときです。「解」とはこういう状態を言うので、難問氷解とはこれから出た言葉です。

「解」の字を分解してみると、「力」で「牛の角」を裂くということです。分割です。解釈、解決、開放、解散、などの言葉の意味が理解できると思います。この卦が出たら、即時即決が良い時でしょう。

「小筌」・・・この卦は、魚が網を逃れ出るという意味であり、悩みが解消すること。だから、人も困難な状態を脱することを示す卦である。しかし、身を慎まないと、再び災いがあることを心得るべきである。

・希望・・・万事に就き、早くすればよい。遅くなれば、うまくゆかない。
・恋愛・・・かなう。
・金銭・・・思わぬ失敗のために、散財のの兆しがある。
・健康・・・こじらせると、よくない。

【損】䷨「山沢損」（愛のこもった贈り物）　「兌下艮上」（下を減らし上に増し加えるかたち）

損、有孚、元吉无咎。可貞。利有攸往。曷之用。二簋可用享。

損は、孚あれば、元吉にして咎なし。貞しくすべし。往くところあるに利し。曷をかこれ用いん。二簋用て享るべし。

損とは、減損、へらすこと。孚とは、誠意。簋は、竹皿。享は、神を祭ること。ものごとを節約するには、誠意をもってすれば、大いに善で吉であり、咎がない。身を正しく慎んでいれば、行なってもよい。それは、たとえば、お供えものをへらす時に、それが二皿であっても誠意があれば、それでよいということ。

〔攸＝所の意〕〔二簋は二枚の竹皿〕

象に曰く、山下に沢あるは損なり。君子もって忿りを懲らし欲を窒ぐ。

「象伝」山(艮)の下に沢(兌)があるのが損である。この卦象にのっとって、君子のまさに損すべきものは忿怒と情欲、故に君子はその忿怒をおさえ情欲をふさぐことを心掛ける。

損、損下益上〔其道上行〕　損は下を損して上を益す。

下を減らして上を増していく。これが真の損である。たとえば、土を積むばあい、土台になる下の土を掘って其の土を上に乗せ掛けると必ず崩壊する。同様に上の人主がしたの民から過分の租税を取り、其の分を上の自分の用に用いると、結局は自分の地位の転覆という破綻を招くことになる。

なお、「其の道上行す」とは前の道理、すなわち人民の損が上に及ぶことをいう。

損益盈虚、與時偕行　損益盈虚、時と偕に行なう。

損すべきものは損じ、増すべきものは益す。「盈たす」、すなわち満たすべきは満たし、虚しくすべきは虚しくする。これらのことは、すべて時期を見、時期に適して行えばまちがいない。

懲忿窒欲　忿りを懲らし欲を窒ぐ。

心に生じた怒を止め、欲心をとざす。怒と欲が過ちを犯し、損を招く根本原因だからである。

「懲忿」は怒を静めること。「窒欲」は欲心を閉じ込めること。

「損」は損得の損ですが、無駄な損失とか損害という意味ではありません。失うことではなく、与えることです。他人のために自分の物を与えるのです。損が、ただのマイナスではありません。必ず返ってくる損です。仏教やイスラム教で言う「喜捨」(きしゃ)です。この卦が出た時は出費はありますが、必ず何らかの形で返ってくるお金です。この卦は夫婦和合の卦でもあります。

「小筌」・・・この卦は本来、ものが損失するという意味だが、今の人には良い卦であるとする。

- 希望・・・あせれば失敗する。ゆっくりと行えば成る。二度、三度と繰り返してゆけば必ず成功す。
- 恋愛・・・恋人現れず。
- 金銭・・・吉兆である。
- 健康・・・病人には吉。

【益】䷩ ☳☴「風雷益」（公のための事業）☳「震」☴「巽」（丁を損して丁を益でるなかれ）

益、利有攸往。利涉大川。

益は往くところあるに利し。大川を涉るに利し。

損上益下、民説无疆。

象に曰く、上を損じて下を益せば民は説んで疆まり无し。

何が真の益かといえば、上のものを減らして、下々のものに増してやることである。そうすれば民の喜びは無限に大きい。主君の恵みは、人民全体を富ませ喜ばせることで、それは結局、主君自身の利益となる。

見善則遷、有過則改。

象に曰く、善を見ては則ち遷り、過ちあれば則ち改む。

善なるものを見たら、ただちにその善を行なおうとし、自分の過ちに気づいたら、すぐにそれに改める。益とは、増すこと。往けばそこでよいことがある。大きな川を涉るによい。この卦を得たなら、益がある。思い切って冒険(大川を涉る)してみるのもよい。

大川を涉るに利ろし　というのは、木道(巽は木、震は動く、木が動くとは、舟をしたてて川を涉る象)が行われるからである。益とは動いて(震)巽い(巽)、日ごとに限りなく前進することである。天は施し地は生ずるという働きによって、万物は増益すること際限がない。すべて物を益す道は、その然るべき時機に応じて行われるものである。

「象伝」風(巽)と雷(震)のあるのが益である。風雷相い助け相い益すこの卦象にのっとって、君子は善を見れば遷ってこれに従い、過ちがあればこれを改める。

「益」は利益の益で、「ます」と読む。「益」といえばすぐ、もうけることを考えがちです。勿論、あるときには、もうけを意味することもあります。しかし、「益」のほんとうの意味は、「公益優先」ということなのです。窮境を打開するために、積極的にあらゆる困難を克服し、はじめて喜びが得られ、精神面でも物質面でも、豊かさと活力が増進してくるというのが「益」の持つ意味です。

この卦は形から見ると、上は風、下は雷で、ともに動く意味があり、すべて積極的な活動によって、その成績があがる時です。あなたにこの卦が出た場合、日常生活に活気があふれています。土木事業などには最高の卦です。

自分の利益よりも人の利益を先に考えることによって、あなたが成功するのです。

「小筌」・・・この卦は、安定しないことを意味する。だから、この卦を得たなら住所が一定せず、気分が不安定で苦労する意味であることを心得るべきである。思いがけない災難にあう。身を慎むべきである。

・ 希望・・・うまくゆかない。そのために、他人にまで迷惑をかける。

・ 恋愛・・・恋人から迷惑をかけられる。たとえば、待ち合わせに遅れてくるなど。養子に行くにはよい。

・ 金銭・・・散財の兆しがある。慎むべきである。

・ 健康・・・凶である。

【夬】䷪「沢天夬」（月にうそぶく虎）　「乾下兌上」（小人がすくみ君子がのびるかたち）

夬、揚于王庭。孚號、有厲。告自邑。不利即戎。利有攸往。

夬は、王庭に揚ぐ。孚ありて號ぶ。厲きことあり。告ぐること邑よりす。戎に即くに利しからず。往くところあるに利ろし。

夬とは、決すること。王庭とは、朝廷。戎は、武力のこと。この卦は一つの陰爻が上にあり、君子(陽)が盛んで、わずかに残った小人(陰)を消そうとするのを意味する。そのために、朝廷で小人の悪い点を明らかにし、誠意を持って皆に知らせる。しかし、それだけではまだ危ない。村々からその批難を始めるべきで、武力に頼ってはいけない。そうすれば、進んでもよい。

中行无咎。　中行にして咎无し。（夬九五）

中庸の行いをなしていけば、いかなる場合にも過ちを犯さず、咎められることもない。（中行＝中庸）

象に曰く、沢の天に上るは夬なり。君子もって禄を施して下に及ぼし、徳に居ることはすなわち忌む。

夬(本音は「くわい」)は決去・決断・決解の意。卦の五陽が一陰を決去する象に取る。

「彖伝」夬とは決である。剛(陽)が柔(陰)を決去することである。王庭に揚ぐというのは、柔(上六の小人)が五剛の上に乗っているからである。孚あって號び、厲きことありというのは、つまり危ぶみ警戒する気持ちがあれば大いなる功績をおさめ得るということである。告ぐること邑よりす、戎に即くに利ろしからずというのは、武力だけを恃みたっとぶようでは、ゆきどまるということである。往くところあるに利ろしというのは、陽剛が長じ、あと一陰だけを決去すればことが終わるからである。

「象伝」沢(兌)が天(乾)の上にのぼるのが夬である。水沢の勢いが盛んとなり天上にまで及べば、必ず決壊して下に注ぐようになる。だから君子はこの卦象にかんがみて、俸禄を施して臣下に及ぼすことを心掛けると同時に、自ら道徳を取り守ることにつとめ、不徳の行いを忌み嫌い、決壊の災いを招かぬようにする。

『剛、柔を決するなり』これは中国の兵法の言葉であり、「易」の夬卦の言葉でもある。

「象に曰く、尖は、決なり。剛、柔を決するなり」(易・夬)

ここでの意味は、強者が兵を出して干渉し、武力で調停に乗り出せば、弱者はそれに従うほかないということ。

「夬」から決議、決断、決定などの言葉が出ています。物事を一思いに片付けるという意味もあります。また「判決」という言葉もあります。「夬」は、このような激しい意味を持った卦である。この卦が出たときは、山上の一本松のように、自分だけ孤立した環境・心理状態に置かれた場合が多い。

・「小筌」・・・この卦は剛強すぎる象であるから、あせっては失敗する。慎むべきである。
・希望・・・妨害にあい、うまくゆかない。
・恋愛・・・凶。
・金銭・・・出費の兆しがある。よく考えないで保証人になると苦労する。
・健康・・・病人には凶。

姤、女壮。勿用取女。

姤は、女壮んなり。女を取るに用うるなかれ。

象に曰く、姤とは、遇うことなり。〔乾卦(☰☰)に一陰が始めて生じた卦である〕。柔、剛に遇うなり。女を取るに用うるなかれとは、与に長かるべからざればなり〔陰が増え、男性(陽)が消えていく。女性が強く盛んになることを意味する〕。天地相い遇いて、品物咸く章らかなり。剛中正に遇いて、天下大いに行なわるるなり。姤の時義、大いなるかな。〔時義とは、そのときちょうどよいこと=都合のよいこと〕

女を取るに用うるなかれというのは、このような女とは長く一緒に生活できるはずがないからである。

象に曰く、天の下に風あるは姤なり。后もって命を施し四方に誥ぐ。

姤とは遇うということである。一陰はじめて生じて陽に遇う卦象に取る。しかしながら一女の身で五男に遇うのは不貞の女であり、淫心壮といわねばならぬから、このような女を娶ってはならない。

「象伝」天(乾)の下に風(巽)のあるのが「姤」である。風が天下に吹き渡れば、その恩沢は万物にあまねく行き渡る。君后たる者はこの卦象にのっとって、その命令を施行しあまねく四方に告げ知らせる。

「姤」とは偶然に出会うということである。紹介もなく、手順も踏まずに偶然に会うことである。

ふとした巡りあいから、いろいろな物語が生まれてきます。この卦は一人の女性に五人の男性が乗っています。だから、あなたが女性ならば、バーのマダムや、水商売に向いている性格です。

さらに「姤」は「女さかんなり」と原典の「易経」に在りますので、女性がリーダーになってやる仕事は、成功するでしょう。高価品、特殊品の売買には利益があります。アクセサリーや化粧品などの商売も良いでしょう。しかし、結婚には最もよくない卦です。一人の女に沢山な男が会いに来るからです。女性自身には悪意はなくても夫に死別したり、離婚したり、再婚してまた失敗したり、宿命的な不運を持っている人が多いようです。

あなたが男性ならば、現在結婚の意志をはっきり持っていない時です。女性とは、ただ遇うだけで満足してしまいます。目的のない日々をなんとなく遊び中に過ごしていることが多い時なのです。

「小筌」・・・この卦は、一つの陰が五つの陽に遇う形である。一人の女性が五人の男性に遇うことであるから、不貞の女性であることを意味する。だから、争いごとがあると心得ておくべきである。また、人から可愛がられる意味もある。

- 希望・・・思いがけずうまくゆく。人に相談すればかなう。
- 恋愛・・・縁談を持ちかけられる。女性には悩み事がある。
- 金銭・・・女性が絡むと良くない。
- 健康・・・良くない兆しがある。

【萃】䷬ 「沢地萃」（にぎやかなお祭り）　「坤下兌上」（万物の集まるかたち）

萃、亨。王假有廟。利見大人。亨。利貞。用大牲吉。利有攸往。

萃は、亨る。王、有廟に仮る。大人を見るに利ろし。亨る。貞しきに利ろし。大牲を用うるに吉なり。往くところあるに利ろし。

彖に曰く、萃は聚なり(集まること)。王有廟に仮るとは、(有廟の有は接頭語。仮は、至ること)父母仕えて孝行すること。即ち王者たる者は祖先の霊魂の萃まる場所の宗廟に至って祭祀を執り行うがよろし。大人を見るに利ろし、亨るとは、聚まるに正をもってするなり。大牲を用いて吉なり、往くところあるに利ろしとは、天命に順うなり。その聚まるところを観て、天地万物の情見るべし。

人集まり物聚まって泰平の時ならば、大牲(大牢におなじ、牛羊豕の豊厚な犠牲のこと)を用いて、祭祀を行っても吉であり、進んで大事を行うにもよろしい。

象に曰く、沢の地に上るは萃なり。君子もって戎器を除め、不虞を戒む。

「象伝」萃とは聚まるということである。人々が順って(坤)しかも説び(兌)、剛(九五)が中を得て六二がこれに応ずる、だから人心が聚まるのである。

往くところあるに利ろしというのは、天命に従う所業だからである。すべて人や物の聚まりかたをよく観察すれば、天地万物の真情がはっきりと判るものである。

「象伝」沢(兌)が地(坤)の上にのぼるのが萃である。つまり沢水が地上に集って物を潤すのが萃であるが、人や物が多く聚まれば不慮の変も生じやすいので、君子はこの卦象にのっとって、兵器を修め不慮の変に対して警戒を怠らないようにする。

「萃」は、あつまる、あつめる、ということです。人が沢山集りにぎわう意味です。「易経」の中の意味は、王が祖先の廟に参り、盛大な祭りを行い、大きな犠牲(いけにえ)を捧げて、心から祖先の霊に感謝し、その気持ちを持って政治を行う「祭政一致」を表している。

人や物が集まり賑わうのだから商売は繁盛し、一般に豊かにのびのびと進んでいけます。卦では地の上に沢があり、風呂の意味もあるから、温泉とか、裸に縁がある。結婚・縁談には良い卦です。

「小筌」・・・この卦は、物が集まり繁栄する意味である。すべてにわたって吉である。

- 希望・・・かなう。ただし、女性に邪魔されないように。
- 恋愛・・・恋人があらわれる。結婚にもよい。
- 金銭・・・大金を手にできるが、訴えられる危険性があり、身を慎むべきである。
- 健康・・・病気にかかると凶である。

䷭ 地風升

升、元亨。用見大人。勿恤。南征吉。

升は、元いに亨る。用て大人を見る。恤うること勿れ。南征するときは吉なり。

升とは、進みて上るという意味。南征とは、前進すること。この卦を得たならば、進んでゆけば、大いに通る。そして、大人(偉い人)に出会えば、もはや憂えることはない。前進してゆけば、吉である。

彖に曰く、柔、時をもって升り、巽にして順、剛中にして応ず、ここをもって大いに亨るなり。もって大人を見る、恤うるなかれとは、慶びあるなり。南征すれば吉なりとは、志行なわるるなり。

象に曰く、地中に木を生ずるは升なり。君子もって徳に順い、小を積みてもって高大なり。

升は昇、進み升るの意。木の地中に生じ成長して天に升る卦象に取る。上進すれば大いに亨る。かくてこの卦の巽順と柔順の徳を以って有徳の大人(九二)に出会うことを得るならば、もはや憂うる必要はない。南の明るい方に征けば吉である。

「象伝」地(坤)の中に木(巽)が生ずるのが升である。木が地中に生じ養分を得て成長する升進するこの卦象にのっとって、君子も道徳に順って身を養い、小事を積み重ねて高大に至るように心掛ける。

「升」には、地下にまかれた種、という意味がある。そしてこれから昇り進むということです。また、升には増す、実るという意味もあります。

「上升」と「上昇」とは同じで、上に昇ることです。また「昇格」とは、格式を上げることです。これは、あなたの努力が現実に現れた結果ということです。だから、この卦のときには、正しく自分の実力、才能を認めてくれる方向へ向かって進みなさい、ということです。

芽は土の中から出るでしょう。土そのものが肥沃であれば発育状態を良くし、また太陽の暖かさで生育を早めます。だから、この卦の時には、相手の立場や、その力に左右されるときです。あなたは受身の立場で従順にしていながら、自分の実力を相手に認めさせる熱意と努力が必要です。

現在のあなたは、希望、計画、アイデアなどは、まだ現実化するには、まだまだ時間があるときです。よほど自分の信念を堅く持っていないと、種が腐って芽が出ないように、せっかくのチャンスを空しくする恐れがないでもありません。

「小筌」・・・この卦は、草木の地中にあって、次第次第に地上に芽を出して成長する様をさしている。人について言えば、順調に立身出世する卦です。

- 希望・・・願いどおりかなう。しかし、万事にわたってあせれば凶である。
- 恋愛・・・恋人があらわれる。相手に思いを打ち明ければ、必ずうまくゆく。結婚にもよい。
- 金銭・・・初めはよくない。あとになると、少し吉。
- 健康・・・病気にかかると重くなる。

【困】䷮ 「沢水困」（ひびのはいったコップ）　「坎下兌上」（進退きわまるかたち）

困、亨。貞、大人吉无咎。有言不信。

困は、亨る。貞し、大人は吉にして咎なし。言うことあるも信ぜられず。

困とは、困窮すること。この卦を得たならば、次のような意味である。困しい時にあっても、正しくしていれば通る。それは、大人にしてなしうることであるから、大人のように振舞えば吉であって咎はない。困しんでいる時に、いくら熱弁をふるっても、誰にも信ぜられない。

困而不失其所亨、其唯君子乎。

困しみて其の亨る所を失わざるは、其れ唯だ君子か。

たとえ困難にあっても、平素の自分の道をやり通す態度を失わない。それは君子人だけのなしうることだ。君子は困難に出会ってむしろ喜び、衆人は窮すれば、自分を失ってしまう。「亨る所」とは進んでいく道。

〔有言不信〕。尚口乃窮也。

口を尚べば乃ち窮するなり。

弁解は、すればするほど自分を窮地に陥れるものである。「口を尚ぶ」とは、自分の弁舌にものをいわせること。〔言うことあれども信じられず〕　（以上二つは彖にあり）

象に曰く、沢に水なきは困なり。君子もって命を致し志を遂ぐ。困とは困窮、困しむの意。

「象伝」沢(兌)に水(坎)のない状態が困である。君子たる者はこのような困窮欠乏の状態に陥っても、正義のためには命を捨てる覚悟でその本心をつらぬき通すべきである。

困の字は、もともと口の中に木があるという字源ですから、鉢の木の感じだ。鉢の中かでは木も根も伸ばすことができず、苦しまなければ成らないでしょう。また、口の中に木が生えたとも見られ、苦しむことは同じです。これも四大難卦の中の一つです。困は、困る、苦しむ、悩むことです。

易経に、その困苦欠乏の中にあっても、自分の節操をつらぬき、あくまで信念を守り通す心掛けが必要です、正しい主張も用いられないときですが、隠忍自重しなければならない、と書いてあります。

「小荃」・・・この卦は困窮して災難にあうという意味である。万事に不自由な思いをし、何事もうまくゆかず、苦労が多い。学者・学生が、この卦を得れば吉兆である。

- 希望・・・叶い難い。凶である。けれども上位の人の助けで、うまくゆく。
- 恋愛・・・結婚しようとする恋人たちには吉兆である。妻子に苦労をかけられる。
- 金銭・・・出費の兆しがある。
- 健康・・・病気は治る。

井、改邑不改井。无喪无得。往来井井。汔至亦未繘井、羸其瓶、凶。

井は、邑を改めて井を改めず。喪うなく得るなし。往くも来るも井を井とす。汔んど至らんとして、またいまだ井に繘せず、その瓶を羸る。凶なり。

彖に曰く、水に巽れて水を上ぐるは井なり。井は養いて窮まらざるなり。邑を改めて井を改めずとは、すなわち剛中なるをもってなり。汔んど至らんとして、またいまだ井に繘せずとは、いまだ功あらざるなり。その瓶を羸る、ここをもって凶なるなり。（羸―つかれる、やせる、敗れる―ルイ）

象に曰く、木の上に水あるは井なり。君子もって民を労い勧め相く。

井は井戸、木を水に入れ水を上げる卦象に取る。邑―村里のたたずまいには遷り変わりがあっても、村の生活の中心となる井戸はいつまでも変わらないし、また井戸はいくら汲み上げても涸れることはなく、汲まないでいたからとて溢れ出ることもない。往来の人々は誰でも自由に井戸を井戸として利用することができる。およそ井戸の効用はこのようであるが、もしこれを汲もうとする者が其のやり方を誤って、たとえば、釣瓶がほとんど水に届きそうなところまで行っていながら、釣瓶縄を一杯に伸ばしきらぬとか、その釣瓶を壊してしまうようなことでは、せっかくの井戸の効用も発揮されず、凶である。

「象伝」木巽の上に水坎があるのが井である。人を養う井戸の効用にのっとって、君子は民をねぎらい養い、かつは勧すすめはげまして助けあうようにする。

古代の村落の文化は、流水のほとり、井戸のまわりに築かれた。水に恵まれた日本ではさほど感じないが、大陸の荒野の生活者にとっては、井戸ほど大切なものはなかった。そこで村人の新しい生活が始まる。旅人も清らかな水でのどを潤し、旅の疲れを癒すことができたのである。これが井戸の持っている「徳」である。

この卦が出た時は、水が日常生活に必要欠くべからざるものですから、くみ上げる努力を忘れてはなりません。井戸の水は汲み上げてこそ、新しい水が湧いてくるのです。自分だけ潤うのではなく、人々に奉仕することを忘れてはなりません。また、上にたつ人は、いつも部下の労をねぎらい、其のかわきを潤してやるようにしなければなりません。

「小荃」・・・この卦は、万事につき改めるには良くないことを意味する。各人が、自分の分を守り、むやみに新しいことを始めるべきではない。失敗するだけで、何の利益にもならない。

- 希望・・・少しはかなう。
- 恋愛・・・半ば吉である。
- 金銭・・・良くない。
- 健康・・・病気にかかると、長引く。

【革】䷰ 「沢火革」（町を行く革命の声）　「離下兌上」（旧を改めるかたち）

革、已日乃孚。元亨利貞。悔亡。

革は、已日にしてすなわち孚とせらる。元いに亨り貞しきに利ろし。悔亡ぶ。

彖に曰く、革は、水火相い息し、二女同居してその志相い得ざるを革と曰う。已日にしてすなわち孚とせらるとは、革めてこれを信ずるなり。文明にしてもって説び、大いに亨りてもって正し。革めて当れば、その悔すなわち亡ぶ。天地革まって四時成り、湯武命を革めて、天に順い人に応ず。革の時、大いなるかな。（殷の湯王が夏の桀王を滅ぼし、周の武王が殷の紂王を滅ぼしたのが湯武革命）

象に曰く　沢中に火あるは革なり。君子もって厤を治め時をあきらかにす。

革は革新・革命の意。水火相い争い相い滅息する卦象に取る。およそ物を革めるには已日すなわち已に革むべき時に至って後にこれを革めれば、人々もこれを孚として信服する。大いに亨るべき道ではあるが、もとよりその動機・実践ともに貞正なることを利ろしとする。このようであれば、革新・革命の事業を行っても悔は消えてなくなる。

「象伝」沢(兌)の中に火(離)があるのが革である。水火相争い陰陽相克そうこくして、四時の変革がもたらされるこの卦象にかんがみて、君子は厤(歴、暦に同じ)を製作し四時運行の順序を明らかにする。

「革」は革命を連想するだろう。「革」は、あらたまる、改革ということである。「革」は古いものから新しいものに移る過程であり、その改革は正しい道を踏む一つの転機としての変化でなければならない。

「易経」の「革」には、「つくりかわり」という意味もある。獣の生皮をはいで全く別の形のものに改めることです。またこの「革」を四季にとって考えると、夏に繁茂していた緑の木々も、秋になれば紅葉し、枯葉となるのが時の勢いである。

「革命」とは、上代における政治に関する「天命思想」であって、天意民心に応じて天命が革(あらた)まるということであって、後世のいわゆる「暴力革命」の意味ではない。そして、この卦は好調の運である。

「君子豹変」というのは、「易経」の「沢火革」の中に出ている言葉です。もともとの意味は、君子が断言したことは間違いなく実行され、その方向に付き従っていくということであった。

「小荃」・・・この卦は、物事を改めたりするのには吉である。鼎は、鍋のようなもので、物を煮て、食べ物を作る道具である。鼎は硬くて食べられないものを軟らかくしたり、生臭いものをおいしくしたりする。だから、この卦には変革の意味がある。新しいことを始めたりするのによい。

- 希望・・・かなう。
- 恋愛・・・うまくゆく。恋人が現れることがある。
- 金銭・・・収入がある。
- 健康・・・病気が急変することがある。

【鼎】䷱ 火風鼎

下図は周時代の鼎

鼎、元吉亨。

鼎は、元いに吉にして亨る。

彖に曰く、鼎は、象なり。木をもって火に巽れて、亨飪にたきするなり。聖人は亨してもって上帝を享り、大亨してもって聖賢を養う。巽にして耳目聡明なり。柔進みて上行し、中を得て剛に応ず。ここをもって元いに亨るなり。

象に曰く、木の上に火あるは鼎なり。君子もって位を正し命を凝す。

鼎は「かなえ」、亨飪(煮炊き)に用いる器。鼎は聖王が上帝を享り聖賢を養う所以であるから、大いに亨るべきもりである。

「象伝」木巽の上に火離のあるのが鼎である。その鼎の端正荘重な形にのっとって、君子はみずからも丹精にその地位を保ち、天命を成就することにつとめる。

鼎折足、覆公餗。

鼎、足を折り、公の餗を覆す。　(鼎九四)

鼎の足を折って、なかに盛った君主の食物である餗をひっくり返す。大臣は一国の鼎であるが、その大臣が足を折る、つまり誤ったことをすると、君主の食物、すなわち君主として成すべき大切な道を誤ることになる。〔餗〕は鼎の中に盛られている馳走のこと。

鼎は烹飪する器で王者のもつ宝である。上下の卦象でいえば、上卦は火(☲離)の、下卦は木(☴巽)のそれぞれのシンボルである。木を入れて火を燃やし、食物を煮(にる)形を示す。だから鼎と呼ぶ。この卦を得たならば、願い事は大いに通る。

鼎、「かなえ」は三本足で立っている鍋のことで、中国の神社仏閣、宮廷の跡には必ず見られる。「三者鼎立」という言葉のように、一つのものを三人で支えあって、一人でできないような大きな仕事も、三人ならば、非常な成功を収めることができるという良い卦です。

・「小筌」・・・この卦は、物事を改めたりするのには吉である。鼎は、鍋(なべ)のようなもので、物を煮て、食べ物を作る道具である。鼎は硬くて食べられないものを軟らかくしたり、生臭いものをおいしくしたりする。だから、この卦には変革の意味がある。新しいことを始めたりするのによい。

・ 希望・・・かなう。
・ 恋愛・・・うまくゆく。恋人が現れることがある。
・ 金銭・・・収入がある。
・ 健康・・・病気が急変することがある。

【震】☳ 「震為雷」（繰り返す雷声）　「震下震上」（万物の発動するかたち）

震、亨。震来虩虩。笑言啞啞。震驚百里、不喪匕鬯。

震は亨る。震の来るとき虩虩(おそれるさま)たり。笑言啞啞(安心して笑うさま)たり。震は百里を驚かせども、匕鬯を喪わず。

彖に曰く、震は亨る。震の来るとき虩虩たりとは、恐れて福を致すなり。笑言啞啞たりとは、後には則あるなり。震は百里を驚かすとは、遠きを驚かし邇きを懼れしむるなり。(匕鬯を喪わざるものは)出でてもって宗廟社稷を守り、もって祭主となるべきなり。

象に曰く、洊りに雷あるは震なり。君子もって恐懼修省す。

震とは、雷鳴・震動の意味。八卦の震の卦象・卦徳に取る。雷が鳴れば陽気発して動くから亨る。人は雷鳴が来ると虩虩(戒慎恐懼するさま)として恐れおののくが、それが終れば啞啞(安んじ笑うさま)として笑いつつ物言う。雷鳴が百里四方にとどろき渡って人々を驚かしても、心に誠敬をこめて祭祀に当たるほどの人ならば、あわてふためいて匕鬯を取り落とすようなことはしない。

「匕」とは、祭りのご馳走を載せる匙。鬯とは鬱金草を漬けた酒。地に注いで神おろしをする場合に用いるもので、鬱金を和して醸した香りの高い酒である。

「象伝」しきりに雷が鳴るのが震である。君子はこのような時には恐れ慎んで我が身を修め反省することを怠らないようにする。

この卦は、雷が二つ並んで雷の鳴る音をあらわしている。あなたにこの卦が出た場合、すべてのことに驚かされても、実害は少ない時です。「震」は「ふるい動く」という意味です。また「震」は「音の大きいわりに実害はない」という意味がありますから、これは「生きて帰る」と考えられる。

この震の卦は、この卦自体で願い事がおのずから通る。地震があると人は慎み恐れる。そうすることで福を得る。だから、その後で安心して笑える。雷は百里四方を驚かすけれども、そんな時にも一心に祭る人は祭りに使う匕鬯(ひちょう)を落したりしない。慎み恐れる人は、自分を見失わない。

「小筌」・・・これは、めでたいことや福があって、繁盛するするという卦である。しかし、普通の人には良くない。声があるが姿形がない卦だから万事にわたって掛け声だけに終わる。

- 希望・・・差し障りがある。
- 恋愛・・・たよりあり。結婚は良くない。
- 金銭・・・よくない。
- 健康・・・病気にかかるとよくない。

右は(匕)　下図の　左は鬱金草

【艮】䷳ 「艮為山」（はなれる中心）

艮其背不獲其身。行其庭不見其人。不咎。

其の背に艮まりてその身を獲ず。その庭に行きてその人を見ず。咎なし。

彖に曰く、艮は、止なり。時止まるべければすなわち止まり、時行くべければすなわち行き、動静その時を失わず、その道光明なり。その止に艮まるとは、その所に止まるなり。上下敵応して、相い与せず。ここをもってその身を獲ず、その庭に行きてその人を見ず、咎なきなり。

象に曰く、兼ねて山あるは艮なり。君子もって思うことその位を出でず。

艮とは止まって動かざること。八卦の艮の卦徳に取る。人の身体で言えば、最も止まって動かぬ所は背中である。従ってその背に止まるとは、止まるべきところに止まることであり、心が止まるところに止まっていれば、身体の私欲は遂げ得られず、ひいては人のいる庭に行ってもその人が目にはいらず、これにひかれることもなく、心身の安定を保ち得る道理であるから、咎はない。

〔身体というのは、動くものであるが、その中で背中だけは止まって動かない部分である。したがって、「其の背に艮まる」とは、止まるところに止まることである。そうすれば、その身を忘れ、人のいる庭に行っても、その人にきづかない。他者のことが気にかからなくなる。こうした境地に達すれば、咎はない。〕

〔象伝〕重なりあった山(艮)があるのが、艮である。その静止し安定した山の姿にのっとって、君子は心をおちつけ、自分の地位をこえた欲心をおこさないように心掛ける。

思不出其位 思うこと其の位を出でず。

君子は自分の与えられた地位を越えて思いを馳せるようなことはない。分を知り命に逆らわない。すべて、人はそうあるべきだ。『中庸』(ちゅうよう)には、「君子は其の位に素(そ)して行う」といっている。

艮の卦象は、山が二つあり、「動かざること山の如し」である。これは、欲望は恬淡(てんたん)であり、言いたいことも胸の中にとどめ、山のような高尚な精神と不動の信念を持たなければならないということです。

こんな時には自分の立場を考えて、静かに身を守るべき時期である。また、長い目で見れば「山」が二重になっていることから、「塵ちりも積もれば山となる」というように、こつこつ努力すれば、将来は大成するという運勢だと言える。

「小筌」・・・この卦は、止まればよいが、進めば失敗する。また喜びが重なる意味である。ものごとは、半分はかない、半分はうまくゆかない。

- 希望・・・妨げがある。
- 恋愛・・・恋人あらわれず。
- 金銭・・・財産を減らすけれども、他人の援助をうける。
- 健康・・・病気にかかると治りにくい。

【漸】䷴ 「風山漸」（飛び立つ渡り鳥）　「艮下巽上」（順を追って進むかたち）

漸、女歸吉。利貞。

漸は、女の歸(帰)ぐに吉なり。貞しきに利ろし。

漸とは、漸く進むこと。歸(帰)とは、嫁ぐこと。下卦が止まる(☶艮)、上卦は順う(☴巽)を表すので、止まって順うことを意味する。そこで、嫁ぐ人には良い卦といえる。ただし身を正しくしなければならない。

彖に曰く　漸の進むや、女の帰ぐに吉なり。進んで位を得、往きて功あるなり。進むに正をもってし、もって邦を正すべきなり。その位剛にして中を得るなり。止まって巽い、動きて窮まらざるなり。

思不出其位。　思うこと其の位を出でず。　（漸象）

君子は正しい立派な徳を持して変わることなく　さらにその徳をもって一般の風俗を感化する。まずおのれをよく修めて、しかるのち人を教化する。

象に曰く　山の上に木あるは漸なり。君子もって賢徳に居りて俗を善くす。

漸とは漸進、次第に進むの意。上下卦の止まりて巽う卦徳に取る。正しい順序を踏んで次第に進むのは、女子の嫁ぐ場合に殊に吉である。貞正をとりまもるのがよろしい。

「象伝」山(艮)の上に木(巽)のあるのが漸である。山上の樹木が漸次に成長して高大におよぶこの卦象にかんがみて、君子はおのれの賢徳を積み養い、次第に周囲の風俗を善に導くことをつとめる。

婦孕不育、失其道也。　婦孕みて育せざるは、其の道を失えるなり。（漸九三）

婦人が子供をはらんで、しかも、その子供を十分に養育しないのは、その道を誤ったのである。

「漸」は行き進むという意味である。順序をもって進むことです。水鳥が水面から岩の上へ、それから陸へ、そして木の枝に止まり、山の上に進み、それから、はるかな雲の果てに消えていく順序が「易経」に書いてある。それは、女が自分の故郷を離れて、嫁していくことにたとえることが出来る。忘れてはならないのは、順序をもって進むということです。「風山漸」は、渡り鳥の卦で、水際から大空に舞い上がっていく卦です。

「小筌」・・・この卦は、山の上に木を植えて、よく茂ることである。だから人の場合、立身出世することがある、という意味である。

- 希望・・・この卦には、吉に向かうの意味がある。しかし、前途は吉凶の間にあると心得るべきで、身を慎んで途を誤らないように。
- 恋愛・・・女性のほうから思われる。恋人が現れる。思いが通じる。ただし、色情の悩みがある。
- 金銭・・・悩みがある。出費の兆しがある。
- 健康・・・病気になれば、大凶となる。

【歸妹】䷵ 雷沢歸妹

歸妹、征凶。无攸利。　（帰＝歸の略字）

彖曰、歸妹、天地之大義也。

歸妹は、征けば凶。利ろしきところなし。

彖に曰く、帰妹は、天地の大義なり。天地交わらざれば万物興らず。帰妹は、人の終始なり。説びても って動く、帰ぐところのものは妹なり。征けば凶なりとは、位当らざればなり。利ろしきところなしとは、柔剛に乗ればなり。

帰妹とは、少(☳)女が嫁ぐこと。少(☳)女(☱兌)と長男(☳震)の組み合わせであるから、よくない。なぜなら少女は、少男に嫁ぐべきだからである。嫁げば、凶となる。何の利益もない。したがって、この卦を得たならば、進めば凶。万事につき無益である。（歸妹とは妹(年少の娘)を帰がせる意）

象に曰く、沢上に雷あるは帰妹なり。君子もって終わりを永くし敝るるを知る。

「彖伝」歸妹すなわち女が男に嫁ぐということは天地の大義である。およそ天地も陰陽こもごも感じあうことがなければ万物は発生しない。同様に帰妹こそは人倫の終始をなすものだとも言えよう。

説んで(兌)動き(震)、帰いで行くのが妹(年少の娘)である。征けば凶なりというのは、二から五までの各爻がみな陰陽の正位をはずれているからであり、利ろしきところなしというのは、柔(三・五・上)が剛(初・二・四)の上に乗っているからである。

「象伝」沢(兌)の上に雷(震)のあるのが帰妹である。帰妹に当って女が先立って動くようでは、そもそもの初めからよろしくない。そこで君子はこの卦象にのっとって、万事に遠い将来の終わりまでを見通し、初めが悪いと失敗を招くことを知るのである。

「歸妹」の、もとの意味は、美しいために選ばれてハレムに入った女性、あるいは貢ぎ物として送られた女性である。このように、正式の手続きを踏まないで、婚交した女性のことを言うのです。ですから「帰妹」は、正式の手続きを踏まず、一時の感情で相求めあっている喜びを表している。

現代的に言えば、情熱のおもむくままに、結婚前に一線を越えた男女です。結婚は、すべてが悪いとはいえませんが、まとまっても最後まで円満にやり遂げるには苦労があるときです。

「小筌」・・・この卦は、不慮の災害があることを意味するから、身を慎むべきである。

- 希望・・・妨げがある。
- 恋愛・・・色情の悩みがある。女性関係で苦しむ。結婚には凶である。
- 金銭・・・出費の兆しがある。
- 健康・・・病気にかかると凶となる。

【豐】䷶「雷火豐」（哀愁の太陽）「離下震上」（盛大なかたち）

豐、亨。王假之。勿憂、宜日中。（豐＝豐の略字）

日中則昃、月盈則食。

豊は亨る。王これに仮る。憂うるなかれ、日中に宜し。

彖に曰く 豊は、大なり。明にしてもって動く、故に豊かなり。王これに仮るとは、大を尚ぶなり。憂うるなかれ、日中に宜しとは、宜しく天下を照らすべしとなり。日中すればすなわち昃き、月盈つればすなわち食く。天地の盈虚は、時と消息す。しかるをいわんや人においてをや、いわんや鬼神おいておや。

象に曰く 雷電みな至るは豊なり。君子もって獄を折め刑を致す。

豊は豊大・盛大の意、卦徳の明にして動き、勢いの盛大なるに取る。盛大なれば亨通するのは道理であり、王者はまさにここに至り得るものである。もちろん物事は盛大の極に至れば傾きやすいが、いたずらにこれを憂える必要はない。常に日の中天にかかって天下に照臨するごとく、豊大の勢いを保持することを心掛ければよろしい。

「彖伝」豊とは大という意味である。卦徳でいえば、明(離)であって動く(震)、だから豊かに大きいのである。王これに仮(いたる)とは、王者たるものは勢いの盛大なることを貴ぶのである。憂うなかれ、日中に宜しというのは、常に天下に照臨することを心掛けよということである。とはいえ、日中は中天まで昇ればやがて欠ける。このように天地の盈虚＝満ち欠けは、その時に従って消息するものであるから、ましてや人や鬼神もその勢いが時とともに盛衰するのはむろんのことである。

「象伝」雷鳴(震)と電光(離)がともにやって来るのが豊である。故に君子は電光の明るさにのっとって、訴訟を明察して裁きをつけ、雷鳴の威にのっとって刑罰を断行する。

「豊」は、ゆたかという意味です。豊満、豊麗、豊潤など、現在が満ち溢れた、最高点に達した状態です。中天にかかって勢い盛んな太陽も、やがては傾き、こうこうと輝く満月も、やがては欠けて闇夜になるのが、天地自然の現象です。あなたの運勢もそのように、現在は非常に盛んなときですが、その後に来るべき事態を考えておいたほうが良いでしょう。一日の仕事はまだ太陽が天上にある間に最善を尽くして、片付けなければならないということです。

豊とは、盛大の意味。その卦自体で通るの義がある。この盛大な状態に至るのは、王者のみ可能である。豊かとは、すべてが備わっている、だから憂える必要はない。日中に太陽が輝いているようにすれば良い。

故人はこの卦を「残花雨を待つの意」と形容していますが、盛んなものが行きづまって、哀愁をたたえる言葉です。「花の命は短くてくるしきことのみ多かりき」・・・・・

「小筌」・・・この卦は、盛大で勢いがあるのを意味する。けれども、調子に乗りすぎては駄目で、二元も子もなくなってしまう。

- 希望・・・思いがけないことがある。
- 恋愛・・・結婚するにはよくない。
- 金銭・・・貴いものを手に入れる。金銭に関したトラブルに巻き込まれる兆しがある。
- 健康・・・病気は悪くなる。

【旅】䷷ 火山旅 火雷噬嗑 火風鼎 火水未済 雷山小過 雷火豊 風火家人 風山漸 山火賁

旅、小亨。旅貞吉。

旅は、少しく亨る。旅には貞しければ吉なり。

旅とは、旅行すること。この卦は、山(☶艮)を下に、火(☲離)を上にする形で、山は動かないが、火が次々に燃え移ってゆく様を表す。そこから旅と言う。旅の途中なので、大いに通るという訳には行かないが、少しは通る。旅の恥はかき捨てというようにしてはいけない。常に正しくしていれば吉である。

象に曰く、旅は、小しく亨る。柔中を外に得て、剛に順う。止まりて明に麗く。ここをもって小しく亨り、旅には貞しければ吉なるなり。旅の時義、大いなるかな。

象に曰く、山上に火あるは旅なり。君子もって明らかに慎んで刑を用いて獄を留めず。

旅は旅すること、また旅人の意。山上の火が次々に燃え移って一所にとどまらぬ卦象に取る。さて旅して他郷にあれば、親戚故旧の頼るべき者はおらず不便の事も多いから、万事につけて大いに通るというわけにはいかないが、自重すれば少しく通る。旅の恥はかきすてというような心はもたず、常に貞正を守って行動すれば吉である。

「彖伝」旅は小しく亨る。なぜかというと、柔(六五)が外卦の中位を得て、上下の剛(九四・上九)に従い、止まるべき時に止まって(艮)、明に附く(離)という象であるから、小しく亨り、貞正であれば吉なのである。旅の時とこれに対処する意義は、まことに大きなものではある。

「象伝」山(艮)の上に火(離)のあるのが旅である。君子はこの卦象の明察(離)と静止(艮)にのっとって、明らかに慎んで刑罰を施行し、獄(断罪)を滞(とどまることさせぬように心掛ける。

鳥焚其巣

鳥、其の巣を焚かる。(旅 上九)

鳥が人目につく高いところに巣を作れば、人から焚かれる心配がある。高位にいて傲慢であると、他人に嫉まれて傷つけられがちである。

「旅」は文字どおりの旅の意味です。それも一日や二日の旅でなく 山の上の火が、とどまるところなく燃え移るように、長い長い旅路をたどっていく。不安に満ちた旅人の姿です。この卦のときは、なんとなく、寂しさと、不安と苦労が付きまとっている時です。

すべてが完備した現在でも。旅をすれば何かと不自由で、落ち着かない。これをあなたの運勢と見た場合、積極的に出ず、あらゆる場合には、受身の態勢で柔軟に、時と所に処する態度が必要です。

「小筮」・・・この卦は、初めはよいが、後には悲しみにあうことを意味する。万事につき、身を慎むべきである。

- 希望・・・うまくゆかない。
- 恋愛・・・恋人あらわれる。
- 金銭・・・少しならよい。遠方に投資するとよい。近くのものに投資するのはよくない。
- 健康・・・病気になると、一時的には快方に向かうが、すぐに悪くなる。

【巽】☴「巽為風」（風に吹かれたタンポポ）　「巽下巽上」（へりくだって柔順なかたち）

巽、小亨。利有攸往。利見大人。

巽は、小しく亨る。往くところあるに利ろし。大人を見るに利ろし。

巽とは、入るの意味。巽☴は、陽爻が二、陰爻が一の形であるが、陰を主に見る。陰が主なので、少しか通らない。陰が陽に従っている。これは自然の姿である。だから、進んで行ってもよい。従うのが、大人であれば、正しいことであるから、よい。

彖に曰く、重巽はもって命を申ぬるなり。剛は中正に巽いて志行われ、柔はみな剛に順う。ここをもって小しく亨り、往くところあるに利ろしく、大人を見るに利ろしきなり。

象に曰く、随風は巽なり。君子もって命を申ね事を行う。

巽は巽順、従って入るの意、八卦の巽の一陰が二陽に下り従う卦象に取る。人に従って入ることを心がければ、まずまずは無難に亨るから、進んで事に当ってもよろしいが、従う相手としては大人すなわち立派な人物を選ぶようにすることがよろしい。（巽順は柔順の意味）

「彖伝」巽が二つ重なっているのは、命令を重ねて繰り返すという意味である。剛(九五)が中正の道に従って行動するから、その意思が行われ、柔(初・四)はみなその上に居る剛に従う態度を持している。したがって小しく亨り、往くところあるに利ろしく、大人を見るに利ろしいとされるのである。

「象伝」風(巽)が後から後へと吹き随うのが巽である。君子はこの卦象にのっとって、命令を丁寧に繰り返してから事を実行にうつすのである。

「風」が二つ重なっている形で、風が軽やかにそよそよと吹きめぐる形です。或る時は東から、或る時は西から。稲の穂が風によって実を結び、松の実が種を遠くまで運んでもらい、タンポポの種が白い落下傘のように飛び、植物が風によって繁殖していくように、あなたも努力し、周囲のものを利用していけば、あなたの運も目に見えて増えていく時です。

この卦には、出入りとか、したがうという意味がある。自分が主体となって行動するのではなく、風のように人に従い、時にしたがって、はじめて立場を得るのです。このような時には、ほかの実力者に随うほうが良いでしょう。しかし、この卦は、日常生活では風が吹きめぐるところから、行きつ戻りつという意味があるのですから、迷いの多い時で、決断を欠く時です。結婚はまとまりがたい時です。

「小筌」・・・この卦は、達するの意味があって、願い事が遂げられる。けれども、横から邪魔が入り、失敗することもある。人の言うとおりにすればよい。

- 希望・・・十のうち五は、かなう。外からの助けあり。
- 恋愛・・・結婚するのはよくない。初めはよいが、最後には凶となる。
- 金銭・・・うまい話に乗ると、思わぬ出費がある。
- 健康・・・病気にかかると危ない。

するかたち）

兌、亨。利貞。

兌は、亨る。貞しきに利ろし。

彖に曰く、兌は説なり。剛中にして柔外なり。説びてもって貞なるに利ろし。ここをもって天に順い人に応ずるなり。説びてもって民に先だつときは、民その労を忘れ、説びてもって難を犯すときは、民その死を忘る。説の大いなる、民勧むかな。

象に曰く、麗沢は兌なり。君子もって朋友講習す。

兌とは、悦ぶこと。兌（☱）は、一つの陰爻が二つの陽爻の上にある形。喜びが外に現れているの義。この卦は沢の象（シンボル）である。沢にある水が万物を悦ばせるのである。悦ぶということは、通ることである。ただし、悦ぶからといって何にでも通るというわけではない。動機が正しい場合にのみ良いのである。

説以先民、民忘其労。説以犯難、民忘其死。説之大、民勧矣哉。

説ばしめて以て民に先だつときは、民其の労を忘る。説ばしめて以て難を犯すときは、民其の死を忘る。説びの大いなる、民勧むかな。

まず民を十分喜ばせ、さらに自分が民の先頭に立って民に労力を命じると、民は骨を折ることも忘れて、喜んで仕事に従事する。同様に困難を犯す場合でも、まず民を十分に喜ばせ、さらに自分が先んじて民の困難に当れば、民はその困難のために死ぬことがあっても、喜んでこれに従事する。民心の悦服を得ていれば、民は骨を折っても、生命をささげても恨むものではない。

麗沢兌。君子以朋友講習。

麗沢は兌なり。君子以て朋友講習す。

二つの沢が並んで潤し合うのは悦びだ。だからそれに習い、君子は朋友互いに講習し徳を磨きあうのだ。

兌は説ぶ・喜悦・悦楽の意味である。この言葉は人間の悦びを表現したものです。其の悦びは心からのものでなければなりません。

「象伝」沢（兌）が連なったのが兌である。二つの沢が連なって互いに潤（うるお）しあうこの卦象にのっとって、君子は朋友とともに学問を講習し互いに裨益（ヒエキ＝おぎないますこと）しあって向上の助けとする。

人に接するときにも、穏和で誠実で自分を正しく守らねばならないということです。これを人間の体で言えば、「兌」は「口」です。「兌」は「口」が二つ重なっている形なのです。

「小筌」・・・この卦は、喜びが外に顕われる意味で、良い卦　である。しかし、物事にしまりがなく埒があかない意味もある。外見はいいけれども、内心は良くない意味もある。

- 希望・・・半分しかかなわない。小事には吉。大事はうまくゆかない。
- 恋愛・・・結婚問題でもめごとあり。
- 金銭・・・あれこれと悩み事が多く、うまくゆかない。
- 健康・・・病気は、治る兆しがある。

【渙】䷺「風水渙」（波止場を出る船）　「坎下巽上」（離れ散らばるかたち）

渙、亨。王假有廟。利涉大川。利貞。

渙は、亨る。王、有廟に仮る。大川を渉るに利ろし。貞しきに利ろし。

彖に曰く、渙は、亨る。剛来りて窮まらず、柔位を外に得て上向す。王有廟に仮るとは、王すなわち中に在るなり。大川を渉るに利ろしとは、木に乗りて功あるなり。

象に曰く、風の水上を行くは渙なり。先王もって帝を享り廟を立つ。

「渙」とは、散じること。「仮」は、至る。「有廟」は、廟。この卦を得れば、通る。先祖の精神が散じても、王が誠意を尽くせば、これを再生させることができる。

この卦は、上卦が木 ☴ で下卦は水 ☵ で、舟の意味もある。だから、大川を渉るによいのである。ただし、動機が正しい場合にのみである。

「渙」とは渙散、散らすの意。風が水上に在って水を吹き散らす卦象に取る。物事はすべて一度は渙散しても、またこれを聚めるすべを講ずれば亨る。たとえば王者が大廟に詣って、渙散した祖先の霊魂を祭祀によって結聚することがこれである。従ってこの卦を占い得た者は、祭祀に心をあつめるが利ろしいし、大川を渉るような大事を行うことも利ろしいが、ただどの場合にも貞正をとり守ることが必要である。

「象伝」風(巽)が水(坎)の上に吹き渡って行って水を散らすのが渙である。古代の聖王はこの卦象にのっとって、上帝を享(まつり)祖先の廟を立てることにより、渙散した祖先の霊魂をあつめ、さらに天下の人心の離散を防ぐことを心掛けた。

「渙」は散らすことです。渙散、渙発などという言葉があるように、内部の鬱血(うっけつ)状態を外へ発散させることです。

一国にこれを例えると、人心をつかんで国内の政治が落ち着けば、その意欲は外へ向かっていきます。かってのイギリスが海外に植民地を広げ、それによって国の富を増すことを計ったようなものです。

中華人民共和国が共産党の独裁の不平不満を散らすために反日を国是として叫び、国内の各所に反日宣伝のための記念館を建設し、日本に向かって「靖国神社参拝絶対反対」を絶叫しているのも同様です。

この卦は運の強いときです。今までの小さい仕事から大きい集団でする仕事への切り替えの時です。しかし、これはあくまで動機が正しく真正であることが必要です。

「小筌」・・・この卦は、物事がほどけてゆく意味があり、身についてまわる悪い運勢から解き放たれるとする。しかし、散乱するの義もあって、失うことがある。

- 希望・・・遅くなってから、かなう。
- 恋愛・・・結婚できる。
- 金銭・・・つかない。
- 健康・・・病気になると凶。

節、亨。苦節不可貞。

節は、亨る。苦節は貞しくすべからず。

彖に曰く、節は、亨る。剛柔分かれて剛中を得ればなり。苦節は貞しくすべからずとは、その道窮まればなり。説びてもって険に行き、位に当りてもって節あり、中正にしてもって通ず。天地は節ありて四時成る。節してもって度を制すれば、財を傷らず民を害せず。

象に曰く、沢上に水あるは節なり。君子もって数度を制し徳行を議す。

「節」とは、節制、節度、程よくして止まる、限りがあって止まるなどの意味。この卦は、下が沢(☱兌)、上が水(☵坎)の形で、沢の容量には限度がある。だから「節」という。「節」には、おのずから通るの義がある。この卦を得たならば、願いはかなう。しかし、節制しすぎると正しいとは言えなくなる。

およそ物事は程よく節すれば亨とおるが、度をこした窮屈な節制は、常道とすべきでない。

「彖伝」節は亨る。なぜならば剛柔三爻ずつに分かれて、しかも剛(二・五)が中位を得ているからである。苦節は貞にすべからずというのは、その道が行きづまるからである。説んで(兌)険坎を行き、九五は位に当って節度を保ち、中正の徳によって万民の志を通ずる。およそ天地も節度があるからこそ四時の運行が成り立つ。故に聖人も節度を保って制度をたて定めれば、財物を傷つけ民生を害することを防ぎ得るのである。

「象伝」沢(兌)の上に水(坎)があるのが「節」である。君子はこの卦象にのっとって、礼数法度を制し徳行を議するにも、必ず節度を尊ぶのである。

「節」は「ふし」である。竹が伸びるとき、一節一節ずつ伸びていく形です。我々は日常の生活の中にあっても、節度、節操、節制を保つことが大切です。「節」には、限界、限度という意味もあります。この卦の場合は、出るのを制してとどまることが、生活の安定に必要なのです。

たとえば、喜びを求めることも、生活を楽しむことも、程よくしたほうがいいということです。「節」も度をすごしますと、観念的になってしまい、自分の理論にこだわり切って動きが取れない状態です。

これは本当の意味での正しい「節」ではありません。たとえば、川の水でも、長くよどんでいれば水自体が古くなり、腐ってしまいます。私たちの頭も、時と場合に応じて、敏速に回転させなければなりません。

この卦が出た場合には、あなたに誘惑が多い時です。甘い言葉で誘われたり、好餌を見せ付けられても、ほどよくとどまって、やたらに行動を起こすべきではありません。

故人の言葉に「狐、泥中を渡るの形」とある。「水」には狐とか悩みとかの意味があり、また「沢」は泥、落とし穴、凹地と見ることが出来ます。狐が泥の中に足を突っ込んで抜き差しならない状態です。

「小筌」・・・この卦は、物事に滞り差しさわりがあることをいう。又、自然に程よくなるという意味もあって、物事に逆らわず、通じるというように解釈できる。しかし、それ程、運勢のよくない卦であることを心得ておくべきである。

- 希望・・・かなわない。
- 恋愛・・・平穏無事。
- 金銭・・・金銭運はよい。
- 健康・・・病気にかかると凶。

【中孚】䷼「風沢中孚」（卵を抱く親鳥　「兌下巽上」（心に誠のあるかたち）

中孚、豚魚吉。利涉大川。利貞。

中孚は、豚魚にして吉なり。大川を涉るに利し。貞しきに利ろし。

彖に曰く。中孚は、柔、内に在りて剛、中を得たり。説びて巽い、孚ありてすなわち邦を化するなり。信豚魚に及ぶなり。大川を涉るに利ろしとは、木に乗りて舟虚なればなり。中孚にしてもって貞しきに利ろしとは、すなわち天に応ずるなり。

象に曰く、沢上に風あるは中孚なり。君子もって獄を議し死を緩くす。

中孚は心中に孚誠(まこと)ありとの意、説んで巽う卦象に取る。心中に孚誠があれば、無知の豚魚でさえもこれに感応して吉であるから、大川を涉るような大事を決行しても利ろしいが、要は貞正を失わぬことである。

「彖伝」中孚は柔(三・四)が卦の内側に在り、剛(二・五)が中位を得た象である。下の者が説び(兌)上の者が謙遜(巽)で、孚誠により邦国を感化するすることである。豚魚にして吉なりというのは、その誠信が豚魚にまで及ぶことである。大川を涉るに利(よろし)というのは、木(巽)の船に乗って、しかも船腹が空虚(卦中の三・四が陰であること)だからである。心中から孚誠をつくし、貞(ただ)しきに利(よろし)というのは、かくしてこそ天道に応ずることができるからである。

「象伝」沢の上に風(巽)があるのが中孚である。風が沢上を行けば水がこれに応じて波立つ。故に君子はこれにのっとって孚誠によって人を感応させることにつとめ、獄事をとりさばき、死刑に対して寛大を心掛けるなど、すべて其の孚誠をもってする。

中孚は、心の中に孚(誠)があること。人の心に感じたりしないはずの豚や魚でさえも、感心させることの出来るような誠意があれば吉。大川を涉るような決断もよろしい。ただし、常に正しさを保つことが大切である。

「中孚」とは「まこと」ということです。「孚」とは、「爪」と「子」を併せた文字で、親鳥が爪の間に卵を抱いている形である。卵を温めて雛鳥にかえすことも出来るのですから、あなたの誠実と努力によって、成功を収めることができるのです。人間関係では、親鳥と子鳥がむつみあうように、性格、性質の違った人々が、お互いに胸襟を開いて、誠意を尽くしあってやる共同事業などが理想的です。

男女関係について言えば、この「中孚」は典型的な相思相愛の卦です。「中孚」は接吻の形だといえます。形を見れば上と下とから、お互いに口を付け合っている感じがする。熱烈な愛情の表現です。

「中孚」は、早くまとめたら、仲のよい円満な家庭をつくり、幸福に暮らすことが出来る卦である。

「小筌」・・・この卦は、心が正直であれば吉。ただし、邪悪な心にこの卦を得れば、大凶。

- 希望・・・心を一途にして変えることがなければ、かなう。
- 恋愛・・・親しく愛される。結婚は吉。
- 金銭・・・心を変えず誠心誠意つとめれば財をなす。
- 健康・・・心身に苦労があり、それが四[illegible]。

小過、亨。利貞。可小事、不可大事。飛鳥遺之音。不宜上、宜下。大吉。

小過は、亨る。貞しきに利ろし。小事には可なるも、大事には可ならず。飛鳥これが音を遺す。上るに宜しからず、下るに宜し。大いに吉なり。

小過とは、小(陰一)が大(陽一)に過ぎること(この卦は、一が二つに対して一が四つである)。小さな者が大きな者に過ぎているように願いは通るが、正しさを守ってこそよろしい。小さな事にはよいが、大きな事には不可。鳴き声を遺して飛ぶ鳥も、下降して木に止まってこそ安らぐように、積極的に上るような行動はよくないが、控え目に下るような行動はよろしい。このように心掛けていれば、大いに吉である。

彖に曰く、小過は、小なる者過ぎて亨るなり。過ぎてもって貞しきに利ろしとは、時と与に行うなり。柔中を得たり。ここをもって小事は吉なり。剛位を失いて中ならず。ここをもって大事には可ならざるなり。飛鳥の象あり。飛鳥これが音を遺す、上るには宜しからず、下るには宜し、大いに吉なりとは、上るは逆にして下るは順なればなり。

象に曰く、山上に雷あるは小過なり。君子もって行いは恭に過ぎ、喪は哀に過ぎ、用は倹に過ぐ。

小過とは小なる者(陰)が大(陽)に過ぎるの意、卦の二陽四陰なるに取る。小なる者も過ぎれば亨るけれども、貞正であることが必要である。また小事にはよいけれど大事にはよろしくない。

「彖伝」小過とは、小なる者(陰)が過ぎて亨ることである。過ぎてしかも貞しきに利ろしというのは、時機にあわせて行動することである。

「象伝」山(艮)の上に雷(震)があるのが小過である。山上に雷がとどろくのは少しく過ぎるの象。故に君子はこれにのっとって行いは恭順に過ぎるよう、服喪は哀悼に過ぎるよう、物用は倹約に過ぎるように心掛ける。

「過酷」は、きびし過ぎる、「過剰」は、ありあまり過ぎる、「過食」は食い過ぎるなど、すべて限度を超えた言葉です。「小過」は少し過ぎるということです。だから日常の事にも高慢な態度をとるより謙遜の徳を守ったほうが、より効果的であり、用心し、相手をうやまい過ぎるくらい尊敬し、約束の時間より早すぎるくらい急いで到着し、ときには「けち」といわれるくらい節約してこそ、すべてに手落ちがないときです。

この卦は度を越した行動が災害を招くときですから、自分の実力以上のものを望むとか、とても力の及ばない相手と争ったりして破綻を生じるときなのです。昔の人は、この卦を、「門前に兵あること」といって災いを避けるようにつとめていた。

「小筌」・・・この卦は、鳥の飛ぶのを目に見、その声を耳に聞きながら、手に取ることができないように、万事ととのい難いことを表わす。

- 希望・・・小さな事はよいが、大きな事はよくない。
- 恋愛・・・互いに背きあうことになる。
- 金銭・・・あせって財を求めるのはよくない。
- 健康・・・常に苦労。気がねが多い。

【既濟】䷾「水火既濟」（功成り名をとげた人）　「離下坎上」（万事が既に出来上がっているかたち）

（濟＝済）　（濟＝済）（亂＝乱）

既濟、亨小。利貞。初吉終亂。

既濟は、亨ること小なり。貞しきに利ろし。初めは吉にして終わりは乱る。

彖に曰く、既濟は亨るとは、小なる者亨るなり。貞しきに利ろしとは、剛柔正しくして位当ればなり。初めは吉なりとは、柔中を得ればなり。終わりに止まれば乱る。その道窮るなり。

既濟とは、既に済る。物事の完成を表す。離火が下より炎上し坎水が上より潤下して、水火相まじわり、各々その用を成す卦象に取る。また六爻がそれぞれ陰陽の正位に在るのも事すでに済るの意を示す。さて事すでに済れば新しい発展を期待するよりは、むしろ事の敗壊を警戒しなければならない。故に亨ること小であり、貞正を守ることが必要であるし、初めは吉であるが終わりには乱れる可能性がある。

既濟の卦は一見よいようであるが、完成の後には衰退・崩壊の危険があるので、願いの通ることは小であり、正しさを保つ必要がある。初めは吉であるが、やがて乱れる。

既に成る「既濟」は、ことごとく整うという意味である。すべて整ったあとの整理整頓の時期ですから、現状をかたく守って、これより以上の大事を企ててはなりません。ただ、無事平穏の時には、とかく気が緩みやすくなり、つい油断して間違いが生ずるものです。初めはうまくまとまっていることでも、後で手落ちを生じやすいのですから、十分注意を必要とします。

この卦は陰と陽とのバランスが、代わりばんこに良く整っております。そういう意味では「易経」の中で、一番正しい形を得ている卦だと言える。しかし、世の中は、絶えず循環しているものですから、良いことが何時までも続くとは言えません。現状を維持するということにも、やはり相当の苦労が伴うものです。

東隣殺牛、不如西隣之禴祭、實受其福。

東隣の牛を殺すは、西隣の禴祭して、実に其の福いを受くるに如かず。（既済九五）

東隣の人は、祭りのため犠牲に牛を用いるほどの大騒ぎをしているが、真心がない。これに反して西隣の人は禴祭という供え物の少ない夏の祭りをしているが真心がある。では、どちらが神意にかなって福を受けるかといえば、後者である。神は供え物の多少よりは真心の存否を重視するのである。

東隣は殷の紂王、西隣は周の文王を指しているとも言う。（禴祭は殷の時代の春祭り）

「小筌」・・・この卦は、物事の衰乱の初めを表す。一旦は成就しても、後には破れる。

- 希望・・・渡し場に行って舟を得たように、よろしきことに逢うが、後に変わる卦なので、油断・怠慢なく、貞正を守ることが必要である。
- 恋愛・・・結婚には至らない。何事も終わりまで行かない。
- 金銭・・・財をなすようでなさない。
- 健康・・・病気に注意。

未濟、亨。小狐汔濟、濡其尾。无攸利。

未済は、亨る。小狐汔んど済らんとして、其の尾を濡らす。利しき攸无し。

彖に曰く、未済は亨るとは、柔中を得ればなり。小狐汔んど済らんとすとは、いまだ中を出でざるなり。その尾を濡らす、利ろしき攸なしとは、続いて終らざればなり。位に当らずといえども、剛柔応ずるなり。

象に曰く、火の水上に在るは未済なり。君子もって慎みて物を弁じ方に居く。

「未済」は前頁の「既済」の卦をひっくり返した形で、事いまだ済らず、また未だ済らず、事の未完成の意を表す。卦の水火が上下に分かれて用を成さず、また六爻それぞれが陰陽の正位を失う象に取る。事未だ済らざる時に当って、柔中の徳をもって事に当れば、やがては亨る。ただし今は経験の浅い小狐が川をほとんど渡りきろうとしたところで、その尾を濡らして渡りそこなった状態、つまり事が済ろうとして済らぬ状態だから、何事にもよろしくない。

「彖伝」未済が亨るというのは、柔六五が中位を得ているからである。小狐汔んど済らんとすと言うのは、九二がまだ坎険(水)の中から出られないからである。その尾を濡らす、利ろしきところなしというのは、引き続いて渡り終えることが出来ないからである。卦中の六爻はすべて正位に当っていないけれども、陰陽みな応じあっているから、やがて開運の兆しがある。

「象伝」火(離)が水(坎)の上に在るのが「未済」である。火は炎上して上に在り、水は流下して下に在るこの卦の象にのっとって、君子は慎んで物の性質を弁別し、適当な場所に置くようにつとめる。

この卦は時運に恵まれない時ですから、時期の来るまで無理をしてはいけない時です。運勢一般について見ると、この「未済」の形は、海上の朝日と言える。水の上に太陽が昇り始めた頃である。日の光りは弱くても希望が指し始め、これから徐々に明るさを増し、すべてが活動を始める時です。

「易経」では、すべてが整った「既済」を最後に置かず、未完の象徴ともいえる「未済」の一卦を、六十四卦の最後に置いたところに、古代の聖人の叡智(えいち)を感じるのである。

人は生まれ、人は死に、人は行き、また来たり、無数の人々の喜怒哀楽のあいだに、人生は無限の歩みを続けて行きます。「この人生の終わらざる如く、『易経』もまた終わらず」、今日の人生に、そのまま応用しても誤らないほど、『易経』は烈々たる生命力にあふれていると信じるのである。

「小筌」・・・この卦は、物事の成就を表す。まだ用をなしていないが、これより後、事を始める吉兆がある。胸の中に思いを抱きながら、それを言い出そうか、言い出すまいかと迷っているような状態である。

- 希望・・・かなう。
- 恋愛・・・女性に喜びがあり、男性には苦しみがある。が、後に吉となる。婚姻は吉。
- 金銭・・・財をなすことはできるが、その兆しは遅い。
- 健康・・・心身が安定しない。病気の兆しがある。

繫辞伝について

「易経」には前記した六十四卦の一つ一つに、その卦の吉凶善悪を判断する「辞」があり、(これを卦辞という)、また、各爻毎に同じく吉凶善悪を判断する「辞」がある(これを爻辞という)。「易経」には、他に卦辞、爻辞の説明の補足、および、全体の総論用の「十翼」がある。これを「伝」と呼ぶ。この十翼は孔子の作と信じられている。「繫辞」は十翼の一つで上下二編から成り、彖辞と爻辞とを説明したものである。「繫辞」とは説明の言葉をつける意である。

この中に含まれている語句が簡潔にして、しかも含蓄ある語句の多いことは、万人の認めるところで、以下に書き述べておきたい。

天尊地卑、乾坤定矣。 (繫辞上)

天は尊く地は卑くして乾坤定まる。

天は高く、地は低い。その天地の姿にかたどって、易の乾の卦と坤の卦との位置が決まってくる。一般の社会においても、高き者と低き者それぞれにその地位が定まれば、それによってその社会全体が安定する。

乾道成男、坤道成女。 (繫辞上)

乾道は男を成し、坤道は女を成す。

「乾」は積極性の道であり、「坤」は消極性の道である。その乾道は男子としての性格をそなえ、坤道は女子の性格を持つ。たとえば、創始し、やりとおすという力は、男の多くが持つべきであり、これを受けて完成し守り抜くという力は、女子に多く備わっているものである。

乾以易知、坤以簡能。 (繫辞上)

乾は易を以て知り、坤は簡を以て能くす。

「乾」は平易な道をもってすべてのことをなし、「坤」は簡単な道をもって万事をよく整えていく。乾の性は陽気で単純だからであり、坤の性は柔順だからである。「知」はつかさどるという意味。

易簡而天下之理得矣。 (繫辞上)

易簡にして天下の理得。

物事を複雑に考えず、また困難なものとしても考えず、平易簡単、単刀直入に直視するとき、天下の真理をつかむことができる。

易與天地準。故能弥綸天地之道。 (繫辞上)

易は天地と準ず。故に能く天地の道を弥綸す。

易の教えは天地の道とあい並び、これに準ずるものである。それゆえに易の教えはまた天地の道をととのえおさめる唯一の方法である。

仰以観於天文、俯以察於地理。 (繫辞上)

仰いでは以て天文を観、俯しては以て地理を察す。

天体の実相、地上の万象を観察して、人事をさとる。「天文」は日月、星辰のようす。「地理」は山川草木等の状況。〔この故に幽明(目に見えるものと見えないもの)の故を知る〕

精気為物、遊魂為変。 (繫辞上)

精気は物と為り、遊魂は変を為す。

陰精と陽気が集って物質を作り、遊魂と降魄が散じて変化を作る。すべての物は、陰と陽、精と気が組み合わさってでき、その陰陽精気が極ると、内にある魂魄が飛び散り、新たな変化を生ずるという。

天命を悟ってこれに安んじ、これを楽しむ。その心の構えのできたとき、人に憂いはなくなる。

盛德大業至矣哉。（繫辞上）

盛德大業至れるかな。

道德も立派にでき上がり、その道德からあらわれた事業も盛大の極みだ。（德業をたたえたことば）

富有之謂大業、日新之謂盛德。（繫辞上）

富有之れを大業と謂い、日新之れを盛德と謂う。

大事業を豊富に成し遂げることを大業といい、日一日ごとにわが学術を新たに進歩せしめることを盛德というのである。

生生之謂易。（繫辞上）

生生之れを易と謂う。

天地自然の姿を見ると、陽は陰を生じ、陰は陽を生じ、交替変化してやまない。その陰陽の変化を易というのである。易では、人間界の生死、盛衰もこの理に従っているものと解する。

易簡之善配至德。（繫辞上）

易簡の善は至德に配す。

易の易簡の善、すなわち乾坤の平易簡単の道は、聖人至上の德に通じる。

易聖人所以崇德而広業也。（繫辞上）

易は聖人の德を崇くして業を広むる所以なり。

易の教えは、聖人を助けてその德性を高め、その事業を拡大するものである。（孔子のことば）

天地設位、而易行乎其中矣。（繫辞上）

天地位を設けて、易其の中に行なわれる。

天は高きに位置し、地は低きに位置する、そして、易すなわち、陰陽万象の交替変化はその天地の間に行われる。

言行君子之枢機。（繫辞上）

言行は君子の枢機なり。

言行は君子の運命を決定する重要機能である。その機能の発動は君子が栄誉を得るか恥辱をこうむるかを決定する要因となる。

枢機之発、栄辱之主也。（繫辞上）

枢機の發は、栄辱の主なり。

前項を参照。枢機は物事の大切な所。機は、石弓の引き鉄のこと。国家の要職をいう。

二人同心、其利断金。（繫辞上）

二人心を同じうすれば、其の利、金を断つ。

甲乙二人が本当に同心一体になれば、その鋭利さは、堅い金属をも断つことができる。またその二人が真に心を同じくしていけば、その互いのことばは誠に芳しい、蘭の香りの如きものがある。

「断金の交わり」「金蘭の交わり」の語源。「同心の言は、其の臭(か)蘭の如し」と同意である。

謙也者、致恭以存其位者也。（繫辞上）

謙とは恭を致して、以って其の位を存する者なり。

謙であるということは、まず自分の行いに慎みをもち、それによって、現在立つ自分の地位を保全するものである。

乱之所生也、則言語以為階。（繫辞上）

乱の生ずる所は、則ち言語以て階を為す。

乱が生じる糸口は、人々のことばの用い方にある。だから、ことばは慎まなければならない。「階」は、物事が生じる糸口」。

幾事不密則害成。（繫辞上）

幾事密ならざるときは、則ち害成る。

運命を定めるような機密のことを、やたらに他にもらせば、必ず害を引き起こす。

慢蔵誨盗。（繫辞上）

蔵を慢にすれば、盗を誨う。

物を大切にしまっておかなければ人の盗心を誘発する。「慢蔵」は、しっかりと物をしまうことを怠ること。

冶容誨淫。（繫辞上）

冶容は淫を誨う。

ことさらになまめかしい姿を見せることは、人のみだら心を挑発する。「冶容」は妖艶な容姿。

開物成務。（繫辞上）

物を開き務めを成す。

易道は、吉凶を占ってものを開発し、すべての仕事を成し遂げさせるものである。「開物成務」の語源。

退蔵於密。（繫辞上）

退いて密に蔵す。

有為の人は、天下が平穏であれば、活動をやめてひそかに身を隠す。そうして、事あればまた出て世に尽くすために、自らの徳を養う。

易有太極、是生両儀。（繫辞上）

易に太極あり、是れ両儀を生ず。

易には、まず「太極」がある。太極は宇宙の根元であって、道といってもよいし、理といってもよい。その太極から、陰と陽の一対が生じた。この、二つの相並ぶもの、すなわち陰と陽が「両儀」である。

陰と陽とはそれぞれ大小二つに分かれて、大陽・小陽、大陰・小陰を生じた。これが「四象」である。この四象の組み合わせから易のいわゆる「八卦」ができてくる。これは易の成立を述べたもので、同時にまた宇宙生成の経過を述べたものといわれている。（十一・十六頁を参照）

（両儀、四象を生じ、四象、八卦を生ず。八卦、吉凶を定む）

書不盡言、言不盡意。（繫辞上）

書は言を尽くさず、言は意を尽くさず。（盡＝尽）

文字で書いた物は言い表したいことばを全部書きつくすことはできない。また、ことばは、心意を全部言い尽くすことはできない。（孔子のことば）

形而上者謂之道、形而下者謂之器。（繫辞上）

形よりして上なる者、之れを道と謂い、形よりして下なる者、之れを器という。

天地宇宙の間には、形のあるものと形のないものとがある。五感によってとらえられるものは形より下にあるもので、器といわれ、それ以上のものは、形のないもので、道という。

現象を超えたもの、または現象の背後にあるもの、根元的なものを研究対象とする学問を「形而上学」と呼ぶのは、これから起こった。

黙而成之、不言而信。存乎徳行。（繫辞上）

黙して之れを成し、言わずして信あるは、徳行に存す。

黙して語らずとも、成績が上がり、ことばを発しなくとも、人の信任を受ける。それはその人の徳行によるものだ。

天地之大徳曰生。（繫辞下）

天地の大徳を生と曰う。

天地の徳のうち、最も大いなるものを生という。

それは万物の生を遂げさせようとして生成発達させてやまないものである。人の道もまた、物を生かそうとする考えを根本とすべきだ。そして、それを実現するものが聖人の宝位、つまり天子の位である。

「天地の大徳を生と曰う」を参照。

何以守位、曰仁。（繫辞下）

何を以てか位を守る、仁と曰う。

一番の宝は天子の位であるが、その位は何によって守るか。それは仁の道である。「天地の大徳を生と曰う」を参照。

何以聚人、曰財。（繫辞下）

何を以てか人を聚むる、財と曰う。

なにをもって人を集めるか。それは散財である。財は材であり、また富である。財を散じ与えることによって人は集る。「天地の大徳を生と曰う」を参照。

窮則変、変則通。（繫辞下）

窮すれば則ち変じ、変ずれば則ち通ず。

何事も、窮すれば必ず変化が生じ、変化が起これば必ず通じる道が生じてくるものだ。

垂衣裳、而天下治。（繫辞下）

衣裳を垂れて、天下を治まる。

天子がただ衣装を垂れる、つまり威儀をととのえているだけで、よく治まっている。

無為の善政をいう。乾坤易簡（けんこんいかん）の道にのっとった黄帝（こうてい）、堯（ぎょう）、舜（しゅん）の治世を指す。

上古結縄而治。後世聖人易之以書契。（繫辞下）

上古は結縄して治まる。後世の聖人之れに易うるに書契を以ってす。

昔は文字がなかったので、約束をする場合に縄を結んで約束のしるしとした。後世の聖人は、結縄に変えて文字を使用した。「契」は割符（わりふ）、つまり一つのものを二つに割り、甲乙の両者がこれを持ち、それを合わせて約束のしるしとしたものであるが、後には単に文字のことをも書契（しょけい）というようになった。

一君而二民、君子之道也。（繫辞下）

一君にして二民なるは、君子の道なり。

一人の君子で二人以上の民を治めるのが一番良い政治の姿である。二つの首があっては、国は治まらない。

尺蠖之屈、以求信也。（繫辞下）

尺蠖の屈は、以て信を求むるなり。

尺取虫がからだを曲げるのは、伸びようとする準備である。「信」は「伸」に通じる。つまり、人間もまた一時の不遇は、他日の発展の基礎づくりとなるものだ。

竜蛇之蟄、以存身也。（繫辞下）

竜蛇の蟄は、以て身を存するなり。

竜や蛇が冬蟄居（ちっきょ）するのは、それによって永く身を保存するためである。人もある時には退いて守らねばならぬことがある。

非所據而據焉、身必危。（繫辞下）

据るべき所に非ずして据るときは、身必ず危うし。

身を寄せてはならないところに身を寄せると、必ず身に危険が及ぶ。出処進退は、よくよく意を用いなければならない。（據→据）

待時而動。（繫辞下）

時を待ちて動く。

時機を待ち、好機をとらえて行動する。君子たる者はその時機まで、必要な準備をして、才芸を身につけておく。それが障害なく成功する道である。

善不積、不足以成名。（繫辞下）

善も積まされば、以て名を成すに足らず。

どんなよいことでも、ちょっとした善だけでは、何事をもなしえない。それを積んでいったときに、初めて名をなすことができる。

危者安其位者也。（繫辞下）

危うしとする者は其の位を安んずる者なり。

問題にぶつかった場合に、これは危険なものだと深く注意もつことが、自分の地位を安定させる方法だ。物事を軽々しく考えてはいけない。（孔子のことば）

安而不忘危。（繫辞下）

安けれども危うきを忘れず。

現在が安泰であるといっても、いつ危ないことが起こるかもしれないという注意を忘れてはいけない。其の心掛けが身の安全、国の安全には必要だ。

存而不忘亡。（繫辞下）

存すれども亡を忘れず。

国家にせよ、他の物にせよ、いま存在していても、いつ亡びるかもしれない、いつなくなるかもしれない、ということを常に忘れないようにしなければならない。

治而不忘乱。（繫辞下）

治まれども乱を忘れず。

いま太平であるからといって、いつ乱世にならぬとも限らない、ということを忘れてはならない。

力小而任重、鮮不及矣。（繫辞下）

力小にして任重きものは、及ばざること鮮なし。

力が小さいにもかかわらず任務の重いものは、大抵、災いに及ぶものである。（孔子のことば）

知機其神乎。（繫辞下）

幾を知るは其れ神か。

物事の兆しを見て、早くも事件の起こるのを察知するのは、神というべきだろうか。（幾は起こる兆し）

見幾而作。（繫辞下）

幾を見て作つ。

君子は、ものの兆しを見たら、直ちにそれに対する適当な処置をとる。

不遠復、无祇悔。（繫辞下）

遠からずして復れば、悔いに祇ること无し。

過ちと判ったら、あまり深入りしないうちに、もとの道に戻ってくるが良い。そうすれば決して後悔にいたることはない。過ちを繰り返さず、また過ちを改めるのをためらってはならない。

男女精、万物化成。（繫辞下）

男女精を構せて、万物化成す。

男と女が一体となり、精力を合わせたとき、そこに万物が生まれてくる。

彰往而察来。（繫辞下）

往を彰わして来を察す。

過去の事柄を明らかにし、それをもととして将来のことを推察する。それが易道の教である。

微顯闡幽。（繫辞下）

顯を微にして幽を闡く。

明らかに大きいものも、かすかな小さいものに原因があることを洞察し、また、かすかで見えないようなものも、その実体を大きく明らかに確かめていく。

時には望遠鏡を用い、時には顕微鏡を用いて物を観る。この心掛けが大事である。

「微」も「幽」も、かすかであり、目に見えないようなもの。

苦しむことは、誰も嫌うことではあるが、苦しみ窮してこそ通じてくるのである。

荷非其人、道不虚行。（繫辞下）

荷も其の人に非ざれば、道は虚しく行われず。

適当な人を得ていなければ何事にせよ、その道だけが、うまく行われるというものではない。事業の成否は人による。

危者使平。（繫辞下）

危うしとする者は平らかならしむ。

事に当ってこれは危ないと慎むような者には、むしろ平安を与える。反対に、こんなことは何でもないとあなどり軽んじる者には、むしろ傾き覆くつがえらしめる。それが易の道だ。

易者使傾。（繫辞下）

易る者は傾かしむ。

「危うしとする者は平らかならしむ」を参照。

中心疑者其辞枝。（繫辞下）

中心疑う者は其の辞枝る。

内心に疑いをいだいている人間のことばは、必ず其のことばのどこかに、支離滅裂（しりめつれつ）なところが出てくるものだ。「枝」は枝葉の生ずるように、まとまらないこと。

吉人之辞寡、躁人之辞多。（繫辞下）

吉人の辞は寡なく、躁人の辞は多し。

立派な人物は重厚でことばが少ない。軽薄（けいはく）で落ち着きのない人は口数が多い。

誣善之人、其辞游。（繫辞下）

善を誣うるの人は、其の辞游す。

人の悪口をいう人間、他人の善を歪曲（わいきょく）して悪口とする人間は、そのことばがどこか浮いていて、落ち着きがないところが出てくるものだ。

誣＝①・・・しいる＝あざむく、いつわる、だます。

②・・・そしる、悪口をいう。

守者其辞屈。（繫辞下）

守りを失う者は其の辞屈す。

自分に確とした根拠を持たず、節操のない人のことばは、どこかいじけたところがあるものだ。

あとがき

四年間に亘る敵弾飛来の戦陣生活を回顧すると、結果的、結論的に感じることは、「進むことを知って退くことを知らず」であった。このことは【乾】の記事の中で記述した『亢竜』の「亢」である。この原文では〔亢之為言也〕「知進而不知退」と書いてある。前に進むことだけを知っていて、後ろに退くことを知らない。このことは易経の「乾卦」にある如く、猪武者(いのしし武者)のことである。大東亜戦争(太平洋戦争)勃発以来の日本陸海軍の行動は将(まさ)にこの通りであった。

人間社会というものは凡て歴史の上に立っており、そして現在を経て将来に亘っている。現在の時点が最も重要であるが、過去を無視することはできない。そして未来を考慮しないわけにもゆかない。過去、現在、未来は一貫したものである。未来は未知であるが、過去は明瞭である。そして過去、すなわち歴史は、将来の指標である。

戦後の我が日本国は平和国家を宣言して戦争を放棄した。しかし、世界各国は戦争を放棄していない。その結果、我々は好むと好まざるにかかわらず、人類が生存するかぎり、形こそ変わることがあっても、永久に戦争は続くものである。戦争は避けられない運命なのである。

未来を知ることができれば、これほど幸いなことはないから、人間の占いは絶えることはないだろう。科学が発達した現在でもさまざまな占いが氾濫し、新聞や雑誌に明日の運勢、これから一週間の運勢、何月何日から一ケ月の運勢・・・が書かれていると、どんな人でも思わず自分の生年月日と同じ欄に目を走らせている。どうせ頼りないこの世のことであるから、ことを占いで決めるのも一つの方法である。これなら怨むことはない。

しかし厄介なことに、人間には原因と結果とを論理的に結び付けようという心があるから、それが占いに対して、本当に当るのかどうかと疑いを起させる。占いを信じる、信じない、という二つの心の葛藤は、人間の歴史が始まって以来、今日まで続いており、まだ解決できない難問である。

我々人間は、占いを信じることと疑うこととの間をさまよって生きるほかない。それは、遊びと本気との間の彷徨(さまよい)いである。戦時中の我々のような戦った人は神国日本を信じ、その疑いは皆無であった。

この『高齢者の遊び・易占い』の拙書は、遊び心の方が本気(占い)を上回っているから「遊び」と名付けたのである。私は易経に興味をもったから、自然に易占いの道にも入ったのである。現在、私の友人の多くは高齢に達して仕事に熱中している人は少ない。その余暇を如何に過ごすかが問題であり、高齢者の友人に対する友愛の発露だと考え、各種の易学の書を読み、貧弱ながら一応まとめたのである。これによって自然に教養が身に付けば幸いだと考えております。

易経に「眇能く視、跛能く履」とあります。「すがめ(眇)」の人が物をはっきりと見ようとし、また、片足に故障があって足が使えない「あしなえ(跛)」の人が遠くに行こうとする(履)のは危険だと戒めているのは、自分の能力に余ることを行えば、禍を招くと忠告しているのです。

以上のような趣旨で拙書を書きましたから、高齢の老耄者となられました私の友人の方々も、本書はあくまでも暇つぶしの一つであり、「遊び」のつもりで御読みいただければ幸いです。

「陰陽師、身の上知らず」という故事があるように、易者は他人のことは分かっても、自分のことは分からないものである。しかし、私は自分のことも他人のことも分からない高齢に達し、易を論じる能力も無しであり、何処までも暇つぶしの一方法だと考えての頂きたい。

ただ申し上げたいことは、「この人生の終わらざる如く、易経もまた終わらざるべし」と申します。数千年も前につくられた大古典は、今日の我々の人生にそのまま適応しても誤らないほどの生命力にあふれており